

平成24～27年度高度水利機能確保基盤整備事業（出江地区）

埋蔵文化財発掘調査報告

梅ヶ瀬遺跡

屋瀬A遺跡

屋瀬B遺跡（第2次）

下田遺跡（第1次）

中切遺跡（第1次）

新神馬場遺跡（第4次）

山見遺跡（第1次）

2018（平成30）年3月

三重県埋蔵文化財センター



「伊勢國飯高郡下出江村全圖（全体）」（三重縣総合博物館所蔵）



「伊勢国飯高郡下出江村全圖（部分）」中切遺跡・新神馬場遺跡・山見遺跡周辺の状況（三重県総合博物館所蔵）



山見遺跡 S K318 遺物出土状況（西から）

例言

- 1 本書は、三重県多気郡多気町下出江に所在する梅ヶ瀬遺跡・屋瀬A遺跡・屋瀬B遺跡・下田遺跡・中切遺跡・新神馬場遺跡・山見遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、三重県農林水産部農業基盤整備課松阪農林事務所管内における平成24～27年度高度水利機能確保基盤整備事業（出江地区）に伴い実施したものである。
- 3 発掘調査および保存処理・自然科学分析業務委託は、文化庁国庫補助金を得て三重県教育委員会が一部負担し、その他を三重県農林水産部から経費の執行委任を受けて実施した。
- 4 発掘調査および整理作業・報告書作成の体制は、以下のとおりである。なお、所属・職名は当時である。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

【平成24年度（範囲確認調査）】

遺跡名 梅ヶ瀬遺跡・屋瀬A遺跡・屋瀬B遺跡・下田遺跡

調査面積 637.0㎡

調査担当 調査研究1課 課長 上村安生 主査 萩原義彦 主査 星野浩行

【平成25年度（範囲確認調査）】

遺跡名 中切遺跡・新神馬場遺跡・山見遺跡

調査面積 492.0㎡

調査担当 調査研究1課 課長 上村安生 主査 伊藤 亘 技師 櫻井拓馬

【平成26年度（本発掘調査）】

遺跡名 屋瀬B遺跡（第2次）・下田遺跡（第1次）

調査面積 1,231.2㎡

調査担当 調査研究1課 主査 伊藤 亘 技師 渡辺和仁

発掘調査土工委託 株式会社文化財サービス

【平成27年度（本発掘調査・整理作業）】

遺跡名 中切遺跡（第1次）・新神馬場遺跡（第4次）・山見遺跡（第1次）

調査面積 1,197.1㎡

調査担当 調査研究1課 主幹 嶋田元彦 技師 小原雄也

整理担当 調査研究1課 技師 渡辺和仁 技師 小原雄也

発掘調査土工委託 橋本技術株式会社

【平成27～29年度（報告書作成・保存処理・自然科学分析）】

作成担当 調査研究1課 主任 渡辺和仁（平成28～29年度） 技師 小原雄也（平成27年度）

保存処理業務委託 山見遺跡（第1次）・新神馬場遺跡（第4次）出土鉄製品：株式会社イビソク

自然科学分析業務委託 山見遺跡（第1次）出土鉄滓の鉄成分分析：新日鉄住金テクノロジー株式会社

- 5 本書は、Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ章およびⅧ章1・2・3（土器・陶磁器・土製品・石製品）・4節、Ⅷ章1・2・3（土器・陶器・土製品）・4節を小原雄也、Ⅸ章2・3節を日鉄住金テクノロジー(株)八幡事業所・TACセンター鈴木瑞穂、それ以外を渡辺和仁が執筆した。遺構写真は各調査担当者、遺物写真は渡辺・小原が撮影した。全体の編集は渡辺が行った。

- 6 発掘調査および整理作業に際しては、地元下出江地区の方々をはじめ、下記の諸氏や機関に御指導・御協力を賜った。記して感謝したい（以下敬称略、順不同、組織名は当時）。
奥 義次、米田強二、出江土地改良区、多気町立勢和保育園、多気町立勢和小学校、多気町立勢和中学校、多気町教育委員会、三重県総合博物館、三重県農林水産部
- 7 巻頭図版1・2の「伊勢国飯高郡下出江村全図（全体および部分）」（資料番号：KM00001126）については、三重県総合博物館の許可を得て掲載した（平成29年10月24日付け、三博第1-38号）。
- 8 調査図面・遺構および遺物写真・出土遺物は三重県埋蔵文化財センターが保管している。ご活用願いたい。

凡例

- 1 本書では、国土地理院発行の1:25,000数値地図（「横野」相当：平成20年10月発行）、三重県共有デジタル地図を用いた。三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合の承認を得て使用した（承認番号：平成29年4月12日付け、三総合地第1号）。
- 2 標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とした。
- 3 本書で用いた座標は世界測地系に基づくものである。方位は第VI座標系の座標北で示した。
- 4 本書で用いる遺構略号は、以下のとおりである。
SB：掘立柱建物 SE：井戸 SK：土坑 SD：溝 Pit：柱穴 SZ：道路
- 5 土層断面図における土色表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、1967年初版）に拠った。遺物観察表における土器の色調表記もこれに従う。
- 6 遺物実測図の縮尺は1：4を基本とし、遺物によってはその他の縮尺を適宜用いた。
- 7 註は章末または項末に付し、参考文献も註に記した。
- 8 遺構一覧表・遺物観察表は各章中に付した。
- 9 出土遺物観察表の凡例は、以下のとおりである。
 - ・実測番号は、当センター収蔵における遺物実測図番号である。
 - ・色調は、標準土色帖に拠る色名（例「黄橙」など）を記す。
 - ・土器の残存率は、全周を12分割して示し（例：口縁部3/12）、1/12以下のものは「口縁部小片」などと示す。
 - ・胎土の緻密さは、粗・やや粗・やや密・密の4段階である。
 - ・焼成具合は陶器・磁器・瓦のみ記し、良・やや良・やや不良・不良の4段階で示す。
 - ・計測値は完存ないし復元の値である。口径・底部径は実測時の接地面で計測した値とした。また、土器器皿の底部径は記していない。
- 10 写真図版中の遺物写真に付した番号は、各遺物の報告番号と対応する。遺物写真は縮尺不同である。
- 11 南伊勢系土師器が出土した一部の遺構の時期および南伊勢系土師器の時期については、南伊勢系土師器を中心とした中世土器の編年（伊藤2008）に拠って記した。時期区分についてもこの編年に即したものであり、暦年代観や時代との対応関係は、以下に示したとおりである。また、中世陶器・山茶碗やその他の時代における土器・陶磁器については、地域および生産地における個別の編年を用いたうえで暦年代観・時代を記し、準拠した編年については註で示した。

<南伊勢系土師器を中心とした編年>

【時期区分】	【暦年代観・時代】
中世Ⅰ期（a・b）	11世紀後半～12世紀後半：平安末期
Ⅱ期（a・b）	12世紀末～14世紀前葉：平安末～鎌倉時代
Ⅲ期（a・b）	14世紀中葉～15世紀前半：南北朝～室町時代
Ⅳ期（a・b・c）	15世紀後半～16世紀末：戦国期

※中世Ⅰ・Ⅱ期＝中世前期、中世Ⅲ・Ⅳ期＝中世後期

文献：伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史』資料編考古2 三重県 2008年

目次

巻頭図版

例言・凡例

目次

I 前言	1
II 遺跡と周辺の諸環境	7
III 範囲確認調査	10
IV 屋瀬B遺跡（第2次）	15
V 下田遺跡（第1次）	21
VI 中切遺跡（第1次）	30
VII 新神馬場遺跡（第4次）	37
VIII 山見遺跡（第1次）	47
IX 山見遺跡（第1次）出土鉄滓の分析調査	64
X 考察	76

写真図版

挿図目次

第1図 屋瀬B遺跡（第2次）・下田遺跡（第1次） 調査区配置図	4	第10図 屋瀬B遺跡（第2次）1・2区壁面土層 断面図	18
第2図 中切遺跡（第1次）・新神馬場遺跡（第4次） ・山見遺跡（第1次）調査区配置・ 地区割図	5	第11図 屋瀬B遺跡（第2次）出土遺物実測図	18
第3図 遺跡分布図	8	第12図 下田遺跡（第1次）調査区全体図	22
第4図 範囲確認調査坑位置図（1）	11	第13図 下田遺跡（第1次）1区平面図	23
第5図 範囲確認調査坑位置図（2）	12	第14図 下田遺跡（第1次）S Z 003平面図	24
第6図 範囲確認調査出土遺物実測図	14	第15図 下田遺跡（第1次）1～3区壁面土層 および遺構土層断面図	25
第7図 屋瀬B遺跡（第2次）調査区全体図	16	第16図 下田遺跡（第1次）2・3区平面図	26
第8図 屋瀬B遺跡（第2次）1区平面図	17	第17図 下田遺跡（第1次）出土遺物実測図	27
第9図 屋瀬B遺跡（第2次）2区平面図	18	第18図 中切遺跡（第1次）調査区全体図	31

第19図	中切遺跡（第1次）1・2区壁面土層断面図……………32	第33図	山見遺跡（第1次）5区平面図……………54
第20図	中切遺跡（第1次）1・2区平面図……………33	第34図	S B330平面図・掘形断面図およびS K318・319平面図……………55
第21図	中切遺跡（第1次）出土遺物実測図……………34	第35図	S K318遺物出土状況図・土層断面図・エレベーション図……………56
第22図	新神馬場遺跡（第4次）調査区全体図……………38	第36図	山見遺跡（第1次）出土遺物実測図（1）……………57
第23図	新神馬場遺跡（第4次）1・2区壁面土層断面図……………39	第37図	山見遺跡（第1次）出土遺物実測図（2）……………58
第24図	新神馬場遺跡（第4次）1・2区平面図……………40	第38図	山見遺跡（第1次）出土遺物実測図（3）……………59
第25図	S B217・S K206平面図および掘形・土層断面図……………41	第39図	椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・E PMA調査結果（1）……………72
第26図	新神馬場遺跡（第4次）出土遺物実測図……………42	第40図	椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・E PMA調査結果（2）……………73
第27図	山見遺跡（第1次）調査区全体図……………48	第41図	鍛冶滓の顕微鏡組織・E PMA調査結果（1）……………74
第28図	山見遺跡（第1次）1～3区壁面土層断面図……………49	第42図	鍛冶滓の顕微鏡組織・E PMA調査結果（2）……………75
第29図	山見遺跡（第1次）4・5区壁面土層断面図……………50		
第30図	山見遺跡（第1次）1・2区平面図……………51		
第31図	山見遺跡（第1次）3区平面図……………52		
第32図	山見遺跡（第1次）4区平面図……………53		

表目次

第1表	高度水利機能確保基盤整備事業（出江地区）に伴う埋蔵文化財調査一覧表……………1	第13表	山見遺跡（第1次）遺構一覧表……………60
第2表	範囲確認調査坑一覧表……………13	第14表	山見遺跡（第1次）出土遺物観察表（1）……………61
第3表	範囲確認調査出土遺物観察表……………14	第15表	山見遺跡（第1次）出土遺物観察表（2）……………62
第4表	屋瀬B遺跡（第2次）遺構一覧表……………19	第16表	供試材の履歴と調査項目（1）……………70
第5表	屋瀬B遺跡（第2次）出土遺物一覧表……………19	第17表	供試材の化学組成（1）……………70
第6表	下田遺跡（第1次）遺構一覧表……………28	第18表	出土遺物の調査結果のまとめ（1）……………70
第7表	下田遺跡（第1次）出土遺物一覧表……………28	第19表	供試材の履歴と調査項目（2）……………71
第8表	中切遺跡（第1次）遺構一覧表……………35	第20表	供試材の化学組成（2）……………71
第9表	中切遺跡（第1次）出土遺物観察表……………35	第21表	出土遺物の調査結果のまとめ（2）……………71
第10表	新神馬場遺跡（第4次）遺構一覧表……………44	第22表	波板状の凹凸痕跡が検出された伊勢地域における事例……………76
第11表	新神馬場遺跡（第4次）出土遺物観察表（1）……………44	第23表	南東隅土坑における出土遺物一覧表……………78
第12表	新神馬場遺跡（第4次）出土遺物観察表（2）……………45		

写真図版

- 写真図版1 屋瀬B遺跡(第2次)遺構①
調査前風景(北東から)
1区全景(北西から)
- 写真図版2 屋瀬B遺跡(第2次)遺構②
1区壁面土層(西から)
S D01完掘状況(南から)
- 写真図版3 屋瀬B遺跡(第2次)遺構③
2区全景(北東から)
2区東壁土層(北西から)
- 写真図版4 屋瀬B遺跡(第2次)遺物
遺物1・2・4~6・8・9・10
- 写真図版5 下田遺跡(第1次)遺構①
調査前風景(南から)
1区全景(東から)
- 写真図版6 下田遺跡(第1次)遺構②
1区北壁土層(南東から)
S Z003土層(南から)
- 写真図版7 下田遺跡(第1次)遺構③
2区全景(北西から)
3区西半部全景(北西から)
- 写真図版8 下田遺跡(第1次)遺構④
3区西半部全景(南西から)
3区中央部全景(西から)
- 写真図版9 下田遺跡(第1次)遺構⑤
3区東半部全景(北東から)
3区北壁土層(南西から)
- 写真図版10 下田遺跡(第1次)遺物
遺物1~13・鉄滓
- 写真図版11 中切遺跡(第1次)遺構①
調査前風景(南から)
1区調査風景(東から)
- 写真図版12 中切遺跡(第1次)遺構②
1区全景(西から)
1区全景(東から)
- 写真図版13 中切遺跡(第1次)遺構③
2区全景(東から)
S E110土層(南西から)
- 写真図版14 中切遺跡(第1次)遺構④
S K103完掘状況・土層(北から)
S K108完掘状況・土層(北から)
- 写真図版15 中切遺跡(第1次)遺物
遺物6・7・9・10・15・16・18
- 写真図版16 新神馬場遺跡(第4次)遺構①
調査前風景(南西から)
2区全景(西から)
- 写真図版17 新神馬場遺跡(第4次)遺構②
1区全景(北から)
- 写真図版18 新神馬場遺跡(第4次)遺構③
S D203完掘状況(西から)
S B217・S K206完掘状況(南から)
- 写真図版19 新神馬場遺跡(第4次)遺物①
遺物8・17・18・21・28・34・36
- 写真図版20 新神馬場遺跡(第4次)遺物②
遺物22~27・42・43・44
- 写真図版21 山見遺跡(第1次)遺構①
五箇橋山城跡からの遠景(南から)
調査前全体風景(西から)
- 写真図版22 山見遺跡(第1次)遺構②
3区調査前風景(南から)
5区調査前風景(東から)
- 写真図版23 山見遺跡(第1次)遺構③
5区調査風景(南西から)
遺跡見学の様子(南から)
- 写真図版24 山見遺跡(第1次)遺構④
2区全景(西から)
3区全景(北から)
- 写真図版25 山見遺跡(第1次)遺構⑤
4区全景(東から)
5区全景(西から)
- 写真図版26 山見遺跡(第1次)遺構⑥
5区全景(北から)
- 写真図版27 山見遺跡(第1次)遺構⑦
S K318遺物出土状況(西から)
S K318遺物出土状況(北から)
- 写真図版28 山見遺跡(第1次)遺構⑧
S K318完掘状況(西から)
S B330・S K318完掘状況(北から)
- 写真図版29 山見遺跡(第1次)遺物①
遺物1・2・6・13・14・16・36・37
- 写真図版30 山見遺跡(第1次)遺物②
遺物32・47・52・57・66・70・88
- 写真図版31 山見遺跡(第1次)遺物③
遺物80~84・94・98・99

I 前 言

1 調査の経緯と経過

(1) 総説

本書で報告する内容は、平成24～27年度高度水利機能確保基盤整備事業（出江地区）に伴って実施した埋蔵文化財の記録保存にかかるとものである。当事業の主体は三重県農林水産部、実施機関は松阪農林事務所農村基盤室（以下、松阪農林）である。事業全体の対象面積は約330,200㎡であり、三重県埋蔵文化財センターが、事業地内における範囲確認調査および本発掘調査を平成24～27年度にかけて実施した。

(2) 調査に至る経緯

事業対象面積が広大であったため、実施機関である松阪農林と協議の結果、平成24・25年度に事業地内での遺構・遺物の有無確認と調査範囲の把握を目的とした範囲確認調査を実施した。

範囲確認調査は、事業地内に195箇所の調査坑を設けて行った。その結果、周知の埋蔵文化財包蔵地および、その外でも遺構・遺物が確認されたことから、新たな埋蔵文化財包蔵地として「下田遺跡」を把握した。また屋瀬B遺跡・山見遺跡・中切遺跡・新神馬場遺跡については、それぞれ遺跡の範囲拡大を行った。

範囲確認調査の結果、計2,428.0㎡が要本発掘調査範囲と判断されたことから、松阪農林と協議を行い、当事業地における田面には極力保護層を確保するように図り、農業集落道路および幹線水路の計画線上を本発掘調査の対象地とした。

これを受けて、平成26年度は屋瀬B遺跡（第2次）・下田遺跡（第1次）、平成27年度は中切遺跡（第1次）・新神馬場遺跡（第4次）・山見遺跡（第1次）について本発掘調査を行った。

なお、当事業に伴う埋蔵文化財にかかる調査の実

第1表 高度水利機能確保基盤整備事業（出江地区）に伴う埋蔵文化財調査一覧表

調査名	調査種別	調査期間	調査面積	調査坑・調査区	検出遺構	
梅ヶ瀬遺跡	範囲確認	平成25年3月6日～平成25年3月12日	計637.0㎡	調査坑№93～96	事業地内に計113箇所の調査坑を設定して実施。遺構・遺物が確認された約1,231.2㎡（屋瀬B遺跡・下田遺跡）を要本発掘調査範囲と判断	
屋瀬A遺跡				調査坑№60～63		
屋瀬B遺跡				調査坑№38～46・48～58・68・77・79		
下田遺跡				調査坑№1～4・6・7・10～12・26～28・31		
中切遺跡	範囲確認	平成25年10月1日～平成25年10月18日	計492.0㎡	調査坑№138～143・146・155～157・168・170～175・178～196・200～210	事業地内に計82箇所の調査坑を設定して実施。遺構・遺物が確認された約1,197.1㎡を要本発掘調査範囲と判断	
新神馬場遺跡				調査坑№162		
山見遺跡				調査坑№102・114～134		
屋瀬B遺跡（第2次）	本発掘	平成26年9月17日～平成26年12月26日	584.2㎡	1・2区	時期不明の溝などを検出	
下田遺跡（第1次）				647.0㎡	1～3区	室町～江戸時代の溝、時期不明の道路1条などを検出
中切遺跡（第1次）	本発掘	平成27年9月18日～平成28年1月22日	206.9㎡	211.1㎡	1・2区	江戸時代の井戸1基、土坑6基などを検出
新神馬場遺跡（第4次）				779.1㎡	1・2区	鎌倉～室町時代の掘立柱建物1棟、土坑などを検出
山見遺跡（第1次）				779.1㎡	1～5区	平安時代末期～鎌倉・江戸時代の掘立柱建物1棟、土坑などを検出

施状況については、第1表でまとめた。

(3) 調査の経過

各遺跡の本発掘調査期間は、屋瀬B遺跡(第2次)・下田遺跡(第1次)が、平成26年9月17日～平成26年12月26日、中切遺跡(第1次)・新神馬場遺跡(第4次)・山見遺跡(第1次)が、平成27年9月18日～平成28年1月22日であった。

各遺跡における本発掘調査の経過については、以下の調査日誌(抄)で示す。

発掘調査日誌(抄)

【屋瀬B遺跡(第2次)・下田遺跡(第1次)】

平成26年

- 9月17日 調査準備開始。
- 10月7日 下田遺跡1区西半の表土掘削開始。
15日 下田遺跡1区西半から遺構検出・掘削開始。東半については表土掘削継続。
16日 下田遺跡1区東半の表土掘削完了。3区の表土掘削開始。
22日 下田遺跡3区の表土掘削完了。
28日 下田遺跡3区の遺構検出・掘削開始。
屋瀬B遺跡2区の表土掘削開始。
30日 下田遺跡1区の実測完了。屋瀬B遺跡2区の表土掘削完了。
- 11月4日 屋瀬B遺跡1区の表土掘削開始。
7日 屋瀬B遺跡2区の遺構検出・掘削開始。
1区東半の表土掘削完了。
10日 屋瀬B遺跡1区の東半から遺構検出・掘削開始。
11日 屋瀬B遺跡1区の表土掘削完了。
13日 屋瀬B遺跡1区の実測完了。
17日 屋瀬B遺跡2区の実測完了。
20日 下田遺跡3区の補足調査・実測完了。
21日 下田遺跡2区の表土掘削・遺構検出・掘削・実測完了。
- 11月25日 現地撤収完了。
12月26日 発掘調査終了。

【中切遺跡(第1次)・新神馬場遺跡(第4次)・山見遺跡(第1次)】

平成27年

- 9月18日 調査準備開始。
10月6日 中切遺跡1・2区の表土掘削開始。2区表土掘削完了。
8日 中切遺跡1区の表土掘削完了。
13日 中切遺跡1区の遺構検出・掘削開始。
14日 中切遺跡2区的全景写真撮影。1区の遺構検出開始。
16日 中切遺跡1区の遺構掘削完了。
19日 中切遺跡1区的全景写真・遺構写真撮影完了。
20日 中切遺跡1区の実測完了。2区の埋戻し完了。
22日 中切遺跡1区の埋戻し完了。
23日 新神馬場遺跡2区の表土掘削開始。
24日 新神馬場遺跡1区の表土掘削開始。
27日 新神馬場遺跡1・2区の表土掘削完了。
28日 新神馬場遺跡2区の遺構検出・掘削開始。
29日 新神馬場遺跡2区の遺構掘削完了。1区の遺構検出完了。
30日 新神馬場遺跡SK206から土器が多量に出土。
- 11月4日 SK206掘削完了。
5日 新神馬場遺跡1・2区的全景写真撮影・実測完了。
9日 山見遺跡1・2区の表土掘削開始・完了。
10日 山見遺跡5区の表土掘削開始。2区の遺構検出・掘削開始。土坑からクロロ土師器などの遺物が多量に出土。
12日 山見遺跡3区の表土掘削開始。2区の遺構掘削開始。
13日 山見遺跡3区の表土掘削完了。1・2区的全景写真撮影。5区の遺構検出時に磨製石斧が出土。
17日 新神馬場遺跡の調査区埋戻しは、雨天の影響により延期を判断。
25日 山見遺跡SK318を検出。土師器などが多く出土。

- 27日 山見遺跡SK318について遺構の重複がないか精査し、土坑1基と判断。
- 30日 山見遺跡SK318北側で完形の土器が多く出土。
- 12月1日 山見遺跡SK318の出土状況写真撮影・実測完了。
- 2日 山見遺跡SK318の完掘。1・2区の埋戻し完了。4区の遺構掘削開始。
- 4日 山見遺跡4区の遺構掘削完了。3区の遺構検出開始。
- 7日 山見遺跡5区の全景写真撮影。3区の遺構掘削開始。縄文土器片が出土。
- 9日 山見遺跡3区の遺構掘削完了。
- 12日 地元を対象に山見遺跡発掘調査現場公開を実施（午前）。60名が参加。
- 16日 多気町立勢和小学校4年生調査現場見学。51名が参加。
- 17日 山見遺跡全調査区の実測など記録作業完了。
- 25日 山見遺跡など全調査区の埋戻し完了。現地撤収完了。

平成28年

- 1月22日 発掘調査終了。

(4) 文化財保護法にかかる法的措置

高度水利機能確保基盤整備事業（出江地区）にかかる埋蔵文化財の文化財保護法等に関係する法的措置は、下記のとおりである。

- 文化財保護法第94条に基づく県埋蔵文化財保護条例第48条第1項「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」（県教育委員会教育長あて三重県知事通知）
・平成25年2月26日付け、松農環第4488号
- 文化財保護法第99条第1項（県教育委員会教育長あて埋蔵文化財センター所長通知）
[屋瀬B遺跡・下田遺跡]
・平成26年9月24日付け、教理第216号
[中切遺跡・新神馬場遺跡・山見遺跡]
・平成27年9月18日付け、教理第193号
- 文化財保護法第100条第2項「埋蔵文化財の発見・認定について」（松阪警察署長あて県教育委員会

教育長通知）

[屋瀬B遺跡]

・平成26年12月26日付け 教委第12-4428号

[下田遺跡]

・平成26年12月26日付け 教委第12-4427号

[中切遺跡]

・平成28年2月12日付け 教委第12-4425号

[新神馬場遺跡]

・平成28年2月12日付け 教委第12-4426号

[山見遺跡]

・平成28年2月12日付け 教委第12-4427号

(5) 普及公開

[平成26年度]

・発掘成果報告会「おもろいもん出ましたんやわ @三重2014」（於：三重県埋蔵文化財センター嬉野分室）平成27年3月14日（土）

[平成27年度]

- ・山見遺跡発掘調査現地公開（地元対象）
平成27年12月12日（土）参加者：60名
- ・多気町立勢和小学校4年生現場見学
平成27年12月16日（木）参加者：51名
- ・発掘成果報告会「おもろいもん出ましたんやわ @三重2015」（於：三重県埋蔵文化財センター嬉野分室）平成28年3月12日（土）

2 調査の方法

(1) 調査区の設定

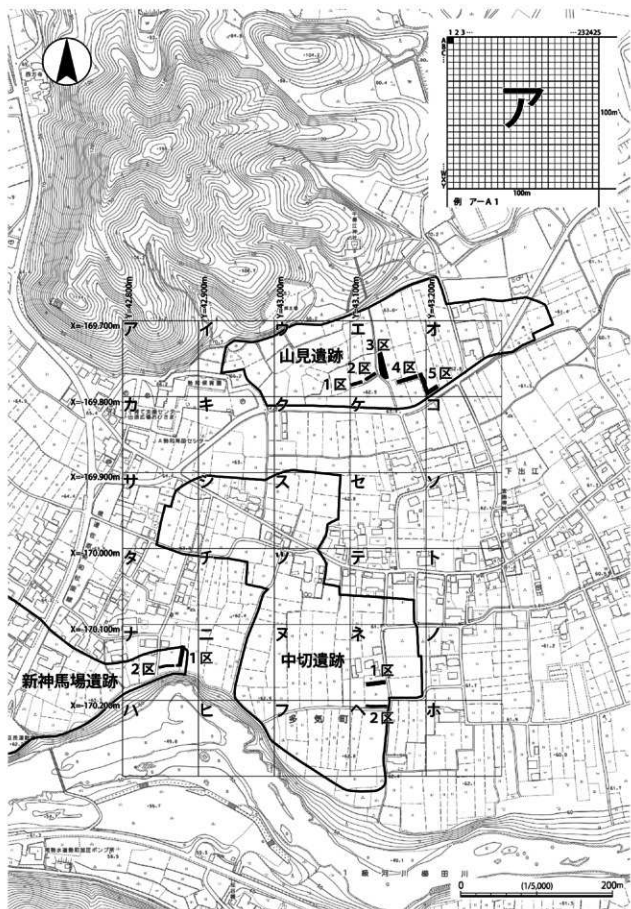
調査区は、範囲確認調査で判断された各遺跡の要本発掘調査の対象範囲内に設定した（第1・2図）。事業地内の各遺跡・各調査区は広範に点在する状況であり、全体を網羅する地区割の設定が困難な状況であったため、各遺跡の発掘調査によって、地区割の方法が異なっている。

屋瀬B遺跡（第2次）・下田遺跡（第1次）では、各調査区単位に、東西をアルファベット（A・B・C…）で、南北を数字（1・2・3…）で分割した4m四方の小地区割のみを行い、北西隅を起点とする地区名（例：A1など）を与えた。

中切遺跡（第1次）・新神馬場遺跡（第4次）・山見遺跡（第1次）では、各調査区を網羅する大地区



第1図 屋瀬B遺跡（第2次）・下田遺跡（第1次）調査区配置図



第2図 中切遺跡（第1次）・新神馬場遺跡（第4次）・山見遺跡（第1次）調査区配置・地区割図

を設定したうえで、小地区割を行った。大地区は、世界測地系（第VI座標系）X=-169,700m、Y=42,800mを原点として100m四方に配置し、ア～ホの名称を付与した。大地区内は東西を1～25、南北をA～Zにそれぞれ25分割し、4m四方の小地区を設けた。地区名については、大地区・小地区ともに北西隅が起点とする名前（例：ネー-T10など）とした。

（2）遺構検出・掘削

表土から遺構面までの堆積土を重機（バックホー）で除去し、遺構検出・掘削は人力で行った。なお、重機は下層確認用のサブレンチの掘削で補助的に用いている。

（3）記録・図化

遺構実測は調査員（当センター職員）による手測りである。遺構検出段階は、小地区単位の1/40略測図（遺構カード）を作成し、これをもとに1/100の遺構配置図を作成することで、調査区全体の遺構の位置関係を把握した。

遺構平面図・土層断面図については、原則1/20で手描き実測を行った。また、各遺構の詳細な平面図・断面図・エレベーション図は、1/10の手描き実測を作成し、状況に応じて適宜その他の縮尺で図化作業を行った。

遺構番号はピットを除き、全てに通し番号を付与した。なお、本書における遺構番号は、屋瀬B遺跡（第2次）・下田遺跡（第1次）では、調査時における遺構番号から修正と訂正を行っており、中切遺跡（第1次）・新神馬場遺跡（第4次）・山見遺跡（第

1次）では、調査時の番号をそのまま用いている。

- ・屋瀬B遺跡（第2次）：01・02番
- ・下田遺跡（第1次）：001～022番
- ・中切遺跡（第1次）：101～115番
- ・新神馬場遺跡（第4次）：201～217番
- ・山見遺跡（第1次）：301～332番

ピットの遺構番号は、各遺跡の調査区における小地区ごとの通し番号としているが、掘立柱建物の柱穴については、「例：SB217-Pit2」のように表記することとした。

遺構写真は、調査区全景や重要な個別遺構については6×9判（モノクロ・カラーリバーサル）で撮影し、35mm判（モノクロ・カラーリバーサル）またはデジタル一眼レフカメラ（35mmフルサイズ相当）およびコンパクトデジタルカメラを補助的に用いた。使用したカメラは、6×9判がウィスタ、35mm判がニコンFM2、デジタル一眼レフカメラがニコンD3300である。遺物の写真撮影は、デジタル一眼レフカメラのニコンD800Eを用いた。

なお、これらの図面・写真フィルム・デジタルデータ・作業日誌の記録類一式は、当センターで保管している。

（4）出土遺物の整理

出土遺物は、出土年月日と遺構・層位の区別を行い、小地区単位で取りあげた。整理作業終了後は、報告書掲載遺物およびその参考資料（A遺物）と未掲載遺物（B遺物）に区分して保存した。

II 遺跡と周辺の諸環境

1 位置と地形

多気郡多気町は三重県のほぼ中央に位置しており、平成18年に旧多気町と旧勢和村の合併に伴い誕生した¹¹⁾。調査地がある下出江は旧勢和村にあたり、周囲では榑田川中流域の河岸中位段丘が発達した地形が広がる(第3図)。榑田川は下出江辺りで大きく南へ張り出しており、この一帯を東西に中央構造線が通り、北側は内帯、南側は外帯に分類される。内帯は顕家帯構成岩類の花崗閃緑岩など、外帯は三波川帯構成岩類の結晶片岩類などが分布する。

中央構造線沿いには浅熱水性鉱脈が形成され、水銀の原料である辰砂を産出する特徴がある。旧勢和村の丹生地区を中心として水銀採掘坑(30)が広がり、近年の調査では481箇所で古代～近代の採掘坑や鉱石といった関連遺物が確認された¹²⁾。採掘坑の詳細な時期決定は今後の課題であるが、露天掘りものは縄文～平安時代、坑口が狭い堅坑や斜坑は古代以降とされる。後述する古代・中世の文書からも当地域と水銀生産との結びつき、それを取り巻く地域との動向は密接に関係することがわかる。

2 歴史的環境

調査対象の梅ヶ瀬遺跡(1)、屋瀬A遺跡(2)、屋瀬B遺跡(3)、下田遺跡(4)、中切遺跡(5)、新神馬場遺跡(6)、山見遺跡(7)では、縄文時代、平安時代末～中・近世の遺構・遺物が確認された。周辺地域も含め、縄文時代～近世の歴史的環境をまとめる(以下、第3図)。

(1) 縄文時代

榑田川流域では縄文時代の遺跡が数多く確認されている。草創期の遺跡は北新木遺跡(8)、コバサマB遺跡(9)があり、木葉形尖頭器や茎尖頭器が採集された。早期の遺跡は中広A遺跡(10)、ニコ谷遺跡(11)があり、押型土器や石鏃・播器などが採集された。前期の遺跡にはアカリ遺跡(12)で土坑が検出され、土器のほかにはサヌカイトの剥片

が数多く出土している¹³⁾。隣接する緑通庵遺跡(13)においても、前期後葉の土器・石器がある¹⁴⁾。中期の遺跡には浜井場遺跡(14)があり、中期前葉～中葉を中心とした土器が確認できる。ソウダ遺跡(15)では中期～後期とされる石棒が2点採集された。後期の遺跡は宮切遺跡(16)、井尻遺跡(17)、新神馬場遺跡(6)がある。井尻遺跡の調査では、後期初頭～前葉の配石土坑や埋設土器などが検出された。石器には石鏃・石錐・石匙のほか切目石鏢が多い特徴がある¹⁵⁾。上出江の宮切遺跡は後期前葉の土器が中心で、井尻遺跡と同様に切目石鏢が多く見られる。下出江の新神馬場遺跡は、昭和41・42年に県立津高等学校地歴部が第1～3次調査を実施しており、明確な遺構は確認されなかったものの、後期後葉～末葉の土器・石器を中心とした遺物が確認された¹⁶⁾。石器の石材組成は在地のチャートが少なく、サヌカイトの使用が多くを占めている。晩期の遺跡は殿垣内遺跡(18)があり、朱付着石皿が出土したことが特筆される。榑田川流域では後期の新徳寺遺跡、晩期の大原遺跡や奥ホリ遺跡、磯田畑遺跡において朱が付着した磨石や石皿、辰砂原石が確認された。

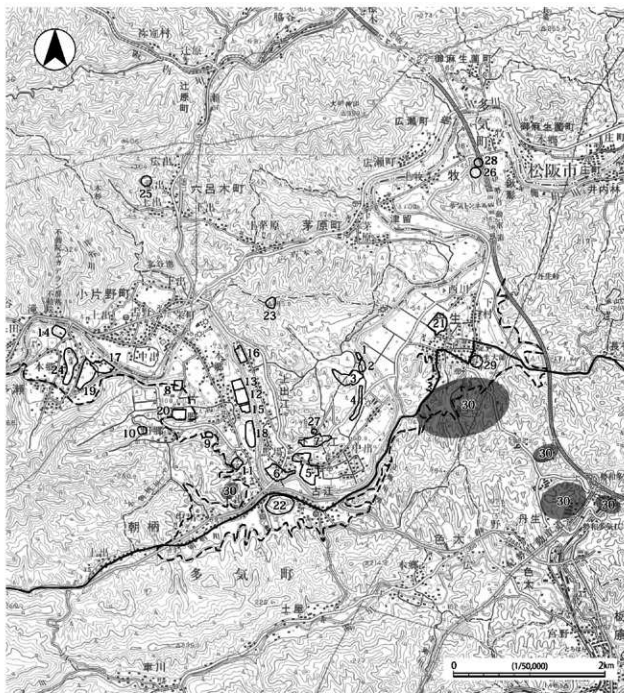
(2) 弥生・古墳時代

アカリ遺跡(12)は弥生時代中期後半の堅穴住居11棟、掘立柱建物1棟、方形周溝墓1基が確認された。松葉遺跡(19)は中期後半の土器棺が出土している。南新木遺跡(20)では石包丁が採集された。

古墳時代の遺跡は下出江周辺の様相は掴めていない。榑田川沿いでは多気町相可周辺に大日山古墳群、権現山古墳群、河田古墳群などが展開する。

(3) 古代

奈良～平安時代の遺跡は、調査例が少なく様相が掴めていない。文献史料では『続日本紀』に和銅6(713)年5月11日条に伊勢国から水銀が献上された記録があり、具体的な産地の記載はないものの丹生周辺から産出された朱砂や水銀とみられる。『延喜式』には、内蔵寮「諸国年料供進」や民部下「交易雑物」に「伊勢国水銀四百斤」とあり、丹生産の朱砂や水銀を示すものと指摘される¹⁷⁾。このように、



周辺遺跡一覧

- | | | | | |
|-----------|------------|-------------|---------------|------------|
| 1. 梅ヶ瀬遺跡 | 2. 屋瀬A遺跡 | 3. 屋瀬B遺跡 | 4. 下田遺跡 | 5. 中切遺跡 |
| 6. 新神馬場遺跡 | 7. 山見遺跡 | 8. 北新木遺跡 | 9. コバサマB遺跡 | 10. 中広A遺跡 |
| 11. ニコ谷遺跡 | 12. アカリ遺跡 | 13. 緑通庵遺跡 | 14. 浜井場遺跡 | 15. ソウダ遺跡 |
| 16. 宮切遺跡 | 17. 井尻遺跡 | 18. 殿垣内遺跡 | 19. 松葉遺跡 | 20. 南新木遺跡 |
| 21. 若宮A遺跡 | 22. 五箇笹山城跡 | 23. 五箇笹山廓城跡 | 24. 波多瀬城跡 | 25. 六呂木城跡 |
| 26. 牧城跡 | 27. クビリ中世墓 | 28. 鉢形中世墓群 | 29. 神宮寺(丹生大師) | 30. 水銀採掘坑群 |

凡例 水銀採掘坑群  和歌山別街道  立梅用水 

第3図 遺跡分布図

丹生を中心に活発な地域交流があったと推定され、周辺地域で集落や街道が展開したと考えられる。

(4) 中世

鎌倉時代以降になると集落遺跡の調査例が増加する。アカリ遺跡(12)、緑通庵遺跡(13)、殿垣内遺跡(18)、松葉遺跡(19)には鎌倉時代～戦国期の掘立柱建物や区画溝などがある。丹生の若宮A遺跡(21)では、土師器甕の付着物から多くのヒ素と少量の水銀が検出され、水銀精錬の痕跡と指摘される⁽⁹⁾。

中世には丹生で全国でも唯一となる水銀座が形成され、水銀の専売権や諸国往還の自由が保証されていた。古くは『皇太神宮建久三年已下古文書』に水銀座の記述があり、建久6(1195)年に水銀座の寄人藤井国遠が外宮領の水越御園の押領と御生園神人への狼藉で訴えられている。13世紀末以降になると水銀座に関する文献が確認できなくなる。丹生における水銀座や水銀商人の活動は、鎌倉時代までが中心となり、以降は水銀の生産量の減少による衰退や、生産体制の変容といった状況が指摘される⁽⁹⁾。

城館跡は五箇篠山城跡(22)、五箇篠山羅城跡(23)、波多瀬城跡(24)、六呂木城跡(25)、牧城跡(26)がある。クビリ中世墓(27)は、千尋江神社境内の塚状地に複数の五輪塔が集積されている。鉄形中世墓群(28)では、14世紀後半～16世紀後半の配石墓11基と集石墓2基が確認された⁽⁹⁾。

(5) 近世

近世の状況については、文献資料による成果が大きい。文禄3(1594)年に上出江村、下出江村、丹生村、古江村、片野村、朝柄村、色太・土屋・車川で検地が実施され、朝柄村を除いて記録が残る。下出江村は田畑屋敷が48町1反9畝24歩、分米550石8斗9升1合である。隣接する上出江は田畑屋敷が21町3反2畝、分米229石6斗8升で畑地が中心とわかる。この他に年貢として、下出江は川年貢帖250、山年貢4斗7升、茶8斤240匁、紺屋年貢2斗があり、上出江からは川年貢帖100、山年貢3斗5升、茶800目が納められた。

上出江村・下出江村での村石高の変遷は、慶安郷調(1650年)、元禄郷調(1700年)、天保郷調(1834年)、旧高田領取調帳(1868年)で見ると、上出江

267石→267石→285石→285石、下出江は650石→650石→664石→664石となる。文禄検地後から慶安年間には村高は増加するが、以降はほぼ横ばいとなる。

下出江から榑田川対岸の朝柄・古江では和歌山別街道が通過する。松阪から紀伊半島を横断して和歌山を結ぶ和歌山街道と、そこから松阪市朝見で分岐して、玉城町田丸へ至る和歌山別街道がある。街道は野中が熊野街道と、田丸で伊勢本街道と合流する。

榑田川上流域の集落では、河床が低いため農業用水の引き入れができず、田地の確保が困難であった。特に丹生では水不足を原因とする荒蕪化が深刻な状況で、灌漑池を築造するも解消には至らなかった。そこで丹生村の西村彦左衛門が、紀州藩に粥見村立梅で榑田川に井堰を設けて水を引き入れ、丹生まで送水する立梅用水の開削計画を願い出た。文政3(1820)年に紀州藩直属の事業として着工し、文政6(1823)年に総延長28kmにおよぶ工事が完了した。立梅用水は波多瀬・片野・朝柄・古江では山裾に沿って築造され、丹生では東西に分流し、区内には岩盤の掘り抜き(マンボ)や切通しが良好な状態で残る。現在も農業用水として利用され、国の登録記念物および世界かんがい施設遺産に登録されている。

註

- (1) 参考文献を示していないものは、下記の文献による。勢和町史編集委員会『勢和町史』通史編 勢和町1999年、勢和町史編集委員会『勢和町史』資料編二 勢和町2001年
- (2) 多気町教育委員会『丹生水銀鉱採掘跡分布調査報告』2017年
- (3) 三重県埋蔵文化財センター『緑通庵遺跡・アカリ遺跡発掘調査報告』1999年
- (4) 前掲註3に同じ。
- (5) 三重県埋蔵文化財センター『井尻遺跡発掘調査報告』1996年
- (6) 三重県立津高等学校地歴部『新神馬場遺跡発掘調査報告』1972年、勢和町史編集委員会『勢和町史』資料編二 勢和町2001年
- (7) 前掲註2に同じ。
- (8) 三重県教育委員会『昭和63年度農業基盤整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊 1989年
- (9) 前掲註2に同じ。
- (10) 三重県教育委員会『近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊2 1989年

Ⅲ 範囲確認調査

1 調査の概要

平成24・25年度の2カ年度にわたり、当事業地(約330,200㎡)において梅ヶ瀬遺跡・屋瀬A遺跡・屋瀬B遺跡・下田遺跡・中切遺跡・新神馬場遺跡・山見遺跡の範囲確認調査を実施し、計195箇所の調査坑(№1～195)を設けた(第4・5図)。調査の結果、屋瀬B遺跡・下田遺跡・中切遺跡・新神馬場遺跡・山見遺跡において土坑・溝・Pitが確認された。梅ヶ瀬遺跡では調査坑4箇所、屋瀬A遺跡では調査坑4箇所を設けたが、遺構・遺物は確認できなかった(第2表)。

この範囲確認調査を受けて協議を行った結果、当事業地における田面は極力保護層を確保することとし、農業集落道路・幹線水路部分を本発掘調査の対象地とした。平成26・27年度に屋瀬B遺跡・下田遺跡・中切遺跡・新神馬場遺跡・山見遺跡において本発掘調査を実施することとなった。

平成27年度には、中切遺跡の範囲確認調査未実施箇所について、計16箇所の調査坑(№196～210)を設けて調査を行った(第5図)。調査の結果、計画線上において遺構・遺物は確認できず、本発掘調査および工事立会の実施は不要と判断された(第2表)。

2 出土遺物

範囲確認調査の調査坑から出土した遺物について、以下各遺跡に分けて取り上げる⁽¹⁾(第6図・第3表)。出土した遺物は、縄文時代の石器(剥片)、古代～中近世の土器・陶磁器類である。

(1) 屋瀬B遺跡

1・2は調査坑№47・72の出土遺物である(第6図)。土師器鍋(1)は、中世IV期から近世のものと考えられる。陶器壺(2)は、やや丸みを帯びているが平底になるとみられ、時期は近世のものと考えられる。

(2) 下田遺跡

3・4は調査坑№17・21の出土遺物である(第6

図)。土師器皿(3)は薄手のもので、口径10cm未満になるとみられ、時期は近世のものか。瀬戸美濃産の陶器天目茶碗(4)は、内面に鉄釉が施されており、削り出し高台で露胎となる。

(3) 中切遺跡

5～11は調査坑№143・171・186・194の出土遺物と、調査坑№137周辺での表採資料である(第6図)。土師器皿(5)は口径5.5cmで、中世IV期～近世のものである。土師器甕(6)は、中世前期以降のものか。山茶碗(7～9)は、瀝美型で13世紀前半～中頃のものである。磁器染付碗(10)は、外面および見込みに施文があり、削り出し高台となる。剥片(11)は、調査坑と隣接する田畑からの表採資料で、石材はサヌカイトである。

(4) 山見遺跡

12～22は調査坑№102・108・118・123の出土遺物である(第6図)。南伊勢系土師器鍋(12・13)は、中世Ib期のものである。ロクロ土師器皿(14)は底部に回転糸切痕が確認できる。須恵器壺(15)は体部片で、外面には平行タタキ、内面には同心円の当て具痕が見られる。山茶碗(16・17)は、瀝美型で13世紀前半～中頃のものである。近世の陶磁器(18～22)は、灰釉陶器碗(18)、鉄釉丸碗(19)、磁器染付碗(20)、鉄釉丸碗または天目茶碗の底部(21)、鉄釉両手鍋(22)がある。

註

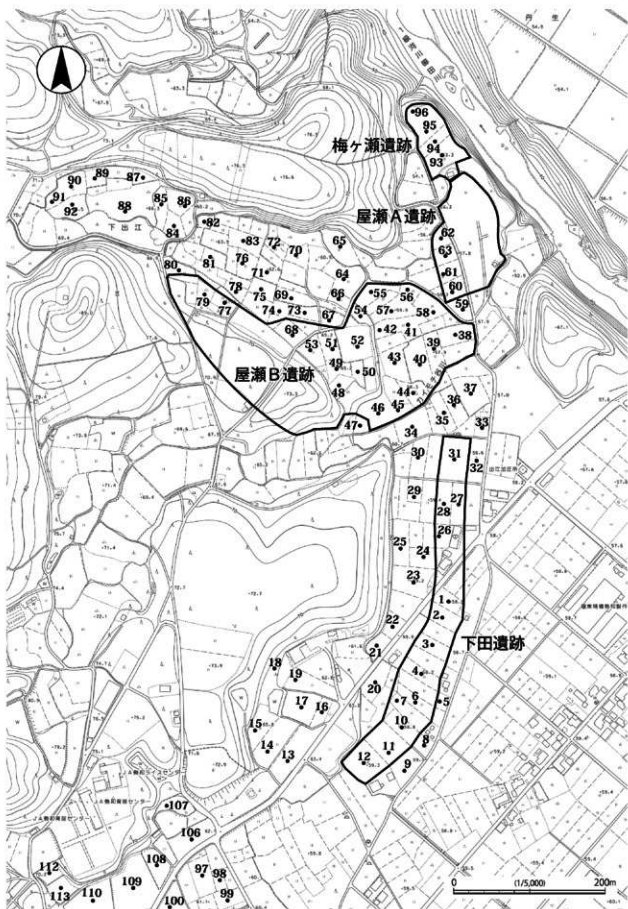
(1) 出土遺物の時期は、下記の文献を参考にした。

中世土師器：伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史』資料編考古2 三重県 2008年

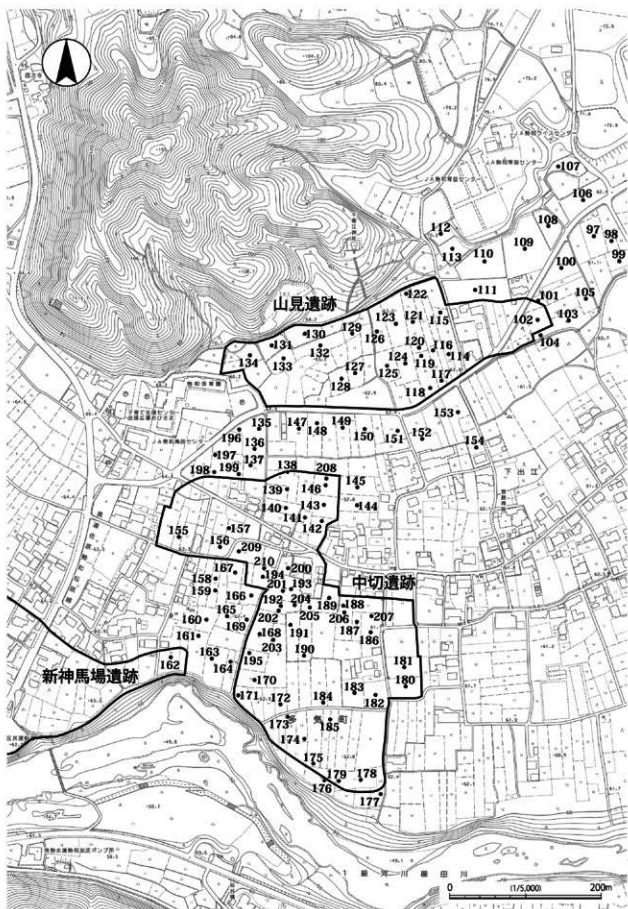
山茶碗：愛知県『愛知県史』別編第2 2007年、愛知県『愛知県史』別編第3 2012年

瀝美産陶器：愛知県『愛知県史』別編第3 2012年

瀬戸美濃産陶器：愛知県『愛知県史』別編第2 2007年



第4図 範囲確認調査坑位置図(1)



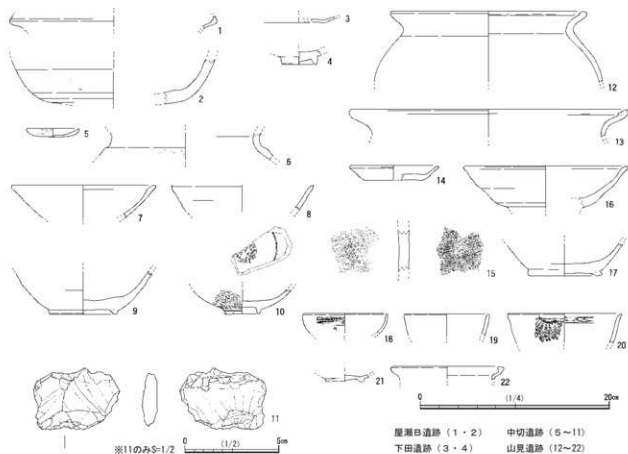
第5図 範囲確認調査坑位置図(2)

第2表 範囲確認調査坑一覧表

調査坑 No.	包含層 上面の 深さ (cm)	遺構上面 の深さ (cm)	遺構	遺物
1	--	50	土坑	--
2	--	65	--	土師器(中世)
3	--	52	--	土師器(中世)
4	--	49	--	--
5	--	46	--	--
6	--	60	--	--
7	--	67	--	土師器(中世)
8	--	46	--	--
9	--	75	--	--
10	--	40	--	--
11	--	85	--	--
12	--	36	--	陶器(近世)
13	--	60	--	--
14	--	120	--	土師器(中世)
15	--	80	--	--
16	--	50	--	--
17	--	35	--	陶器(近世)
18	--	22	--	--
19	--	68	--	--
20	--	--	--	土師器
21	--	90	--	土師器(中世)
22	--	--	--	--
23	--	60	--	--
24	--	56	--	土師器(中世)
25	--	110	--	--
26	--	40	--	--
27	--	60	--	--
28	--	60	--	--
29	--	60	--	土師器
30	--	40	--	--
31	--	25	溝	--
32	--	35	--	--
33	--	30	--	--
34	--	70	--	--
35	--	100	--	--
36	--	44	--	--
37	--	60	--	--
38	--	54	--	陶器(近世)
39	--	65	--	土師器(中世)
40	--	80	--	土師器(中世)・ 陶器(近世)
41	--	65	Pit	--
42	--	70	--	--
43	--	92	--	--
44	--	47	--	--
45	--	40	--	--
46	--	--	--	--
47	--	--	陶器	--
48	--	25	--	--
49	--	23	--	--
50	--	55	--	--
51	--	28	溝・Pit	--
52	--	20	--	--
53	--	25	--	煎茶器
54	--	32	--	Pit
55	--	--	溝・Pit	土師器(平安)
56	--	--	--	--
57	--	30	--	--
58	--	90	--	--
59	--	65	--	--
60	--	60	--	--
61	--	45	--	--
62	--	80	--	--
63	--	60	--	--
64	--	45	--	土師器(中世)
65	--	--	--	--
66	--	20	--	--
67	--	40	--	--
68	--	25	Pit	--
69	--	80	--	--
70	--	--	--	--

調査坑 No.	包含層 上面の 深さ (cm)	遺構上面 の深さ (cm)	遺構	遺物
71	--	55	--	--
72	--	52	--	土師器(中世)
73	--	25	--	--
74	--	25	--	--
75	--	40	--	--
76	--	70	--	--
77	--	90	--	--
78	--	105	--	--
79	--	25	Pit	--
80	--	35	--	--
81	--	--	--	--
82	--	--	--	--
83	--	--	--	--
84	--	--	--	--
85	--	--	--	--
86	--	--	--	--
87	--	--	--	--
88	--	--	--	--
89	--	--	--	--
90	--	--	--	--
91	--	--	--	--
92	--	--	--	--
93	--	--	--	--
94	--	--	--	--
95	--	--	--	--
96	--	--	--	--
97	--	--	--	--
98	--	--	--	--
99	--	--	--	--
100	--	--	--	--
101	--	--	--	--
102	--	--	--	陶器(中世)
103	--	--	--	--
104	--	--	--	--
105	--	--	--	--
106	--	--	--	--
107	--	--	--	--
108	--	--	--	陶器(近世)
109	--	--	--	--
110	--	--	--	--
111	--	--	--	--
112	--	--	--	--
113	--	--	--	--
114	--	--	--	--
115	--	--	--	--
116	--	--	--	--
117	--	30	Pit	土師器(平安)
118	--	20	Pit	--
119	--	25	溝	--
120	--	25	溝	--
121	--	--	--	--
122	--	--	--	--
123	--	--	--	--
124	--	30	Pit	--
125	--	30	溝・Pit	土師器(平安)
126	--	--	--	--
127	--	--	--	--
128	--	--	--	--
129	--	--	--	--
130	--	--	--	--
131	--	--	--	--
132	--	--	--	--
133	--	--	--	--
134	--	--	--	--
135	--	--	--	--
136	--	--	--	--
137	--	--	--	石器
138	--	--	--	--
139	--	--	--	--
140	--	--	--	--

調査坑 No.	包含層 上面の 深さ (cm)	遺構上面 の深さ (cm)	遺構	遺物
141	--	--	--	--
142	--	--	--	--
143	--	65	土坑	土師器 山岳織
144	--	--	--	--
145	--	--	--	--
146	--	45	溝	土師器
147	--	--	--	--
148	--	--	--	--
149	--	--	--	--
150	--	--	--	--
151	--	--	--	--
152	--	--	--	--
153	--	--	--	--
154	--	--	--	--
155	--	95	Pit	土師器
156	--	60	Pit	土師器
157	--	40	土坑・溝	--
158	--	--	--	--
159	--	--	--	--
160	--	--	--	--
161	--	--	--	--
162	--	65	溝 (落石込)	--
163	--	--	--	--
164	--	--	--	--
165	--	--	--	--
166	--	--	--	--
167	--	--	--	--
168	--	--	--	--
169	--	--	--	--
170	--	--	--	--
171	--	--	--	土師器 山岳織
172	--	--	--	--
173	--	--	--	--
174	--	--	--	--
175	--	--	--	--
176	--	--	--	--
177	--	--	--	--
178	--	30	Pit	--
179	--	55	土坑	--
180	--	15	Pit	--
181	--	20	Pit	--
182	--	60	土坑・Pit	--
183	--	--	--	--
184	--	--	--	--
185	--	--	--	--
186	--	40	Pit	陶器(近世)
187	--	35	土坑・Pit	--
188	--	50	溝	--
189	--	55	溝・Pit	--
190	--	--	--	--
191	--	55	溝・Pit	--
192	--	45	土坑	--
193	--	35	Pit	土師器
194	--	40	土坑・Pit	土師器
195	--	--	--	--
196	--	--	--	--
197	--	--	--	--
198	--	--	--	--
199	--	--	--	--
200	--	--	--	--
201	--	--	--	--
202	--	--	--	--
203	--	--	--	--
204	--	--	--	--
205	--	--	--	--
206	--	--	--	--
207	--	--	--	--
208	--	--	--	--
209	--	--	--	--
210	--	--	--	--



第6図 範囲確認調査出土遺物実測図

第3表 範囲確認調査出土遺物観察表

番号	種類(産地) 履層等	遺跡名	調査枚 数	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調査・技法の特徴	胎土	焼成	色相	積層位	特記事項	
1	3-4 土師器 盆	昭和4	72	—	—	—	外: 522 ⁺ 内: 522 ⁺	黒	—	浅黄緑	1038/3	口縁部 小片	
2	3-1 陶器 盆	昭和4	47	—	—	—	外: 575 ⁺ 内: 575 ⁺	黒	灰	緑	2,518/6	1/12 2m大の砂合む	
3	3-5 土師器	下田	21	—	—	—	外: 77 ⁺ , 522 ⁺ 内: 77 ⁺ , 522 ⁺	黒	—	浅黄緑	1038/3	小片 1m大の砂合む	
4	3-6 陶器(瀬戸・美濃) 土付土師 器	下田	17	—	3.6	—	外: 575 ⁺ , 522 ⁺ 内: 575 ⁺ , 522 ⁺	黒	灰	緑・黄緑	7,518/4 2,518/2	底面 11/12 張り出し蓋付	
5	1-6 土師器 盆	中切	194	5.5	—	0.9	外: 575 ⁺ , 522 ⁺ 内: 575 ⁺ , 522 ⁺	黒	—	灰白	1038/2	1/12	
6	1-4 土師器 盆	中切	171	—	—	—	外: 522 ⁺ , 77 ⁺ , 522 ⁺ 内: 522 ⁺ , 77 ⁺	黒	—	灰白	1038/2	1/12 3m大の砂合む	
7	1-2 陶器 山形瓶	中切	143	14.8	—	—	外: 575 ⁺ 内: 575 ⁺	黒	灰	灰白	537/1	1/12 2m大の砂合む	
8	1-3 陶器 山形瓶	中切	143	15.0	—	—	外: 575 ⁺ 内: 575 ⁺	黒	灰	灰白	537/1	2/12 1m大の砂合む	
9	1-1 陶器 山形瓶	中切	171	—	6.8	—	外: 575 ⁺ , 赤切縁, 自然釉 内: 575 ⁺ , 自然釉	黒	灰	灰白	537/1	1/12 2m大の砂合む 張り付け蓋付	
10	2-1 磁器 染付瓶	中切	140	—	3.4	—	外: 575 ⁺ , 黒釉, 染付 内: 575 ⁺ , 黒釉, 染付	黒	灰	灰白	537/1	3/12 張り出し蓋付	
11	2-3 土師器 盆	中切	123の 高野田	底 3.2	底 3.5	厚 0.8	—	—	—	—	—	—	9.5cm以下, 重量: 13.10g 磨擦品
12	2-4 土師器 盆	山見	119	20.6	—	—	外: 77 ⁺ , 522 ⁺ 内: 77 ⁺ , 522 ⁺	粗	—	黄緑	538/4	1/12 2m大の砂合む	
13	4-1 土師器 盆	山見	102	29.0	—	—	外: 522 ⁺ 内: 522 ⁺	粗	—	緑	537/6	2/12 2m大の砂合む 洗面保存者	
14	1-5 ロクワ土師器 盆	山見	118	9.3	—	1.5	外: 575 ⁺ , 赤切縁 内: 575 ⁺ , 赤切縁	黒	—	緑	7,518/6	1/12 1m大の砂合む	
15	2-2 陶器 山形瓶	山見	123	—	—	—	外: 575 ⁺ 内: 575 ⁺	黒	灰	灰	537/1	5/12 1.5m 小片	
16	4-2 陶器 山形瓶	山見	102	17.0	—	—	外: 575 ⁺ 内: 575 ⁺	黒	灰	灰白	2,537/3	1/12 2m大の砂合む	
17	4-3 陶器 山形瓶	山見	102	—	7.3	—	外: 575 ⁺ 内: 575 ⁺	黒	灰	灰白	2,537/1	底面 12/12 1m大の砂合む 張り付け蓋付, 内面磨り着	
18	3-3 陶器 盆	山見	108	8.8	—	—	外: 575 ⁺ , 黒釉 内: 575 ⁺ , 黒釉	黒	灰	灰白	537/1	5/12	
19	3-7 陶器 盆	山見	108	8.9	—	—	外: 575 ⁺ , 黒釉 内: 575 ⁺ , 黒釉	黒	灰	緑	7,518/4 2,538/1	1/12	
20	3-2 磁器 染付瓶	山見	108	12.0	—	—	外: 575 ⁺ , 黒釉, 染付 内: 575 ⁺ , 黒釉, 染付	黒	灰	灰白	537/1	5/12	
21	3-9 陶器 盆	山見	108	—	3.8	—	外: 575 ⁺ , 黒釉 内: 575 ⁺ , 黒釉	黒	灰	緑	538/4 2,538/1	底面 12/12 張り出し蓋付	
22	3-6 陶器 土器小片	山見	108	11.5	—	—	外: 575 ⁺ , 黒釉 内: 575 ⁺ , 黒釉	黒	灰	緑	1038/2	1/12	

IV 屋瀬B遺跡（第2次）

1 調査の概要

屋瀬B遺跡（第2次）は、平成26年度高度本利機能確保基盤整備事業（出江地区）に伴って発掘調査を実施した。調査期間は平成26年9月17日～平成26年12月26日で、調査面積は584.2㎡である。

調査区は2箇所に分かれており、西側の調査区を1区、東側の調査区を2区とした（第7図）。各調査区的面積は、1区が483.5㎡、2区が100.7㎡である。なお、地区については、1章2節（1）で記したように、調査区ごとに独立した地区割を行い、大地区は設定せず、小地区のみを設定した。

なお、当遺跡では平成13年に既往調査として県営中山間地域総合整備事業（多気中部地区）に伴う発掘調査（第1次）が行われている。この第1次調査では、時期不明の溝と柱穴が確認されており、盛土からは縄文時代の石鏝と室町時代とみられる陶器が出土している¹⁾。

2 層位と遺構

（1）基本層位

調査区全体で把握された基本層位は、以下のとおりである（第10図）。

I層：黄褐色シルト（現耕作土および床土）

II層：黒色シルト（黒ボク土）

III層：明黄褐色～褐色シルト（段丘基盤層）

I層は、現在の田面に伴う耕作土および床土である。II層はいわゆる黒ボク土であり、黒色のきめの細かいシルト層で、砂礫の混入は少ない。III層は、棚田川によって形成された段丘基盤層である。遺構は、II層あるいはIII層上面で検出した。

①1区

1区では、大部分がI層直下でIII層に達する状況であり、II層は調査区北側の突出部分にしか認められなかった。遺構はIII層上面で検出したが、遺構密度が極めて薄い状況であり、検出した遺構は本来II層上面をベースにして掘り込まれていた可能性があ

る。このような状況から、遺構面は現在の田面が造成された際に大きく削平された可能性が高いと考えられる。

②2区

2区では、III層上に堆積するII層が北側で厚く、南側で薄い状況であった。II層上面では遺構が確認できなかったため、III層上面で遺構検出を試みたが、遺構密度が極めて薄い状況であった。

（2）遺構

本発掘調査における遺構は、1区を中心に確認したが、前述したように遺構密度は極めて薄い状況であった。検出した遺構は、溝1条、土坑1基、複数のピットである（第8・9図）。

以下の報文では、遺構種別ごとに記述する。遺構の詳細については、遺構一覧表（第4表）を参照されたい。

①溝

SD01（第8図） 1区G6～7・H5～6にかけて検出した溝である。長さ8.6m以上、幅0.42m、深さ0.15mを測る。溝の南側では、東へと分岐する一連の溝を確認した。埋土は、黒褐色砂礫混シルトの単層である。埋土からは、遺物が出土しなかったため、時期は明らかでない。

②土坑

SK02（第8図） 1区D3・E3にかけて検出した土坑である。平面形状は方形を呈しており、長さ2.6m、幅1.2～1.36m、深さ0.42～0.55mである。埋土は、黒褐色シルトの単層である。埋土からは遺物が出土しなかったため、時期は明らかでない。

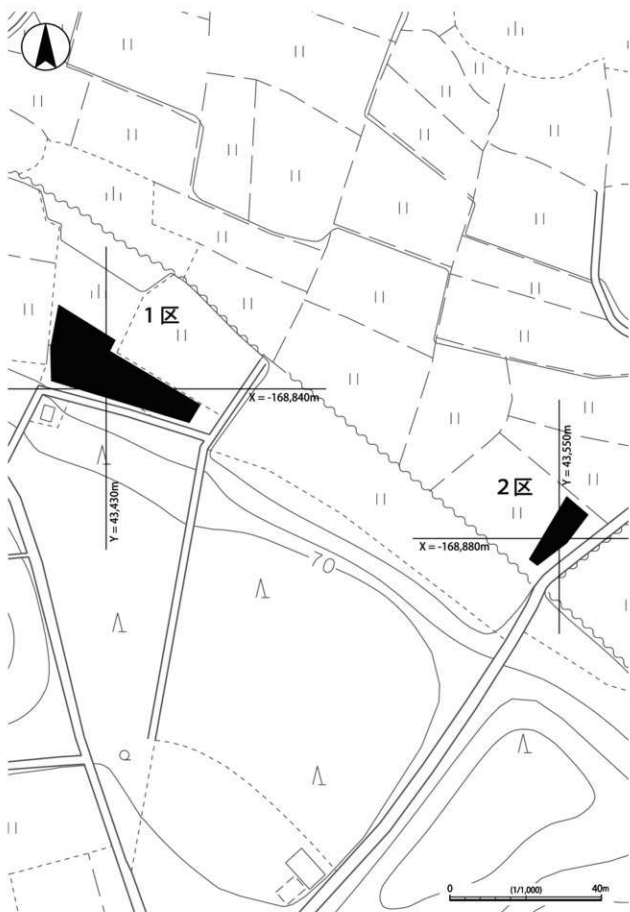
③その他の遺構

1・2区では、複数のピットを確認したが、いずれのピットの埋土からも遺物が出土しなかったため、時期は明らかでない。

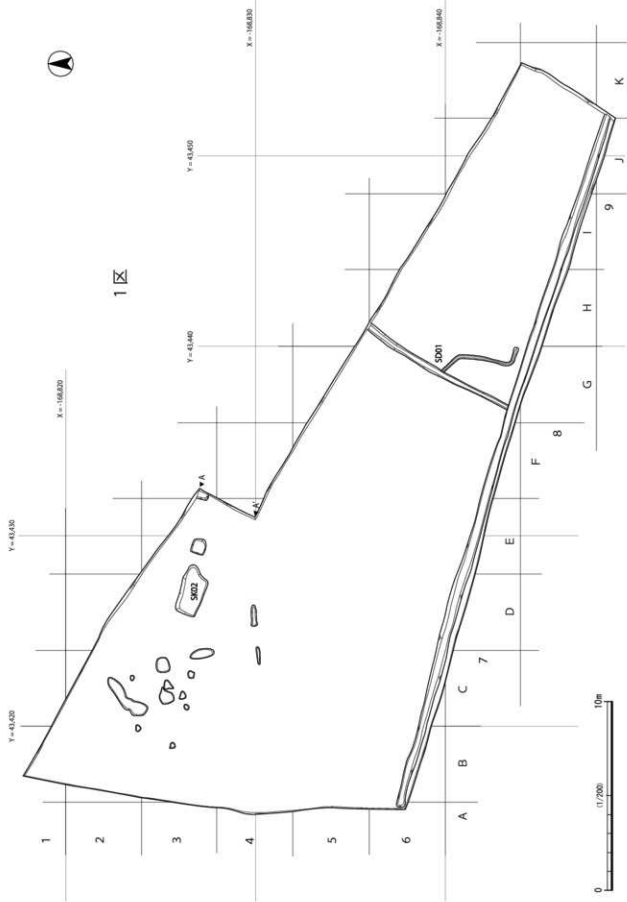
3 出土遺物

（1）概要

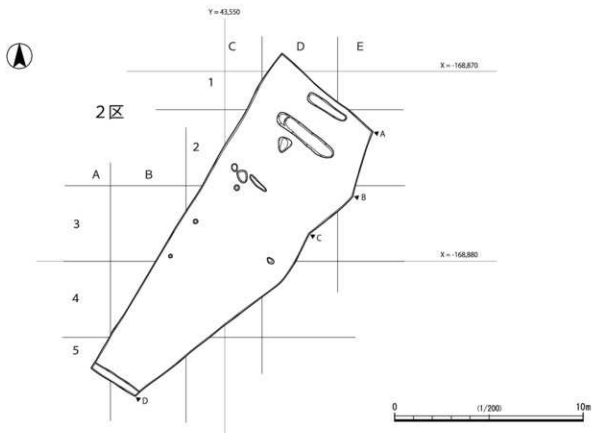
調査区全体での出土遺物は、土器・陶磁器²⁾であ



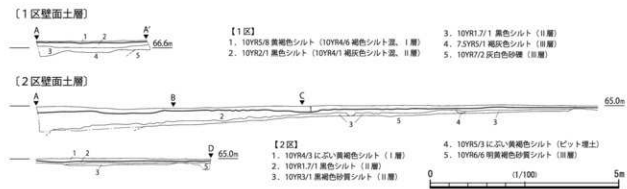
第7図 屋瀬B遺跡（第2次）調査区全体図



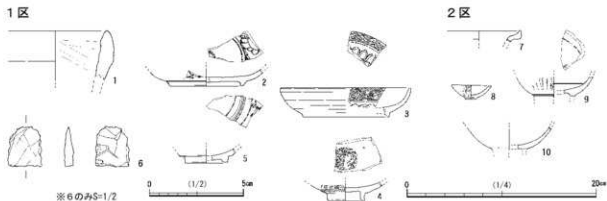
第8図 屋漏白連跡(第2次)1区平面図



第9図 屋瀬B遺跡（第2次）2区平面図



第10図 屋瀬B遺跡（第2次）1・2区壁面土層断面図



第11図 屋瀬B遺跡（第2次）出土遺物実測図

第4表 屋瀬B遺跡(第2次)遺構一覧表

遺構名	性格	時期	調査区	地区	長さ・長軸(m)	幅・短軸(m)	深さ(m)	備考
S9-01	溝	不明	1区	G6~7・H5~6	8.6以上	0.42	0.15	溝の南端で表へ分岐するS901と1連の溝あり
S9-02	土坑	不明	1区	D9・E9	2.6	1.2~1.30	0.42~0.55	遺物出土なし

第5表 屋瀬B遺跡(第2次)出土遺物一覧表

番号	実測番号	種類(産地) 器種等	調査区	地区	遺構 層位	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調査・技法の特徴	胎土	構成	色調	保存度	特記事項	
1	1-1	陶器 甕か	1	—	表土	—	—	—	外: +F977 内: F7	密	貝	赤灰	2.5YR4/1	口縁部 1/2	直縁瓶の同時出土
2	1-7	磁器(肥前) 皿	1	—	表土	—	7.6	—	外: +F977, +F977, 陶文, 施釉 内: +F977, 陶文, 施釉	密	貝	輪: 明緑灰 7.5GY/1 裏地: 灰白 5M*	底面 1/2	割り出し高台 直縁瓶の同時出土	
3	1-9	磁器(瀬戸) 皿	1	—	表土	13.8	8.9	3.0	外: +F977, 陶文, 施釉 内: +F977, 施釉	密	貝	輪: 明緑灰 7.5GY/1 裏地: 灰白 5M*	底面 1/2	割り出し高台 直縁瓶の同時出土	
4	1-8	磁器(瀬戸) 碗	1	—	表土	—	3.7	—	外: +F977, 陶文, 施釉 内: +F977, 施釉	密	貝	輪: 明緑灰 7.5GY/1 裏地: 灰白 5M*	3/8面 1/2	割り出し高台 直縁瓶の同時出土	
5	1-5	陶器(瀬戸美濃) 碗	1	—	表土	—	4.4	—	外: +F977 内: +F977, 施釉	密	貝	輪: 黒焼 7.5YR2/2 裏地: 灰白 10YR5/2	底面 2/2	割り出し高台 直縁瓶の同時出土	
6	1-10	石製 剥片	1	—	表土	長 2.1	幅 1.8	厚 0.5	—	—	—	—	—	高さ: 2.574 チャート 直縁瓶の同時出土	
7	1-2	土師器 鍋あらい(埴輪)	—	—	惣合簀	—	—	—	外: 2077 内: 1077	密	—	黒灰	7.5YR5/1	口縁部 小片	緑色の面土
8	1-6	磁器(肥前) 紅土	2	—	表土	4.2	1.4	1.2	外: 型押し, 施釉 内: 型押し, 施釉	密	貝	輪: 灰白 2.5GY/1 裏地: 灰白 2.5YR/2	3/2	—	
9	1-5	磁器(肥前) 碗	2	—	表土	—	—	—	外: +F977, 施釉 内: +F977, 施釉	密	貝	輪: 灰白 5YR/1 裏地: 灰白 5M*	底面 1/2	割り出し高台	
10	1-4	陶器(瀬戸美濃) 碗	2	—	表土	—	—	—	外: +F977, 施釉 内: +F977, 施釉	密	貝	輪: 灰白 5YR/2 裏地: 灰白 10YR5/2	3/8面 1/2	高台文(溝部から割り 出し高台とみられる)	

る。総量は、コンテナ換算で1箱分、重量が0.5kg(整理前)である。

出土遺物の時期は、江戸時代以降であり、遺物量は極めて少なく、全て遺構外の表土(重機掘削時のものを含む)および包含層(検出面直上)から出土した遺物である。以下、限られた資料のうち図化したものを報告する(第11図)。なお、各遺物の詳細については、出土遺物観察表(第5表)を参照されたい。

(2) 表土

1~6は、1区表土から出土した陶磁器と石器である(第11図)。1は、陶器の甕とみられる破片である。内面には粗いナゲが施されている。2は、肥前産の磁器皿である。内・外面ともにロクロナゲ調整後に施軸され、染付手描きの文様が施される。内面には花文、外面には唐草文とみられる文様、見込みにも文様があるが定かでない。17世紀後半~18世紀前半(江戸時代中頃)のものとみられる。3は、瀬戸産の磁器皿である。外面下半にはロクロケズリ、外面口縁部から内面にはロクロナゲ調整後に施軸され、銅版転写による文様が施される。19世紀中頃以降(江戸時代後半以降)のものと考えられる。4は、瀬戸産の磁器碗である。内・外面ともにロクロナゲ調整後に施軸され、内面の見込みと外面に型紙摺絵による文様が施される。19世紀以降(江戸時代後半

以降)のものと考えられる。5は、瀬戸美濃産の陶磁器である。高台削り出しであり、内面には鉄軸が施される。天目茶碗の可能性もある。18世紀前半~中頃(江戸時代後半)のものとみられる。6は、チャートの剥片である。

8~10は、2区表土から出土した陶磁器である(第11図)。8は、肥前産の磁器紅土である。型押し成形後、内面と外面上半のみに施軸され、それ以外は無軸である。18世紀後半~19世紀初頭頃(江戸時代後半)のものと考えられる。9は肥前産の磁器碗である。内面にはロクロナゲ、外面にはロクロケズリ調整後に施軸され、染付手描きの文様が施される。外面には草文とみられる文様、内面見込みに文様があるが定かでない。17世紀後半~18世紀前半(江戸時代中頃)のものとみられる。10は、瀬戸美濃産の陶磁器である。内面にはロクロナゲ、外面にはロクロケズリ調整後に施軸され、文様はみられない。

(3) 包含層

7は、2区包含層(検出面直上)から出土した土師器鍋あるいは焙烙である(第11図)。口縁部の小さな破片であるため、器種の判別ができない。口縁端部は、弱く上方へつまみ上げられた形状であることから、戦国期の南伊勢系土師器の鍋・焙烙の口縁形状を受け継ぐものとみられる¹²⁾。時期は17世紀以降(江戸時代後半)と考えられる¹⁴⁾。

4 小結

本発掘調査で確認できた遺構は極めて少ない状況であり、遺構からも遺物が出土しなかった。また、第1次調査においてもほぼ同じような状況が確認されているため、現状では遺跡の具体的な内容とその時期を明確にすることができない。しかし、第1次調査で出土している室町時代とみられる陶器⁽¹⁾、本発掘調査で出土した17世紀～19世紀中頃（江戸時代中頃以降）までの土師器・陶磁器から、遺跡は室町～江戸時代に時期の中心があるものと考えられる。

また、第1次調査では縄文時代の石錘が出土していることから⁽²⁾、遺跡内または近隣に縄文時代の遺構または遺物包含層が存在する可能性が指摘できる。今後も当該遺跡内および近隣で開発が行われる際には、注意する必要があるだろう。

注

- (1) 三重県埋蔵文化財センター『神田遺跡・屋瀬B遺跡発掘調査報告』2002年
- (2) 出土した陶磁器の編年・暦年代・特徴については、以下の文献を主として参考にした。
田口昭二『美濃焼』考古学ライブラリー17 ニューサイエンス社 1983年、愛知県『愛知県史』別編案業2 2007年、大橋康二『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社 1989年、九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000年
- (3) 伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史』資料編考古2 三重県 2008年
- (4) 伊藤裕偉「近世土師器の形態と変遷」『高河原遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2015年、伊藤氏は上記に挙げた報告書の中で、近世の南伊勢系土師器の分類と編年を示されている。氏が示した編年に従うと近世1期以降のものとみられる。
- (5) 前掲註1に同じ。
- (6) 前掲註1に同じ。

V 下田遺跡 (第1次)

1 調査の概要

下田遺跡 (第1次) は、平成26年度高度水利機能確保基盤整備事業 (出江地区) に伴って発掘調査を実施した。調査期間は、平成26年9月17日～平成26年12月26日で、調査面積は647.0㎡である。

調査区は3箇所に分かれており、北側の調査区を1区と2区、南側の調査区を3区とした (第12図)。各調査区的面積は、1区が390.7㎡、2区が25.2㎡、3区が231.1㎡である。なお、地区については、1章2節 (1) で記したように、調査区ごとに独立した地区割を行い、大地区は設定せず、小地区のみを設定した。

2 層位と遺構

(1) 基本層位

調査区全体で把握された基本層位は、以下のとおりである (第15図)。

I層：暗褐色シルト (耕作土および床土)

II層：黒褐色シルト (黒ボク土)

III層：にぶい黄褐色～暗オリーブ褐色を主体とするシルトおよび砂礫 (段丘基盤層)

I層は、現在の田面に伴う耕作土および床土である。II層はいわゆる黒ボク土であり、黒色のきめの細かいシルト層で、砂礫の混入は少ない。III層は、櫛田川によって形成された段丘基盤層である。

①1区

1区では、全体的にII層の堆積が薄く (第15図：1区壁面土層：8・9層)、調査区の西側ではI層直下でIII層に達し、遺構はII層およびIII層上面で検出した。この状況から、II層は現在の田面が造成された際に削平を受けている可能性がある。

また、1区では調査区の北と西壁沿いで下層確認のための断割を行い、III層以下の堆積を確認した。III層は基本的に安定したシルト (第15図：1区壁面土層：32・34・35層) で構成されるが、粗砂や砂礫が混じるシルトあるいは部分的に粗砂や砂礫のみで

構成される堆積層を確認した。これらの堆積層は、壁面土層の観察では複雑な堆積状況を示しており、流水状況を示すものもみられた。当地は段丘の平坦面であるが、調査区の北東には小丘陵に挟まれた谷状の地形が存在し、その谷筋には櫛田川に向かって流れるカイモチ谷川があることから、III層中で確認した砂礫は、谷筋から流れた古い河川に由来する堆積である可能性がある。

②2区

2区では、1区と比べてII層の堆積が厚く、遺構はII層上面で検出した。そのため、II層下にあるとみられるIII層は確認していない。

③3区

3区では、調査区の東半部においてI層直下でIII層に達し、遺構はIII層上面で検出した。一方、調査区の中央部から西半部においては、II層が厚く堆積している状況であり、遺構はII層上面で検出した。II層の堆積は、調査区北壁沿いで行った断割の壁面土層で、西に向かって大きく落ち込んでいく状況を確認した。これらの状況から、調査区の東半部は現在の田面が造成された際に、II層は削平を受けていると考えられる。そして、調査区の西側には、西へ向かって落ち込む谷地形が存在すると考えられ、3区におけるII層は谷の埋没土になるとみられる。

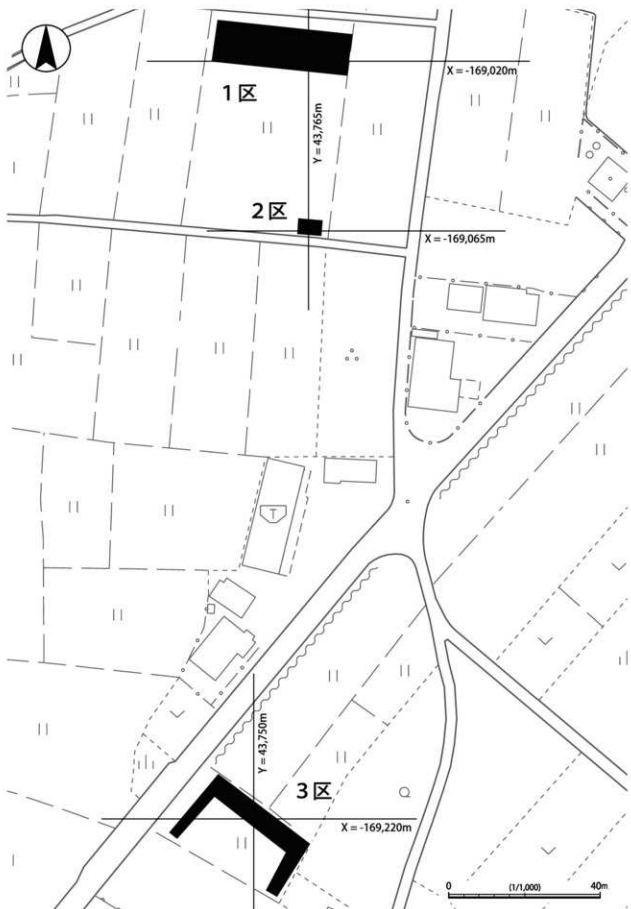
(2) 遺構

本発掘調査の遺構は、1区および3区を中心に確認した。検出した遺構は、溝21条、道路1条、複数のピットおよび溝状の落ち込みである。以下の報文では、遺構種別ごとに記述する。遺構の詳細については、遺構一覧表 (第6表) を参照されたい。

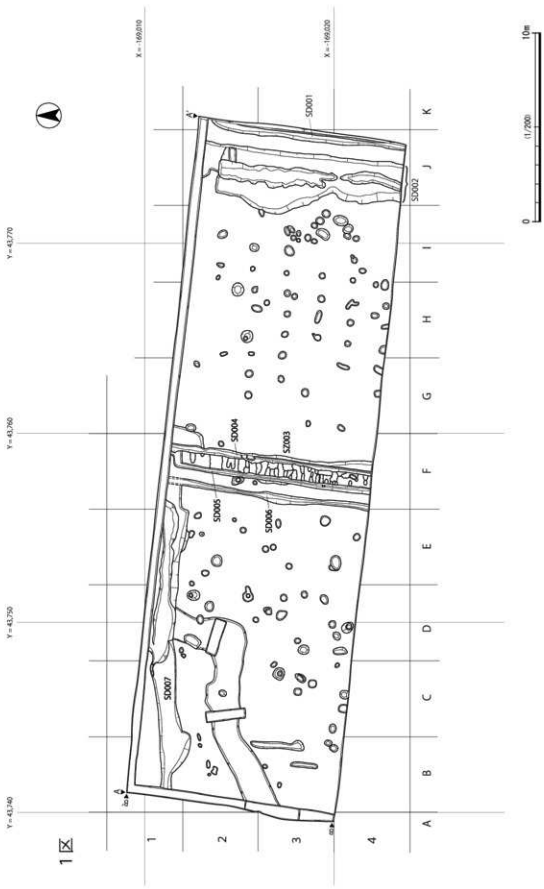
①溝

SD001 (第13・15図) 1区J2～4・K2にかけて検出した溝である。西肩のみを確認し、規模は不明である。埋土は、砂礫が混じる黒色シルトである。埋土からは、江戸時代以降と考えられる陶器片と未加工の石器の可能性のある破片が出土した。

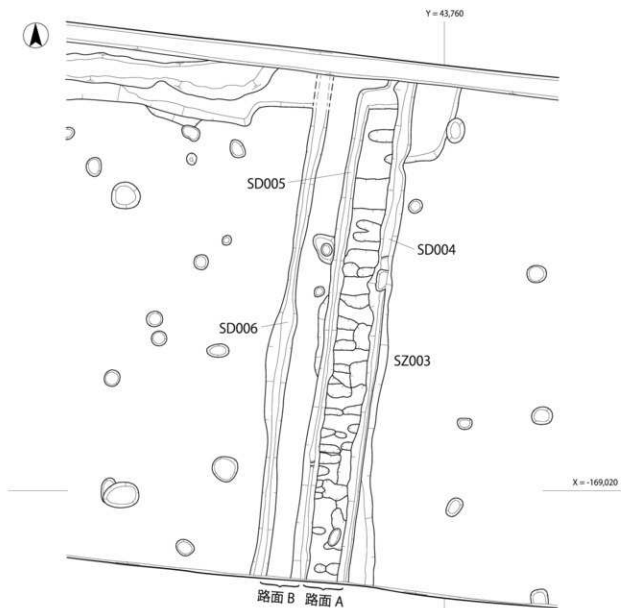
SD002 (第13・15図) 1区I3・J2～4にかけて検出した溝であり、SD001に近接する。長さ



第12図 下田遺跡（第1次）調査区全体図



第13図 下田遺跡(第1次) 1区平面図



第14図 下田遺跡（第1次）S Z003平面図

5.3m以上、幅1.4～3.3m、深さ0.2～0.34mを測り、溝の中央は一段深くなる。埋土は黒色シルトである。埋土から遺物が出土しなかったため、時期は明らかでない。

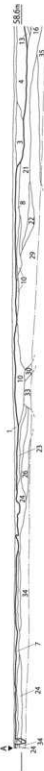
S D007（第13・15図） 1区B～F1・B2・E～F2にかけて検出した溝である。長さ16.2m以上、幅0.5～1.64m、深さ0.07～0.14mを測る。C～F1にかけては、現代の攪乱溝によって切られており、溝の南岸のみしか確認できない。埋土は、黒褐色砂礫の単層である。埋土から遺物が出土しなかったた

め、時期は明らかでない。

S D008（第15・16図） 2区H14～15にかけて検出した溝である。長さ4.4m以上、幅0.7m、深さ0.18mを測る。埋土は黒褐色シルトの単層であり、積極的な流水痕跡は認められなかった。埋土から遺物が出土しなかったため、時期は明らかでない。

S D009（第15・16図） 3区A3～5・B3にかけて検出した溝である。長さ6.5m以上、幅0.8m、深さ0.25mを測る。溝の西岸には、人為的に並べられた石を確認した。検出状況から、石組溝であった

〔1区壁面土層〕



【1区】

1. 2593/3 黒褐色シルト (腐植土及び珪土) : 1層
2. 10782/1 黒色シルト : ピット
3. 10783/2 黒色シルト (底土)
4. 10782/1 黒色シルト (底土)
5. 10782/1 黒色シルト : S0002
6. 10782/1 黒褐色シルト : S0001
7. 2374/2 腐食黄色砂質シルト : 目層
8. 10781/2/1 黒色シルト : 目層
9. 2378/1/2/1 黒色シルト : 目層

【2区】

1. 10782/1 黒色シルト (腐植土) : 1層
2. 2378/3 腐食シルト (腐植土シルトブロック型) : 1層
3. 10781/2/1 黒色シルト (P-C-2) : 目層
4. 10781/2/1 黒色シルト (P-C-2) : 目層
5. 10782/1 黒褐色シルト
6. 2373/3 腐食黄色砂質シルト
7. 10783/1 黒褐色シルト
8. 2378/2 腐食黄色砂質シルト
9. 10783/3 腐食黄色砂質シルト : 目層
10. 2372/1 腐食黄色砂質シルト
11. 10783/1 腐食黄色砂質シルト
12. 10783/1 腐食黄色砂質シルト
13. 2378/2 腐食黄色砂質シルト
14. 2378/2 腐食黄色砂質シルト
15. 10783/3 腐食黄色砂質シルト : 目層
16. 10784/3 腐食黄色シルト (腐食珪土)
17. 2373/2 黒褐色シルト : S0007
18. 2374/2 腐食黄色砂質シルト : 目層
19. 10784/3 腐食黄色砂質シルト : 目層
20. 2373/3 腐食黄色砂質シルト : 目層

〔2区壁面土層〕



【2区】

1. 10782/1 黒色シルト (腐植土) : 1層
2. 2378/3 腐食シルト (腐植土シルトブロック型) : 1層
3. 10781/2/1 黒色シルト (P-C-2) : 目層
4. 10781/2/1 黒色シルト (P-C-2) : 目層

〔3区壁面土層〕



【3区】

1. 2373/3 腐食黄色砂質シルト (腐植土及び珪土) : 1層
2. 2378/2/1 腐食黄色シルト (腐食珪土) : 1層
3. 10782/2 黒色シルト : 1層

〔SD009〕



1. 2378/4/1 黒褐色シルト
2. 2378/1/1 腐食黄色シルト
3. 2378/1/2/1 腐食黄色砂質シルト

〔SD010〕



1. 2378/4/1 黒褐色シルト
2. 2378/2/2 腐食黄色シルト

〔SD011〕



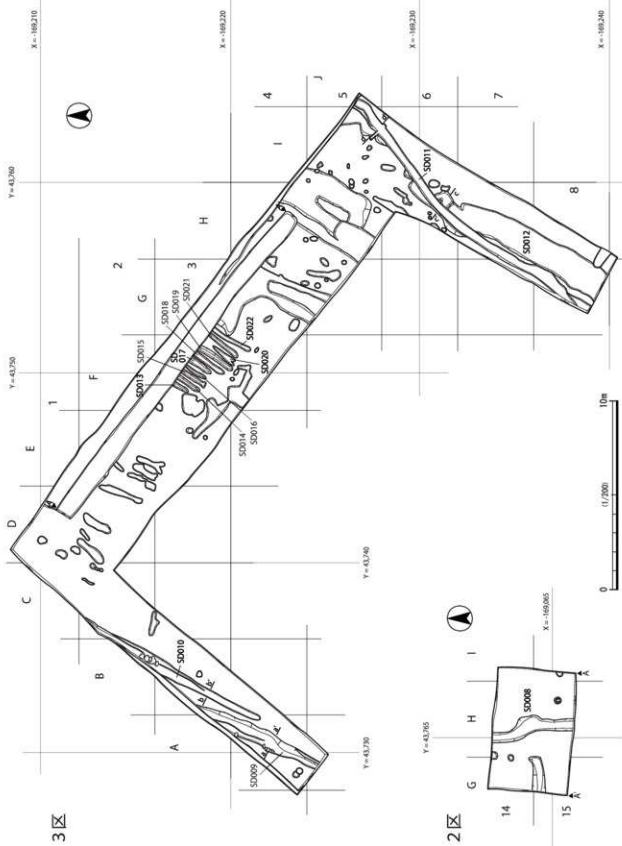
1. 10786/4 腐食黄色シルト
2. 10783/1 腐食黄色シルト (2377/6明腐食シルトブロック型)
3. 2373/3 腐食黄色シルト
4. 10784/1 腐食黄色シルト

〔SD012〕

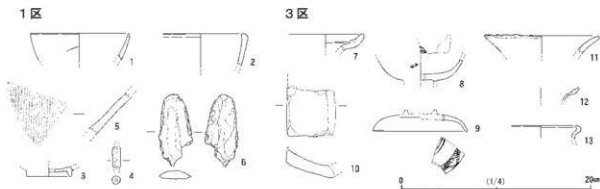


1. 2378/1 腐食黄色シルト
2. 2378/2 腐食黄色シルト (2377/6明腐食シルトブロック型)
3. 2373/3 腐食黄色シルト
4. 2374/1 腐食黄色シルト

第15図 下田遺跡 (第1次) 1～3区壁面土層および遺構土層断面図



第16図 下田遺跡(第1次) 2・3区平面図



第17図 下田遺跡（第1次）出土遺物実測図

可能性がある。埋土は、赤灰色を主体とするシルトである。中世Ⅲb期の南伊勢系土師器鍋の破片が出土したことから、室町時代前半以降（15世紀前半以降）と考えられる。

S D010（第15・16図） 3区A4・B2～4・C2にかけて検出した溝である。長さ9.3m以上、幅0.7m、深さ0.25mを測る。東岸にはテラスがあり、そこから西に向かって落ち込みながら底面へ至る。テラスから底面までの側面では、人為的に並べられた石を確認した。検出状況から、石組溝であった可能性がある。埋土は赤灰色シルトおよび極暗赤褐色シルトであり、磁器の碗・蓋、平瓦、鉄滓が出土した。出土した磁器から江戸時代後半（18世紀中頃～後半）と考えられる。

S D011（第15・16図） 3区G7～8・H6～7・15～6・J5にかけて検出した溝である。長さ16.5m以上、幅0.4～0.8m、深さ0.34mを測る。S D012と重複し、切り合いからS D012よりも新しい。埋土は、明黄褐色シルトブロックが混じる黒褐色シルトや黄灰色シルトである。遺物が出土しなかったため、時期は明らかでない。

S D012（第16図） 3区G8・H6～8・I5～6にかけて検出した溝である。長さ16.2m以上、幅1.7m、深さ0.04～0.13mを測り、深さは一定でない。S D011と重複し、切り合いからS D011よりも古い。埋土は暗褐色シルトである。遺物が出土しなかったため、時期は明らかでない。

S D013～022（第15・16図） 3区F3～4・G3にかけて検出した溝である。これらは、幅0.2～0.4m前後、深さ0.05～0.13m前後でほぼ同規模である。

3区北壁の土層では、旧耕作土の黒褐色シルトが埋土となることから、耕作溝であると考えられる。このような溝は、3区D2・E2～3でも確認でき、S D013～022と同様の性格のものと考えられる。

以上のほか、溝の一部とも考えられる落ち込みを複数確認した。落ち込みは、特に3区で多く認められ、底面の高低差が大きく、溝としてのプランが判然としないものが多い。いずれの遺構からも遺物が出土しなかったことから、時期は明らかでない。

②道路

S Z003（第13～15図） 1区F1～4にかけて検出した南北方向に延びる道路である。長さ11m以上、幅2.0～2.5m（S D004～006間）を確認した。当初溝として認識し、掘削中に凹凸痕跡および側溝と考えられる布張り状の浅い溝を確認して道路と判明した。側溝となる3条の溝（S D004・005・006）があり、S D005を境に2つの平坦面（東側：路面A、西側：路面B）を確認した。路面Aの幅員は、1.5m（S D004・005の心々間距離）、路面Bの幅員は0.9～1.0m（S D005・006の心々間距離）であり、路面Aではいわゆる波板状の凹凸痕跡¹¹⁾を検出した。凹部分は、楕円形または長楕円形で、深さ0.05m以内であり、約0.3～0.5m間隔で存在する。凹部分の埋土は、にびい黄褐色シルトブロックが多く混じる黒色シルトであり、攪拌された状況を示していた。また硬化面や凹凸の周辺が硬化した状態は認められなかった。一方、路面B全体は路面Aよりも0.1mほど高く、平面に凹凸痕跡はみられなかった。この路面Bに対応する側溝はS D006であるが、片側の側溝は確認できなかった。また、調査区北壁の土層

第6表 下田遺跡(第1次)遺構一覧表

遺構名	性格	時期	調査区	地区			備考	
				長さ・長軸(m)	幅・短軸(m)	深さ(m)		
SD-001	溝	江戸	1区	J2~4・K2	—	—	調査区東端で溝の西部分のみ検出	
SD-002	溝	不明	1区	I3・J2~4	5.33±	1.4~3.9	0.2~0.34	遺物出土なし
SD-003	遺構	不明	1区	F1~4	11.03±	2.2~2.5	—	新築・旧土(750004・005・006を含む)
SD-004	溝	不明	1区	F1~4	11.03±	0.22~0.5	0.4	52000調査品の西側溝。遺物出土なし
SD-005	溝	不明	1区	F1~4	11.03±	0.25~0.35	0.22~0.15	52000調査品の西側溝。遺物出土なし
SD-006	溝	不明	1区	F1~4	11.03±	0.22~0.5	0.04~0.06	52000調査品の西側溝。遺物出土なし
SD-007	溝	不明	1区	B~F1・I2・E~F1	16.23±	0.3~1.04	0.07~0.14	遺物出土なし
SD-008	溝	不明	2区	H4~J5	4.43±	0.7	0.18	遺物出土なし
SD-009	溝	室町以降	3区	A3~5・A1・C2	6.53±	0.8	0.25	—
SD-010	溝	江戸	3区	A4・B2~4・C2	9.33±	0.7	0.25	—
SD-011	溝	不明	3区	G7~8・H6~7・I5~6・J5	16.23±	0.1~0.8	0.31	50012と重複。50015が新しい。遺物出土なし
SD-012	溝	不明	3区	G8・H6~8・I5~6	16.23±	1.7	0.04~0.13	50011と重複。50012が古い。遺物出土なし
SD-013	溝	不明	3区	F3	0.93±	0.26	0.05	耕作溝。遺物出土なし
SD-014	溝	不明	3区	F3	1.303±	0.28	0.08	耕作溝。遺物出土なし
SD-015	溝	不明	3区	F3	1.463±	0.26	0.05	耕作溝。遺物出土なし
SD-016	溝	不明	3区	F3	1.263±	0.29	0.07	耕作溝。遺物出土なし
SD-017	溝	不明	3区	F3	1.283±	0.38	0.08	耕作溝。遺物出土なし
SD-018	溝	不明	3区	F3	1.863±	0.28	0.11	耕作溝。遺物出土なし
SD-019	溝	不明	3区	F3	2.103±	0.32	0.12	耕作溝。遺物出土なし
SD-020	溝	不明	3区	F3~4	1.53±	0.40	0.09	耕作溝。遺物出土なし
SD-021	溝	不明	3区	F3~4	1.93±	0.25	0.13	耕作溝。遺物出土なし
SD-022	溝	不明	3区	F4・G3	2.33±	0.36	0.07	耕作溝。遺物出土なし

第7表 下田遺跡(第1次)出土遺物一覧表

番号	実測番号	種類(産地)器種等	調査区	地区	遺構層位	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	調査・注法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	特記事項	
															調査・注法の特徴
1	1-2	磁器(肥前)碗	1	—	表土	30.3	—	—	外:7077', 底文, 施輪内:7077', 施輪	赤	良	輪:灰白 裏地:灰白	5039/1 58/	口縁部 1/12	—
2	1-8	陶器(肥前)碗	1	—	表土	—	—	—	外:7077', 施輪内:7077', 施輪	赤	良	輪:浅黄 裏地:灰白	2.517/3 7.517/3	口縁部 小片	—
3	1-5	陶器(肥前)碗	1	—	表土	—	4.6	—	外:7077'内:7077', 施輪	赤	良	輪:暗赤 裏地:灰白	5183/3 10186/2	底面 2/12	—
4	1-7	土製山土器	1	—	表土	長 2.4	幅 0.9	—	??'	赤	—	—	10186/6	—	重量:1.60g
5	2-1	陶器(肥前)鉢	1	—	SD001	—	—	—	外:7077', 注目内:7077'4	赤	良	輪:にじみ 裏地:灰白	5184/3 10188/1	底面 小片	—
6	1-11	石部+加工材	1	J3	SD001	長 7.6	幅 3.6	厚 0.9	—	—	—	—	—	—	重量:36.15g 砂岩
7	1-10	土師器	3	—	SD009	—	—	—	外:7077'内:7077'	赤	—	にじみ —	2.087/4	口縁部 小片	—
8	1-4	磁器(肥前)蓋	3	—	SD010	—	—	—	外:7077', 7077'4, 底文, 施輪内:7077', 底文, 施輪	赤	良	輪:灰白 裏地:灰白	2.508/1 58/	2/12	高台文(調整から用い出し高台)
9	1-3	磁器(肥前)蓋	3	—	SD010	9.9	—	—	外:7077', 7077'4, 施輪内:7077', 底文, 施輪	赤	良	輪:9 裏地:灰白	2.507/1 58/	口縁部 1/12	—
10	2-2	瓦平瓦	3	—	SD010	—	—	—	側面:??'底面:??'	赤	良	灰白	58/	—	—
11	1-1	磁器(青磁)壺	3	H2	包含層	11.8	—	—	外:7077', 施輪内:7077', 施輪	赤	良	輪:オリーブ 裏地:灰	10185/2 36/1	口縁部 1/12	縁出面直上
12	1-9	土師器	3	B3	包含層	—	—	—	外:7077'内:7077'	赤	—	浅黄 —	10186/1	口縁部 小片	縁出面直上
13	1-6	土師器 編あるいし器	3	A1	包含層	—	—	—	外:7077'内:7077'	赤	—	にじみ —	2.508/4	口縁部 小片	縁出面直上

断面で、全体の細かな埋没単位を捉えることができなかったため、詳細は不明である。遺物が出土せず、時期は明らかでないが、凹凸痕跡を残す道路は、近世まで確認されていることから¹³⁾、少なくとも近代以前と考えられる。

3 出土遺物

(1) 概要

調査区全体での出土遺物は、土器・陶磁器¹³⁾・瓦・

土製品・石製品である。総量は、コンテナ換算で2箱分、重量が1.65kg(整理前)である。

出土遺物の時期は、室町〜江戸時代であり、出土量が極めて少なく、限られた資料のうち図化できたものを報告する(第17図)。なお、各遺物の詳細については、出土遺物観察表(第7表)を参照された。

(2) 表土

1〜4は、1区の表土から出土した陶磁器・土製品である(第17図)。1は、肥前産の磁器碗である。

外面には染付手描きで文様が施されるが、文様の種類は不明である。2は、瀬戸美濃産の陶器碗である。口縁部の破片であり、詳細な器形は断定できない。3は、瀬戸美濃産の陶器碗で、高台部の破片である。削り出し高台で、内面には鉄軸が施される。1～3を個別で時期を限定することは難しいが、おおよそ18世紀～19世紀頃（江戸時代後半）のものと考えられる。4は、土鍾の破片である。両端が残っていないため、全体の大きさは不明である。

（3）溝

S D 001（第17図） 5は、瀬戸産とみられる陶器捕鉢の体部片である。捕目が粗いことから、江戸時代以降とみられるが、詳細な時期は不明である。6は、未加工の石器あるいは剥片である。材質は砂岩とみられる。

S D 009（第17図） 7は、土師器鍋の口縁部片で南伊勢系土師器である。口縁端部は、内側に折り返されてやや内湾する。伊藤編年における中世Ⅲb期⁴⁾に相当し、時期は15世紀前半頃（室町時代）と考えられる。

S D 010（第17図） 8は、肥前産の磁器碗である。外面と内面見込みには染付手描きの文様が施されるが、文様の種類は不明である。9は、肥前産の磁器蓋である。外面には青磁軸が施軸されており、内面には染付手描きの四方禰文が施される。18世紀中頃～後半（江戸時代後半）のものと考えられる。10は、平瓦である。凹・凸面ともにきれいにナデが施されており、成形時の痕跡はみられない。

（4）包含層

11～13は、3区包含層（検出面直上）から出土した土師器・陶磁器である（第17図）。11は、青磁の蓋である。口縁部の破片で、端部は波状をなす。12は、土師器鍋の口縁部で、南伊勢系土師器である。口縁端部は内側に折り返されており、器厚は薄い。伊藤編年の中世Ⅲb期⁵⁾に相当するとみられ、15世

紀前半頃（室町時代）と考えられる。13は、土師器鍋あるいは焙烙の口縁部である。口縁端部は、弱く上方へとつまみ上げられており、戦国期の南伊勢系土師器の鍋・焙烙の形状を受け継ぐものとみられる⁶⁾。17世紀以降（江戸時代中頃以降）と考えられる。

4 小結

本発掘調査では、溝および道路などの遺構を確認した。S D 001・009・010を除いて遺物が出土しなかったことから、その他の遺構の時期は明確にできない。しかし、表土や包含層および範囲確認調査で出土している遺物は、室町～江戸時代のものであり、大きく時期が遡るものがないことから、遺構は中世～近世に属する時期であると推測される。

註

- 1) 近江俊秀『古代国家と道路 考古学からの検証』青木書店 2006年
- 2) 前掲註1に同じ。
- 3) 出土した陶磁器の編年・暦年代・特徴については、以下の文献を主として参考にした。
田口昭二『美濃焼』考古学ライブラリー17 ニューサイエンス社 1983年、愛知県『愛知県史』別編第2巻 2007年、大橋康二『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社 1989年、九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000年
- 4) 伊藤裕偉『南伊勢・志摩地域の中世土器』『三重県史』資料編考古2 三重県 2008年
- 5) 前掲註4に同じ。
- 6) 伊藤裕偉『近世土師器の形態と変遷』『高河原遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 2015年、伊藤氏は上記に挙げた報告書の中で、近世の南伊勢系土師器の分類と編年を示されている。氏が示した編年に従うと近世I期（17世紀）以降のものと考えられる。

VI 中切遺跡 (第1次)

1 調査の概要

中切遺跡 (第1次) は、平成27年度高度水利機能確保基盤整備事業 (出江地区) に伴って発掘調査を実施した。調査期間は平成27年9月18日～平成28年1月22日で、調査面積は211.1㎡である。

調査区は2箇所に分かれており、北側の調査区を1区、南側の調査区を2区とした (第18図)。各調査区的面積は、1区が128.0㎡、2区が83.1㎡である。なお、地区については、1章2節 (1) で記した地区割に基づき設定し、中切遺跡の調査区は大地区ネ・への範囲に含まれる。

2 層位と遺構

(1) 基本層位

当地の基本層位は以下のとおりであり (第19図)、調査ではⅢ層上面で遺構検出を試みたが、Ⅱ層による削平・攪乱が著しいため、Ⅲ層上面よりやや深い地点で検出を行った。

- I : 現代耕土・床土 (第19図 : 1・2層)
- II : 近・現代の攪乱層 (第19図 : 13・14層)
- III : 江戸時代遺構基盤層 (灰黄色極細砂～細砂層、第19図 : 10・11層)

(2) 遺構

本発掘調査の遺構は、1区を中心に確認された (第20図)。1区は土坑13基、井戸1基、溝1条、2区は土坑1基があり、時期は江戸時代のものである⁽¹⁾。

以下の報文では、遺構種別ごとに記述する。遺構の詳細については、遺構一覧表 (第8表) を参照されたい。

①土坑

SK101 (第20図) 2区へーB12で検出した土坑で、規模は長さ1.7m、幅0.64m以上、深さ0.23mとなる。埋土は細砂の単層である。出土遺物は陶器小片があり、遺構の時期は江戸時代と考えられる。

SK103 (第19・20図) 1区ネー・T・U7～8で

検出した土坑で、規模は長さ2.1m以上、幅1.45m以上、深さ0.34mとなる。出土遺物は瀬戸美濃産の陶器、砥石があり、遺構の時期は18世紀後半から19世紀前半である。

SK104 (第20図) 1区ネー・T7～8で検出した土坑で、規模は長さ1.9m、幅1.6m、深さ0.33mとなる。出土遺物は土師器、瀬戸美濃産の陶器、肥前産の磁器があり、遺構の時期は18世紀後半である。

SK105 (第20図) 1区ネー・S・T8～9で検出した土坑で、規模は長さ4.4m、幅2.68m、深さ1.0mとなる。埋土は細砂～粗砂で構成される。出土遺物は瀬戸美濃産の陶器、常滑産の陶器、肥前産の磁器があり、遺構の時期は19世紀前半である。

SK106 (第20図) 1区ネー・S9～10で検出した土坑で、規模は長さ0.94m、幅0.6m以上、深さ0.06mとなる。埋土は細砂の単層である。出土遺物は常滑産の陶器のほか、近世の陶磁器片が含まれる。遺構の時期は江戸時代とみられる。

SK108 (第19・20図) 1区ネー・T10で検出した土坑で、規模は長さ1.6m以上、幅1.1m、深さ0.38mとなる。出土遺物は石板があり、遺構の時期は明治時代のものと考えられる。

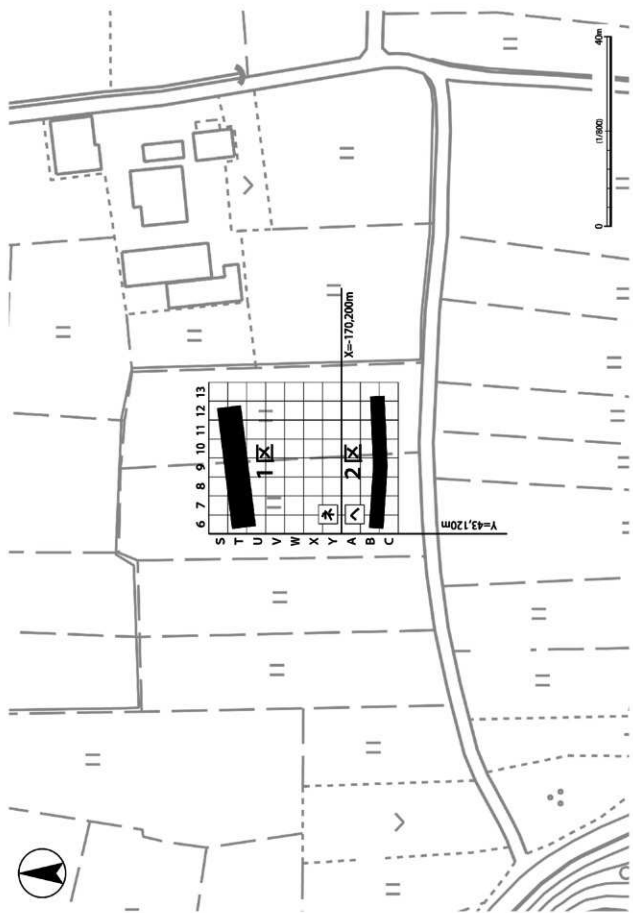
②井戸

SE110 (第19・20図) 1区ネー・S・T12で検出した井戸である。調査区東端にあり、遺構の東半分は調査区外となる。安全面を考慮して、完掘していない。掘形の平面形は方形とみられ、規模は長さ2.8m以上、幅1.3m以上、深さ0.48m以上となる。井戸枠の平面形は、直径1.0mの円形であり、井戸枠材は確認できなかった。出土遺物は、土師器、瀬戸美濃産の陶器、常滑産の陶器があり、遺構の時期は18世紀中頃である。

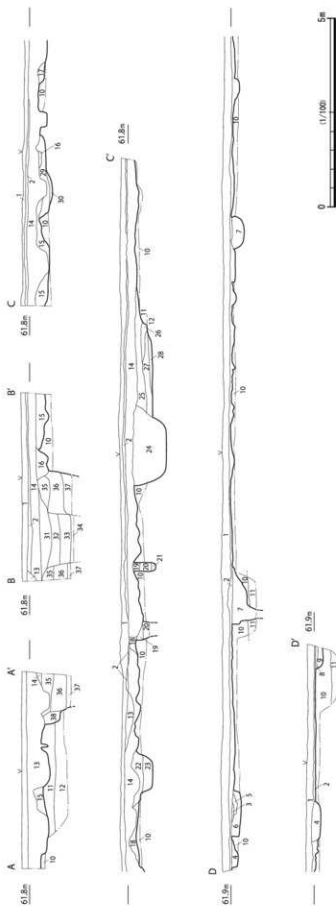
3 出土遺物

(1) 概要

調査区全体での出土遺物は、土器・陶磁器・石製品である。総量は、コンテナ換算で5箱分、重量が



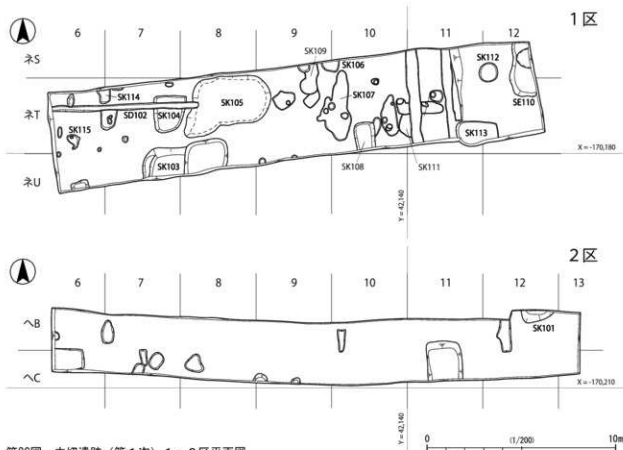
第18图 中切遺跡（第1次）調査区全体図



1. 掘削土：I層
2. 成土：I層
3. 10794/1 褐色土層
4. 10795/1 褐色土層
5. 10795/2 褐色土層
6. 10795/3 褐色土層
7. 10795/4 褐色土層
8. 10795/5 褐色土層
9. 10795/6 褐色土層
10. 10795/7 褐色土層
11. 10795/8 褐色土層
12. 10795/9 褐色土層
13. 10795/10 褐色土層
14. 10795/11 褐色土層
15. 10795/12 褐色土層
16. 10795/13 褐色土層
17. 10795/14 褐色土層
18. 2357/2 褐色土層
19. 2357/3 褐色土層

20. 2357/2 褐色土層
21. 2357/2 褐色土層
22. 10795/1 褐色土層
23. 10794/1 褐色土層
24. 2357/1 褐色土層
25. 2357/1 褐色土層
26. 10795/2 褐色土層
27. 10795/2 褐色土層
28. 10795/2 褐色土層
29. 2357/2 褐色土層
30. 2357/2 褐色土層
31. 2357/2 褐色土層
32. 2357/2 褐色土層
33. 2357/2 褐色土層
34. 2357/2 褐色土層
35. 2357/1 褐色土層
36. 2357/2 褐色土層
37. 2357/2 褐色土層

第19図 中切遺跡(第1次) 1・2区壁面土層断面



第20図 中切遺跡（第1次）1・2区平面図

9.05kg（整理前）である。

出土遺物の時期は、江戸時代のもものが中心である。各遺物の詳細については、出土遺物観察表（第9表）を参照されたい。以下の報文では、遺構種別ごとに分けて記述する（第21図）。

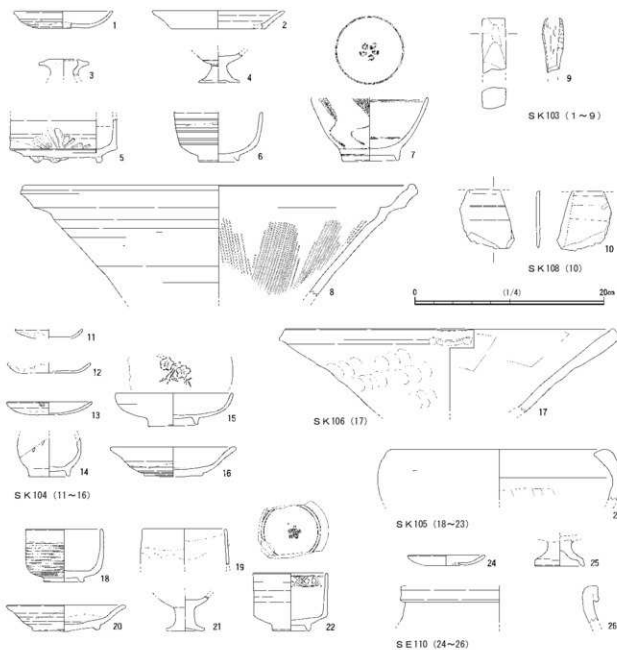
（2）土坑

SK103（第21図） 出土遺物は瀬戸美濃産の陶器（1～8）が主である。灯明皿（1）は18世紀後半のもの。皿（2）は、詳細な器種は不明である。徳利（3）は口縁部のみ残存する。染付仏具（4）は輪高台のもの。筒形香炉（5）は体部に文様が2箇所、高台が三方に施されており、時期は18世紀後半のもの。腰鎔茶碗（6）は鉄軸と灰軸の掛け分けで、削り出し高台であり、時期は18世紀後半のもの。染付広東碗（7）は削り出し高台で、内・外面に施文が見られる。時期は19世紀前半のもの。鉄軸搥鉢（8）は、搥目の密度が粗く、時期は18世紀後半のもの。砥石（9）は砂岩製のもので、一面のみが使用されており、他の三面には製作時の工具加工痕が残る。

SK104（第21図） 土師器皿（11～13）は、口径7～9cmのもので、12・13には油煙痕があり灯明皿として用いられている。陶磁器には、肥前産の磁器（14）と瀬戸美濃産の陶器（15・16）がある。染付瓶（14）は削り出し高台で、外面には施文がある。摺絵皿（15）は削り出し高台で、見込みには梅文が見られ、時期は18世紀後半のものである。輪軸皿（16）は削り出し高台のものである。

SK105（第21図） 瀬戸美濃産の陶器（18～20）、肥前産の磁器（21・22）、常滑産の陶器（23）がある。鍍茶碗（18）は外面が鉄軸と鎔軸の掛け分けで、削り出し高台であり、時期は19世紀前半のもの。箱形湯呑（19）には鉄軸が施される。輪軸皿（20）は削り出し高台のもの。仏具（21）は底部が半球状に凹む。染付筒形湯呑（22）は、外面が青軸、内面は白軸となり、内面のみ施文がある。常滑産の陶器火鉢（23）は、内面には煤が付着する。時期は19世紀前半のものともみられる。

SK106（第21図） 常滑産の陶器鉢鉢（17）は、口縁部に片口状の凹部がある。内面は使用によって



第21図 中切遺跡（第1次）出土遺物実測図

摩耗している。時期は14世紀後半のものと思われる。
SK108（第21図） 石板（10）は、長さ6.3cm、幅5.7cmが残存する。表面には幅1.5cmの方眼状に線刻があり、裏面には1.0～1.5cm間隔で横方向の線刻が施される。小型の黒板のような筆記具で、明治時代のもと考えられる¹⁷⁾。

（3）井戸

SE110（第21図） 土師器皿（24）は口径7.8cmのもの。瀬戸美濃産の陶器仏飯具（25）は、高台はロクロナデにより調整されており、時期は18世紀中頃のもの。常滑産の陶器壺（26）は15世紀のもので、

混入資料と考えられる。

4 小結

本発掘調査では、江戸時代（18世紀中頃～19世紀前半）を中心とした遺構が確認された。調査対象となった18世紀中頃以降の集落の状況は、明治19（1886）年の『伊勢国飯高郡下出江村全図』¹²⁾が参考となる（巻頭図版1・2）。調査区の所在地は、絵図では字が中切にあたり、字内には宅地が4箇所に記されている。1区の北側に隣接して宅地が描かれて

第8表 中切遺跡(第1次)遺構一覧表

遺構名	性格	時代	調査区	地区	高さ・長軸(m)	幅・短軸(m)	深さ(m)	備考
SK 101	土坑	江戸	2区	～812	1.7	0.64以上	0.23	
SK 102	溝	江戸	1区	～16～8	2.7以上	0.3	0.49	
SK 103	土坑	江戸	1区	～7～17～8	2.1以上	1.45以上	0.34	
SK 104	土坑	江戸	1区	～17～8	1.9	1.6	0.23	
SK 105	土坑	江戸	1区	～8～18～9	1.4	2.49	1.0	
SK 106	土坑	江戸	1区	～9～10	0.94	0.63以上	0.06	
SK 107	土坑	江戸	1区	～10、19～10	0.9	1.8	0.07	
SK 108	土坑	江戸～明治	1区	～10	1.63以上	1.1	0.38	
SK 109	土坑	江戸	1区	～8～19	1.55以上	0.99	0.07	
SK 110	井戸	江戸	1区	～8～112	2.62以上	1.32以上	0.49以上	穴開している。
SK 111	土坑	江戸	1区	～10～11	1.23以上	0.85以上	0.04	
SK 112	土坑	江戸	1区	～8～111～12	0.99	0.99	0.17	
SK 113	土坑	江戸	1区	～11～12	2.21	1.3	0.1	
SK 114	土坑	江戸	1区	～10～7	0.742以上	0.58	0.18	
SK 115	土坑	江戸	1区	～16	0.7	0.5	0.08	

第9表 中切遺跡(第1次)出土遺物観察表

番号	実測番号	種類(産物) 器種等	調査区	地区	遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調整・技法の特徴	胎土	構成	色調	残存度	特記事項	
1	2-6	陶器(朱塗) 打明瓦	1	817	SK103	10.4	—	1.8	外:「b7b」,「b7b」, 黒釉 内:「b7b」, 黒釉	赤黒	釉: 土赤・赤釉 素地: 灰白	SK1/4 2.536/2	3/12		
2	2-9	陶器(黒)土 磨削	1	817	SK103	13.8	—	—	外:「b7b」, 黒釉 内:「b7b」, 黒釉	赤黒	釉: 浅黄 素地: 灰白	SK7/3 SK9/2	1/12	口縁部	
3	2-7	陶器(朱塗) 磨削	1	817	SK103	3.0	—	—	外:「b7b」, 黒釉 内:「b7b」, 黒釉	赤黒	釉: 土赤・赤釉 素地: 灰白	SK1/4 2.536/2		口縁部	
4	2-8	磁器(黒)陶器 仏蘭瓦	1	817	SK103	—	4.1	—	外:「b7b」,「b7b」, 黒釉 内:「b7b」, 黒釉	赤黒	釉: 灰白 素地: 灰白	SK8/1 SK9/2	SK10	2/12	割り出し高台
5	2-1	陶器(黒)打 明瓦	1	817	SK103	—	11.5	—	外:「b7b」,「b7b」, 黒文, 黒釉 内:「b7b」, 黒釉	赤黒	釉: 土赤・赤 素地: 灰白	7.532/4 2.536/2	SK10	2/12	割り出し高台
6	2-4	陶器(黒)磨 削茶碗	1	817	SK103	9.0	3.7	5.3	外:「b7b」,「b7b」, 黒文, 黒釉 内:「b7b」, 黒釉	赤黒	釉: 黒釉 素地: 灰白	7.532/2 7.532/2	11/12	割り出し高台	
7	2-2	陶器(朱塗) 金付瓦(朱塗)	1	817	SK103	12.2	5.5	6.8	外:「b7b」,「b7b」, 黒文, 黒釉 内:「b7b」, 黒文, 黒釉	赤黒	釉: 灰白 素地: 灰白	2.503/1 2.536/2	7/12	割り出し高台	
8	1-1	陶器(黒)陶器 磁器	1	817	SK103	41.2	—	—	外:「b7b」,「b7b」, 黒釉 内:「b7b」, 黒目, 黒釉	赤黒	釉: 土赤・赤釉 素地: 灰白	SK1/3 2.536/2	9/12	SK大の砂含む	
9	2-9	石製品 砥石	1	817	SK103	長 5.7	幅 2.6	厚 2.3	一面に使用痕。三面に加工跡の上 具痕。	—	—	—	—	重量: 98.4g 砂岩	
10	8-10	石製品 石版	1	817	SK105	長 6.3	幅 5.7	厚 0.4	厚: 1.5cm内に磨削 痕: 横方向に磨削	—	—	—	—	重量: 21.2g	
11	3-5	土師器 土	1	817	SK104	7.1	—	1.0	外:「f」 内:「f」	赤	一 稜	SK16/6	8/12	SK大の砂含む	
12	4-8	土師器 土	1	817	SK104	8.0	—	1.1	外:「d」,「f」,「f」, 磨削痕 内:「f」, 磨削痕	赤	一 稜	SK16/6	6/12	磨明基 SK大の砂含む	
13	4-7	土師器 土	1	817	SK104	8.0	—	1.4	外:「d」,「f」,「f」, 磨削痕 内:「f」, 磨削痕	赤	一 稜	SK16/6	10/12	磨明基 SK大の砂含む	
14	2-5	磁器(把筒) 仏蘭瓦	1	817	SK104	—	4.2	—	外:「b7b」,「b7b」, 黒文, 黒釉 内:「b7b」, 黒釉	赤黒	釉: 灰白 素地: 灰白	SK8/1 SK9/2	SK10 12/12	2/12	
15	4-6	陶器(朱塗) 磨削瓦	1	817	SK104	12.3	5.0	3.4	外:「b7b」,「b7b」, 黒釉 内:「b7b」, 黒文, 黒釉	赤黒	釉: 明け- 素地: 灰白	2.503/1 2.536/2	5/12	割り出し高台	
16	4-1	陶器(黒)打 明瓦	1	817	SK104	13.0	6.1	3.1	外:「b7b」,「b7b」, 黒釉 内:「b7b」, 黒釉	赤黒	釉: 黒灰 素地: 灰白	SK1/3 SK9/2	5/12	割り出し高台	
17	3-1	陶器(朱塗) 磁器	1	819 ～10	SK106	34.6	—	—	外:「d」,「f」,「f」 内:「f」,「f」	赤黒	浅黄緑	7.538/4	1/12	SK大の砂含む	
18	4-3	陶器(黒)陶器 磁器	1	818	SK105	7.9	3.5	5.6	外:「b7b」,「b7b」, 黒文, 黒釉 内:「b7b」, 黒釉	赤黒	釉: 黒釉 素地: 灰白	7.532/2 7.536/4	6/12	割り出し高台	
19	4-4	陶器(朱塗) 磨削茶碗	1	818	SK105	8.6	—	—	外:「b7b」, 黒釉 内:「b7b」, 黒釉	赤黒	釉: 黒釉 素地: 灰白	SK1/3 2.536/2	2/12		
20	4-2	陶器(黒)打 明瓦	1	818	SK105	12.3	6.5	2.8	外:「b7b」,「b7b」, 黒釉 内:「b7b」, 黒釉	赤黒	釉: 明け- 素地: 灰白	2.503/1 2.536/2	2/12	割り出し高台	
21	4-5	磁器(把筒) 仏蘭瓦	1	818	SK105	—	7.8	—	外:「b7b」,「b7b」, 黒釉 内:「b7b」, 黒釉	赤黒	釉: 灰白 素地: 灰白	SK1/3 SK9/2	SK10 11/12	割り出し高台	
22	4-9	磁器(把筒) 金付瓦(朱塗)	1	818	SK105	7.7	3.8	6.1	外:「b7b」,「b7b」, 黒釉 内:「b7b」, 黒文, 黒釉	赤黒	釉(内): 明け- 素地(内): 灰白	2.503/1 SK9/2	SK10 SK9/2	4/12	割り出し高台
23	3-3	土師器 土鉢	1	818	SK105	22.4	—	—	外:「b7b」,「b7b」 内:「f」,「f」, 磨削痕	赤黒	一 稜	SK16/6	1/12	SK大の砂含む	
24	3-4	土師器 土	1	812	SE110 井戸内	7.8	—	1.1	外:「f」 内:「f」	赤	一 稜	SK16/6	3/12	SK大の砂含む	
25	3-6	陶器(黒)陶器 仏蘭瓦	1	812	SE110 井戸内	—	5.0	—	外:「b7b」, 黒釉 内:「b7b」,「b7b」	赤黒	釉: 灰白 素地: 土赤・赤釉	SK8/1 SK9/2	SK10 9/12	2/12	
26	3-2	陶器(朱塗) 土	1	812	SE110 井戸内	26.2	—	—	外:「b7b」 内:「b7b」	赤黒	一 稜	SK16/6	1/12	SK大の砂含む	

おり、これらは現代の宅地と位置がほぼ合致していることがわかる。2区の周辺には宅地は見られず、調査区は田畑にあたる。

調査では1区を中心に井戸・土坑・溝が確認され、2区の遺構は希薄であった。調査状況と絵図を照らし合わせると、1区は田畑の一角を宅地で使用された陶磁器などの日用品を廃棄する場として利用されたことが想定される。SE110は耕作に利用する野井戸の可能性がある。2区は遺構が希薄な状況であることから、田畑としての土地利用が長期間続いていたことが考えられる。

注

- (1) 出土遺物の時期は、下記の文献を参考にした。
瀬戸美濃産陶器：愛知県『愛知県史』別編第2巻 2007年
常滑産陶器：中野晴久「常滑」『江戸時代のやきもの一生産と流通一』財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006年、愛知県『愛知県史』別編第3巻 2012年
肥前陶磁：九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000年
- (2) 唐古・鎌考古学ミュージアム『寺内町と陣屋の考古学—近世田原本の成立—』2009年。平野氏陣屋跡第3次調査において、尋常小学校で使用された石板が出土している。
- (3) 勢和村史編集委員会『勢和村史』資料編一 勢和村 2001年。絵図は三重県総合博物館に所蔵されており、資料調査の機会を得られた。なお、巻頭図版の画像は、三重県総合博物館の許可を得て掲載した。

Ⅶ 新神馬場遺跡（第4次）

1 調査の概要

新神馬場遺跡（第4次）は、平成27年度高度水利用機能確保基盤整備事業（出江地区）に伴って発掘調査を実施した。調査期間は平成27年9月18日～平成28年1月22日で、調査面積は206.9㎡である。

調査区は2箇所に分かれており、東側の調査区を1区、西側の調査区を2区とした（第22図）。各調査区の面積は、1区が146.3㎡、2区が60.6㎡である。なお、地区については、1章2節（1）で記した地区割に基づき設定し、新神馬場遺跡の調査区は大地区ナの範囲に含まれる。

なお、新神馬場遺跡では、昭和41・42年にかけて、勢和大橋建設工事に伴う発掘調査（第1～3次）が行われており、縄文時代後期の土器、石器が数多く出土している^{11）}。

2 層位と遺構

（1）基本層位

当地の基本層位は以下のとおりであり（第23図）、調査ではⅢ層上面で遺構検出を行った。

- I：現代耕土・床土（第23図：1・2層）
- II：鎌倉時代遺物包含層（第23図：3層）
- III：鎌倉時代の遺構基盤層（にぶい黄色極細砂層、第23図：16層）

（2）遺構

本発掘調査の遺構は1区を中心に確認された。遺構は掘立柱建物1棟、土坑15基、溝1条があり、時期は鎌倉～室町時代のものである^{12）}。

以下の報文では、遺構種別ごとに記述する。遺構の詳細については、遺構一覧表（第10表）を参照されたい。

①掘立柱建物

S B 217（第24・25図） 1区ナー・K・L・M・N 19～20で検出した4間×2間以上の総柱建物と考えられる。柱間は2.1～2.7mとばらつきがみられる。建物内の東側にはS K 206が伴う。遺構の時期は中

世Ⅲb期である。

②土坑

S K 201（第23・24図） 2区ナー・N17で検出した土坑で、規模は長さ1.1m、幅0.45m以上、深さ0.29mとなる。埋土は灰黄色極細砂の単層である。遺構の時期は中世Ⅱb期～Ⅲa期である。

S K 206（第24・25図） 1区ナー・K・L・M・N 20で検出した土坑で、規模は長さ9.15m、幅1.5m以上、深さ0.46mとなる。S B 217の東側にあたり、建物内土坑と考えられる。土坑の形状は、平面が隅丸方形か楕円形になるとみられ、断面が中央から南側にかけて一段低くなる構造である。埋土は大きく上層（第25図：4・5層）と下層（第25図：6層）からなり、上層では遺物がまとまって出土した。遺構の時期は中世Ⅲb期である。

S K 209（第24図） 1区ナー・J・K 20で検出した土坑で、規模は長さ1.05m、幅1.0m、深さ0.11mとなる。埋土は灰黄褐色極細砂の単層である。遺構の時期は中世Ⅲb期である。

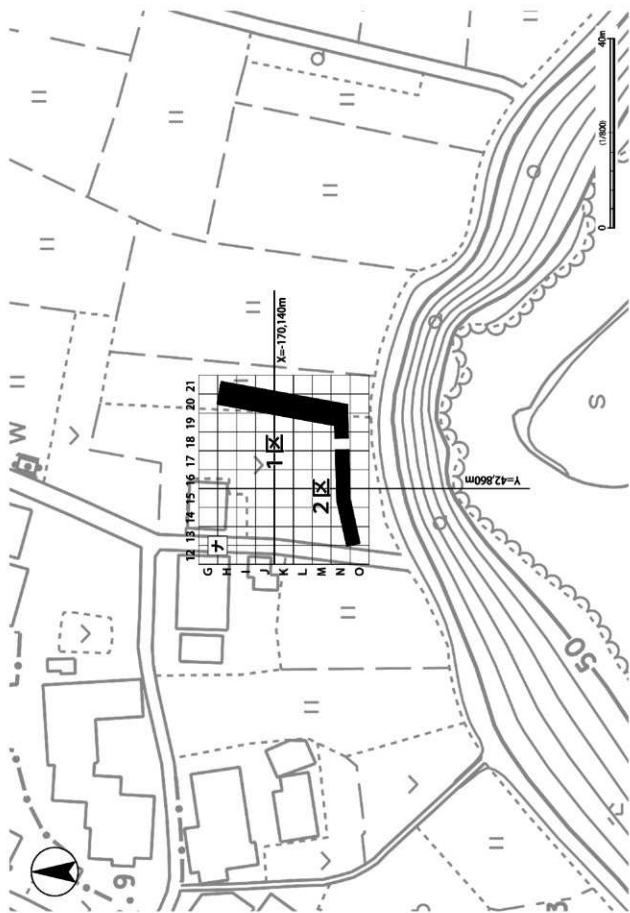
S K 211（第23・24図） 1区ナー・I 21で検出した土坑で、規模は長さ1.55m、幅0.45m以上、深さ0.1mとなる。埋土は灰黄褐色極細砂の単層である。土器の小片が出土しており、遺構の時期は室町時代であろう。

S K 212（第24図） 1区ナー・I 20で検出した土坑で、規模は長さ0.85m、幅0.78m、深さ0.12mとなる。埋土は灰黄褐色極細砂の単層である。遺構の時期は中世Ⅲb期である。

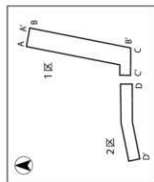
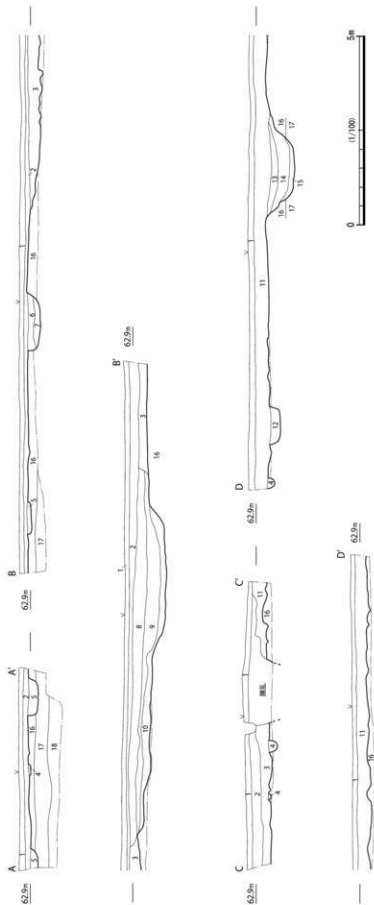
S K 213（第24図） 1区ナー・H・I 20で検出した土坑で、規模は長さ1.0m、幅0.9m、深さ0.09mとなる。埋土は灰黄褐色極細砂の単層である。土器小片が出土しており、遺構の時期は室町時代であろう。

S K 215（第24図） 1区ナー・H 20で検出した土坑で、規模は長さ0.7m、幅0.5m以上、深さ0.07mとなる。埋土は灰黄褐色極細砂の単層である。土器の小片が出土しており、遺構の時期は室町時代であろう。

S K 216（第24図） 1区ナー・H 20で検出した土坑

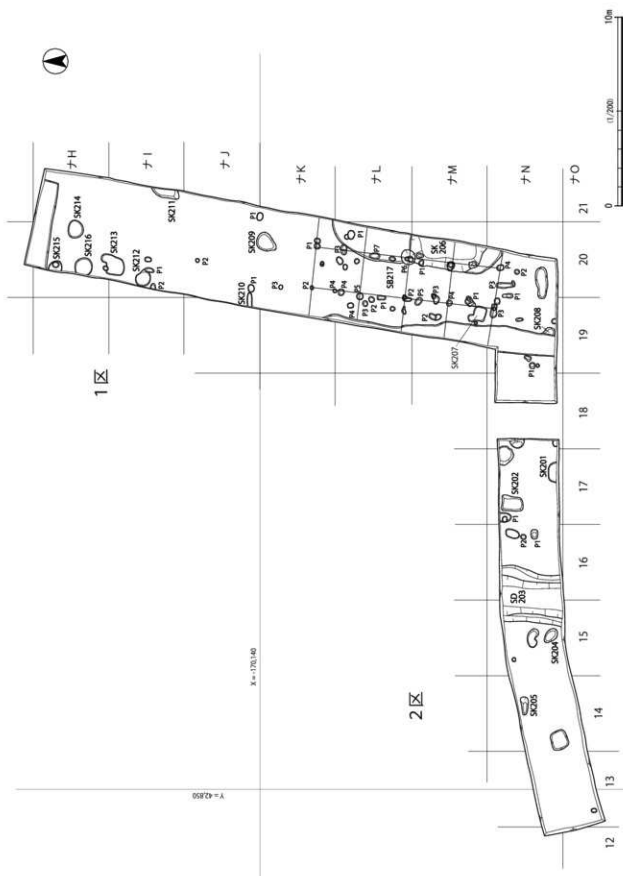


第22図 新神馬場遺跡（第4次）調査区全体図

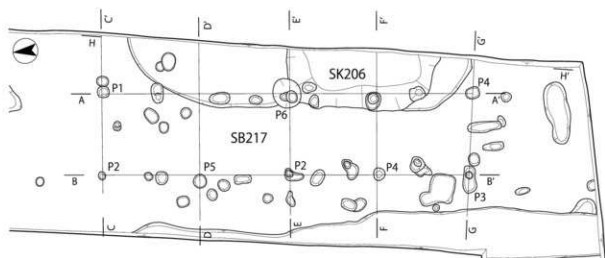


1. 埋藏土：I層
 2. 3Y6/1 灰白色焼締砂 (5~10mm×5%赤心)：I層
 3. 10Y6/1 灰白色焼締砂 (2.5Y7/4 淡黄色焼締砂ブロック20%赤心)：II層
 4. 2JY6/1 灰白色焼締砂 (2.5Y6/4 に近い黄白色焼締砂ブロック25%赤心)：P4
 5. 10Y6/2 灰黄色焼締砂 (2.5Y7/4 に近い黄白色焼締砂ブロック25%赤心)：土坑
 6. 10Y6/2 灰黄色焼締砂 (5.0Y2/1 土坑)
 7. 10Y6/2 灰黄色焼締砂 (10Y6/2 に近い黄白色焼締砂ブロック25%赤心)：SQ211
 8. 2JY6/3 黄白色焼締砂 (土層・厚が少し赤心)：SK206
 9. 2JY4/2 暗灰黄色焼締砂 (2.5Y7/4 淡黄色焼締砂ブロック10%、土層少し赤心)：SK206
 10. 2JY6/2 灰黄色焼締砂 (2.5Y7/4 淡黄色焼締砂ブロック20%赤心)：SK206
 11. 2JY6/2 暗灰黄色焼締砂 (2.5Y7/4 淡黄色焼締砂ブロック20%赤心)：土層上
 12. 2JY6/2 灰黄色焼締砂 (2.5Y7/4 淡黄色焼締砂ブロック5%赤心)：SK201
 13. 2JY6/2 暗灰黄色焼締砂 (5.0Y2/1 埋藏土)
 14. 2JY6/2 暗灰黄色焼締砂 (5.0Y2/1 埋藏土)
 15. 2JY6/2 暗灰黄色焼締砂 (5.0Y2/1 埋藏土)
 16. 2JY6/4 に近い黄白色焼締砂 (埋藏土)
 17. 灰白色焼締砂 (ブロック5%赤心)：埋藏層
 18. 2JY7/1 灰白色焼締砂：埋藏層

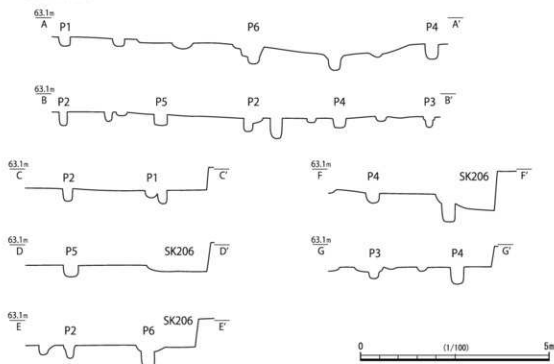
第23図 新神馬場遺跡 (第4次) 1・2区壁面土層断面図



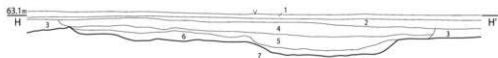
第24図 新神馬場遺跡(第4次) 1・2区平面図



〔SB217 掘形断面図〕



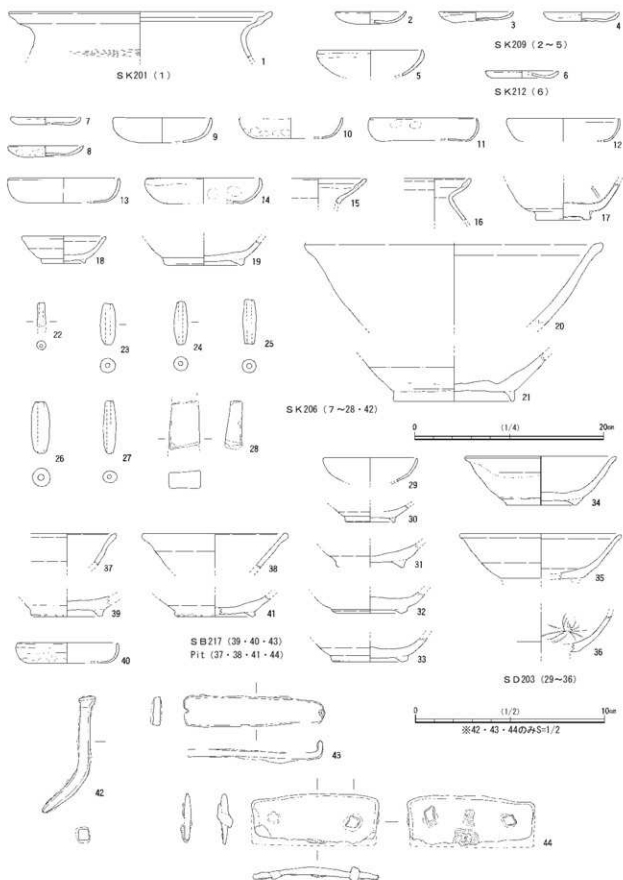
〔SK206 土層断面図〕



SK206

1. 掘跡土
2. 5Y6/1 灰色極細砂 (5~10mm次の礫1%含む) : I層
3. 10YR/1 褐灰色極細砂 (2.5Y7/4 浅黄色極細砂ブロック20%含む) : II層
4. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂 (土器・炭片少し含む) : SK206
5. 2.5Y4/2 褐灰色極細砂 (2.5Y7/4 浅黄色極細砂ブロック10%、土器少し含む) : SK206
6. 2.5Y6/2 灰黄色極細砂 (2.5Y7/4 浅黄色極細砂ブロック20%含む) : SK206
7. 2.5Y6/4 に近い黄色極細砂 : III層

第25図 SB217・SK206平面図および掘形・土層断面図



第26図 新神馬場遺跡（第4次）出土遺物実測図

で、規模は長さ0.9m以上、幅0.9m、深さ0.12mとなる。埋土は灰黄褐色極細砂の単層である。土器の小片が出土しており、遺構の時期は室町時代であろう。

③溝

SD203 (第23・24図) 2区ナ- N・O15~16で検出した溝で、規模は長さ3.15m以上、幅3.1m、深さ0.71mとなる。調査区外南側20m程で棚田川の河岸段丘斜面にあたり、河川へ向かう水路としての機能が考えられる。最下層からは12世紀中頃の山茶碗が出土しているが、周辺遺構の関係から室町時代まで継続することが想定される。

3 出土遺物

(1) 概要

調査区全体での出土遺物は、土器・陶器・土製品・石製品・鉄製品である。総量は、コンテナ換算で7箱分、重量が12.95kg(整理前)である。

出土遺物の時期は鎌倉～室町時代が中心となり、土師器や陶器が多くを占める。なお、縄文土器の出土は確認できなかった。各遺物の詳細については、出土遺物観察表(第11・12表)を参照されたい。以下の報文では、遺構種別ごとに分けて記述する(第26図)。

(2) 掘立柱建物

SB217 (第26図) ナ- L20 Pit 6出土の山茶碗(39)は、渥美型6型式のものである。ナ- M19 Pit 4出土の南伊勢系土師器皿(40)は、B形態で中世Ⅲb期である。ナ- K20 Pit 2出土の鉄製品(43)は、先端が屈曲した工具状のものとみられる。先端の対面には、幅2mm程の窪みが確認できる。

(3) 土坑

SK201 (第26図) 南伊勢系土師器鍋(1)は中世Ⅱb期～Ⅲa期のもの。

SK206 (第26図) 南伊勢系土師器は皿(7~14)・鍋(15・16)があり、皿はA形態(7・8)とB形態(9~14)に分かれ、中世Ⅲa期～Ⅲb期のものと考えられる。青磁碗(17)は削り出し高台で、内面には施文が見られる。陶器皿(18)、山茶碗(19)、片口鉢(20・21)は渥美型6型式のもの。土鍾(22

～27)は土師質のものである。砥石(28)は、砂岩製で四面とも使用されている。鉄製の釘(42)は、断面の形状が方形で、先端部に向かって屈曲している状態となっている。

SK209 (第26図) 南伊勢系土師器皿(2~5)は、口径7~8cmのA形態、口径11cmのB形態があり、中世Ⅲb期のものである。

SK212 (第26図) 南伊勢系土師器皿(6)はA形態のもので、中世Ⅲb期と考えられる。

(4) 溝

SD203 (第26図) 南伊勢系土師器皿(29)は、B形態のもので中世Ⅱb期のもの。山茶碗(30~35)は渥美型6型式のもの。青磁碗(36)は内面に施文が見られる。

(5) Pit

ナ- L20 Pit 1 (第26図) 山茶碗(37)は尾張型6~7型式のものである。

ナ- L20 Pit 4 (第26図) 山茶碗(38)は渥美型6型式のものである。

ナ- M16 Pit 1 (第26図) 山茶碗(41)は尾張型6~7型式のものである。

ナ- L19 Pit 1 (第26図) 鉄製品(44)は、厚さ0.5~0.8cmの板状のもので、全体が若干湾曲している。側面の一部が失われているため、全体形状は不明である。2箇所留め具状のものが打ち付けられており、片面ではその折返しを確認できる。折返しがある面には、有機質とみられる付着物が部分的に残る。

4 小結

本発掘調査では、室町時代を中心とした集落遺跡の一端が明らかとなった。建物跡はSB217のみ確認できたが、この周囲にも建物が展開したことが想定される。建物西側に南北方向に延びるSD203があり、これが集落の区画溝や地割に相当するものであろう。出土遺物には山茶碗などが多く含まれることから、周囲における集落形成の初現は平安時代末～鎌倉時代と考えられる。

SB217の建物内にあるSK206は、南北に長い隅丸方形が想定され、特に南側半分が深くなる構造で

第10表 新神馬場遺跡（第4次）遺構一覧表

遺構名	性態	時期・時代	調査区	地区	長さ・長軸(m)	幅・短軸(m)	深さ(m)	備考
SK 201	土坑	鎌倉～室町	2区	ナ-N17	1.1	0.45以上	0.29	
SK 202	土坑	室町古	2区	ナ-N17	1.1	0.75	0.26	土器小片出土
SD 203	溝	鎌倉～室町	2区	ナ-K・015～16	3.15以上	3.1	0.71	
SK 204	土坑	室町古	2区	ナ-N15	0.9	0.56	0.32	土器小片出土
SK 205	土坑	室町古	2区	ナ-N14	0.98	0.35	0.39	土器小片出土
SK 206	土坑	室町	1区	ナ-K・L・M・K20	9.15	1.5以上	0.46	第217に併り 南東隅土坑
SK 207	土坑	室町古	1区	ナ-M19	0.78	0.68	0.11	土器小片出土
SK 208	土坑	室町古	1区	ナ-M19	0.6	0.36	0.11	土器小片出土
SK 209	土坑	室町	1区	ナ-J・K20	1.05	1.0	0.11	
SK 210	土坑	室町古	1区	ナ-J19～20	0.7以上	0.25	0.05	土器小片出土
SK 211	土坑	室町古	1区	ナ-I21	1.55	0.45以上	0.1	
SK 212	土坑	室町	1区	ナ-I20	0.95	0.78	0.12	
SK 213	土坑	室町古	1区	ナ-II・I20	1.0	0.9	0.09	
SK 214	土坑	不明	1区	ナ-I20	0.94	0.9	0.28	
SK 215	土坑	室町古	1区	ナ-I20	0.7	0.5以上	0.07	
SK 216	土坑	室町古	1区	ナ-I20	0.9以上	0.9	0.12	
SD 217	版立柱建物	室町	1区	ナ-K・L・M・K 19～20	柱間2.1～2.7m			SK206併り5

第11表 新神馬場遺跡（第4次）出土遺物観察表（1）

番号	発掘番号	種類 器種等	調査区	地区	遺構	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調整・技法の特徴	胎土 構成	色調	残存度	特記事項	
1	1-1	土師器 鉢	2	ナ N17	SK201	27.6	—	—	外:赤, 222° 内:??, 332°	密	—	にぶい裏面	10/8/3 2/12	2cm大の砂含む
2	1-9	土師器 皿	1	ナ K20	SK209	7.4	—	1.3	外:赤, 222° 内:??, 332°	密	—	改良澄	10/8/3 2/12	
3	1-8	土師器 皿	1	ナ K20	SK209	7.8	—	1.1	外:赤, 222° 内:??, 332°	密	—	改良澄	10/8/3 6/12	
4	1-7	土師器 皿	1	ナ K20	SK209	8.0	—	1.0	外:赤, 222° 内:??, 332°	密	—	改良澄	10/8/3 3/12	粘土残存あり
5	1-4	土師器 皿	1	ナ K20	SK209	11.0	—	—	外:赤, 222° 内:??, 332°	密	—	改良澄	7, 5/8/3 5/12	粘土残存あり
6	1-11	土師器 皿	1	ナ I20	SK212	7.8	—	0.8	外:赤, 222° 内:??, 332°	密	—	灰白	10/8/3 3/12	歪み大きい
7	1-10	土師器 皿	1	ナ M20	SK206	7.4	—	0.8	外:赤, 222° 内:??, 332°	密	—	改良澄	10/8/3 4/12	
8	1-6	土師器 皿	1	ナ M20	SK206	8.0	—	1.2	外:赤, 222° 内:??, 332°	密	—	改良澄	10/8/3 9/12	
9	4-4	土師器 皿	1	ナ M20	SK206	10.4	—	2.6	外:赤, 222° 内:??, 332°	密	—	淡黄	2, 5/8/3 2/12	
10	1-5	土師器 皿	1	ナ M20	SK206	10.8	—	2.2	外:赤, 222° 内:??, 332°	密	—	淡黄	2, 5/8/3 3/12	
11	4-3	土師器 皿	1	ナ M20	SK206	11.2	—	2.4	外:赤, 222° 内:??, 332°	密	—	淡黄	2, 5/8/3 3/12	
12	4-2	土師器 皿	1	ナ M20	SK206	11.6	—	2.5	外:赤, 222° 内:??, 332°	密	—	淡黄	2, 5/8/3 3/12	
13	4-6	土師器 皿	1	ナ M20	SK206	11.6	—	2.6	外:赤, 222° 内:??, 332°	密	—	改良澄	10/8/3 5/12	

第12表 新神馬場遺跡(第4次)出土遺物観察表(2)

番号	実測番号	種類 器種等	調査区	地区	遺構	口径 (mm)	底部径 (mm)	高さ (mm)	調整・技法の特徴	胎土	構成	色調	残存度	特記事項	
14	1-3	土師器 土師	1	ナ M20	SK206	12.0	—	2.7	外: 2C ⁺ 黄, 7F ⁺ , 27F ⁺ 内: 2C ⁺ 黄, 33F ⁺	赤	—	淡黄	2.5/8/3	粘土組織あり	
15	1-2	土師器 土師	1	ナ M20	SK206	—	—	—	外: 27F ⁺ 内: 33F ⁺	赤	—	にぶい黄橙	10/8/3	口縁部 小片 2mm大の砂を含む 外面襷付着	
16	4-6	土師器 土師	1	ナ M20	SK206	—	—	—	外: 7F ⁺ , 33F ⁺ 内: 7F ⁺ , 33F ⁺	赤	—	浅黄	2.5/7/3	口縁部 小片 2mm大の砂を含む 外面襷付着	
17	3-6	青磁 碗	1	ナ M20	SK206	—	3.4	—	外: 27F ⁺ , 27F ⁺ 1/3, 施釉 内: 27F ⁺ , 施文, 施釉	赤	良	緑・白 ⁺ 灰 黒地・灰白	10/6/2 8/6	2/12	柄り出し高台
18	3-3	陶器 皿	1	ナ M20	SK206	9.0	4.4	2.9	外: 27F ⁺ , 7F ⁺ , 赤切痕 内: 27F ⁺	赤	良	灰黄	2.5/7/2	4/12	2mm大の砂を含む 貼り付け高台
19	3-4	陶器 山形碗	1	ナ M20	SK206	—	7.6	—	外: 27F ⁺ , 赤切痕 内: 27F ⁺	赤	良	灰白	2.5/8/2	3/12	1mm大の砂を含む 貼り付け高台
20	4-1	陶器 片口鉢	1	ナ M20	SK206	31.2	—	—	外: 27F ⁺ 内: 27F ⁺	赤	良	灰黄	2.5/6/2	1/12	2mm大の砂を含む
21	3-1	陶器 片口鉢	1	ナ M20	SK206	—	12.4	—	外: 27F ⁺ , 27F ⁺ 1/3, 工具付, 赤切痕 内: 27F ⁺	赤	良	灰黄	2.5/7/2	5/12	2mm大の砂を含む
22	2-6	土製品 土師	1	ナ M20	SK206	長 2.5	幅 0.9	厚 0.9	7F ⁺	赤	—	灰黄褐	10/8/6/2	—	重量: 2.76g
23	2-5	土製品 土師	1	ナ M20	SK206	長 4.3	幅 1.6	厚 1.6	7F ⁺	赤	—	にぶい黄橙	10/8/7/3	—	重量: 9.08g
24	2-4	土製品 土師	1	ナ M20	SK206	長 4.5	幅 1.4	厚 1.4	7F ⁺	赤	—	にぶい黄橙	10/8/7/2	—	重量: 10.45g
25	2-3	土製品 土師	1	ナ M20	SK206	長 4.6	幅 1.4	厚 1.4	7F ⁺	赤	—	灰白	5/8/1	—	重量: 7.2g
26	2-1	土製品 土師	1	ナ M20	SK206	長 5.5	幅 1.8	厚 1.8	7F ⁺	赤	—	にぶい黄橙	10/8/6/3	—	重量: 23.4g
27	2-2	土製品 土師	1	ナ M20	SK206	長 5.6	幅 1.3	厚 1.3	7F ⁺	赤	—	灰	5/8/1	—	重量: 8.48g
28	2-7	石製品 砥石	1	ナ M20	SK206	長 5.1	幅 3.3	厚 1.8	四面に使用痕	—	—	—	—	—	砂岩 重量: 44.1g
29	4-5	土師器 皿	2	ナ N15	SE203	9.8	—	—	外: 2C ⁺ 黄, 7F ⁺ , 33F ⁺ 内: 7F ⁺ , 33F ⁺	赤	—	にぶい黄橙	10/8/7/4	—	
30	5-4	陶器 山形碗	2	ナ N16	SE203	—	4.9	—	外: 27F ⁺ , 赤切痕, 自然釉 内: 27F ⁺	赤	良	黄灰	2.5/8/1	4/12	
31	3-5	陶器 山形碗	2	ナ N15	SE203	—	6.4	—	外: 27F ⁺ , 赤切痕 内: 27F ⁺	赤	良	灰黄	2.5/7/2	底部 12/12	1mm大の砂を含む
32	5-3	陶器 山形碗	2	ナ N15	SE203	—	6.8	—	外: 27F ⁺ , 赤切痕 内: 27F ⁺	赤	良	灰黄	2.5/7/2	底部 12/12	
33	5-1	陶器 山形碗	2	ナ N15	SE203	—	7.8	—	外: 27F ⁺ , 赤切痕, 積層痕 内: 27F ⁺	赤	良	浅黄	2.5/7/3	底部 12/12	内面磨耗
34	3-2	陶器 山形碗	2	ナ N15	SE203	15.6	7.1	5.2	外: 27F ⁺ , 赤切痕, 自然釉 内: 27F ⁺ , 自然釉	赤	良	灰黄	2.5/7/2	2/12	内面襷付着
35	5-2	陶器 山形碗	2	ナ N15	SE203	16.8	—	—	外: 27F ⁺ , 赤切痕, 自然釉 内: 27F ⁺ , 自然釉	赤	良	灰黄	2.5/7/2	3/12	
36	4-7	青磁 碗	2	ナ N15	SE203	—	—	—	外: 27F ⁺ , 27F ⁺ 1/3, 施釉 内: 27F ⁺ , 施文, 施釉	赤	良	緑・白 ⁺ 灰 黒地・灰白	10/6/2 10/8/7/2	体部 小片	体部 小片
37	5-9	陶器 山形碗	1	ナ L20	PI11	—	—	—	外: 27F ⁺ 内: 27F ⁺	赤	良	灰白	2.5/8/2	体部 小片	体部 小片
38	5-7	陶器 山形碗	1	ナ L20	PI14	15.0	—	—	外: 27F ⁺ 内: 27F ⁺	赤	良	浅黄	2.5/7/3	1/12	
39	5-6	陶器 山形碗	1	ナ L20	SE217 PI16	—	7.2	—	外: 27F ⁺ , 赤切痕, 積層痕 内: 27F ⁺	赤	良	灰白	2.5/7/1	底部 11/12	
40	5-8	土師器 皿	1	ナ M19	SR217 PI14	10.4	—	2.2	外: 2C ⁺ 黄, 7F ⁺ 内: 7F ⁺ , 33F ⁺	赤	—	灰白	10/8/6/2	2/12	
41	5-5	陶器 山形碗	2	ナ N16	PI11	—	7.8	—	外: 27F ⁺ , 赤切痕, 積層痕 内: 27F ⁺	赤	良	灰白	2.5/8/7/1	3/12	
42	6-2	鉄製品 釘	2	ナ M20	SK206	長 7.2	幅 0.5	厚 0.4	—	—	—	—	—	—	
43	6-3	鉄製品 工具?	1	ナ K20	SE217 PI12	長 7.7	幅 0.6	厚 0.6	先端が屈曲するが、本来は直線の ものと思われる。	—	—	—	—	—	
44	6-1	鉄製品 板状製品	1	ナ L19	PI11	長 2.9	幅 6.7	厚 0.6	2箇所に穿孔があり、内1箇所 には縦め具状の痕しが付く。	—	—	—	—	—	

ある。伊勢地域において中世の掘立柱建物でよくみられる、いわゆる南東隅土坑と呼ばれる遺構と考えられる。こうした構造の建物は、山見遺跡のSB330とSK318でも確認でき、時期は平安時代末期に位置づけられる。これらは、当地域における建物構造の変遷を考える上で、重要な調査成果と言える。

註

- (1) 三重県立津高等学校地歴部『新神馬場遺跡発掘調査報告』1972年、奥 義次「第6節 下出江地区」『勢和村史』資料編二 勢和村 2001年
- (2) 出土遺物の時期は、下記の文献を参考にした。
中世土師器：伊藤裕保「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史』資料編考古2 三重県 2008年
山茶碗：愛知県『愛知県史』別編窯業2 2007年、愛知県『愛知県史』別編窯業3 2012年

Ⅷ 山見遺跡 (第1次)

1 調査の概要

山見遺跡 (第1次) は、平成27年度高度水利機能確保基盤整備事業 (出江地区) に伴って本発掘調査を実施した。調査期間は平成27年9月18日～平成28年1月22日で、調査面積は779.1㎡である。

調査区は5箇所に分かれており、西側の調査区より1～5区とした (第27図)。各調査区の面積は、1区が60.8㎡、2区が64.0㎡、3区が277.7㎡、4区が140.0㎡、5区が236.6㎡である。なお、地区については、1章2節 (1) で記した地区割に基づき設定し、山見遺跡の調査区は大地区エ・オの範囲に含まれる。

2 層位と遺構

(1) 基本層位

当地の基本層位は以下のとおりであり (第28・29図)、1～4区ではⅡ層上面で遺構検出を行った。5区は調査区中央でⅡ層からⅢ層へ遺構の基盤層が変わるため、調査区北側はⅡ層上面、南側はⅢ層上面で遺構検出を行った。

- I : 現代耕土・床土 (第28・29図 : 1・2層)
- II : 中世前期～江戸時代の遺構基盤層 (にぶい黄色極細砂層、第28・29図 : 41・42層)
- III : 中世前期～江戸時代の遺構基盤層 (黒色極細砂層、第29図 : 43層)

(2) 遺構

本発掘調査の遺構は5区を中心として確認された。遺構は掘立柱建物1棟、土坑13基、溝18条があり、時期は中世前期と江戸時代のものである⁽¹⁾。S K318では、土師器、ロクロ土師器、陶器、土製品が多量に出土したことが特筆される。

以下の報文では、遺構種別ごとに記述する。遺構の詳細については、遺構一覧表 (第13表) を参照されたい。

①掘立柱建物

S B330 (第33・34図) 5区エー・S・T・U24～

25で検出した4間×3間以上の縦柱建物で、建物内東側にはS K318が伴う。柱間は1.8～2.4mとばらつきが見られる。遺構の時期は中世1b期である。

②土坑

S K318 (第33～35図) 5区エー・S・T・U25、オー・T・U1で検出した土坑で、S B330の建物内土坑と考えられる。規模は長さ6.96m、幅2.18m以上、深さ0.45mとなり、平面形は隅丸方形か楕円形であり、断面形は南に向けて深くなる。埋土は大きく上層 (第35図 : 1・2層) と下層 (第35図 : 3・4層) からなり、上層からは遺物がまともに出土した。遺構の時期は中世1b期である。

S K321 (第29・32図) 4区エーU16～17で検出した土坑で、規模は長さ2.25m、幅1.35m以上、深さ0.16mである。出土遺物には江戸時代の陶磁器片がある。

S K322 (第32図) 4区エーT16～18で検出した土坑で、規模は長さ6.4m、幅1.15m以上、深さ0.32mである。出土遺物には中世前期の土師器片がある。

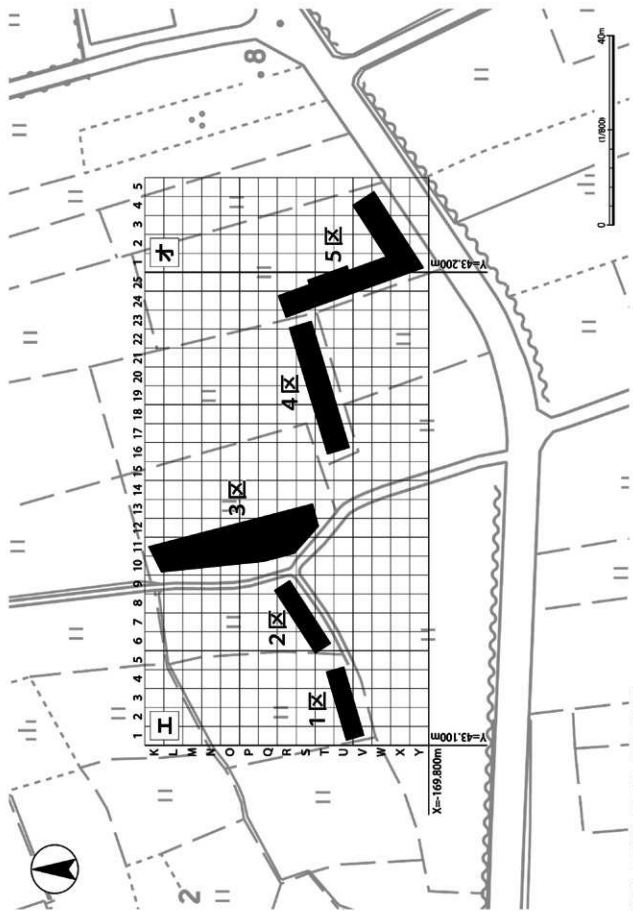
S K325 (第31図) 3区エーM10～11で検出した土坑で、規模は長さ3.25m、幅1.4m、深さ0.38mである。埋土は黒褐色極細砂を主体とした層である。出土遺物は確認できなかった。

S K328 (第28・31図) 3区エーR11で検出した土坑で、規模は長さ2.3m以上、幅0.5m以上、深さ0.33mである。出土遺物には江戸時代の陶磁器片がある。

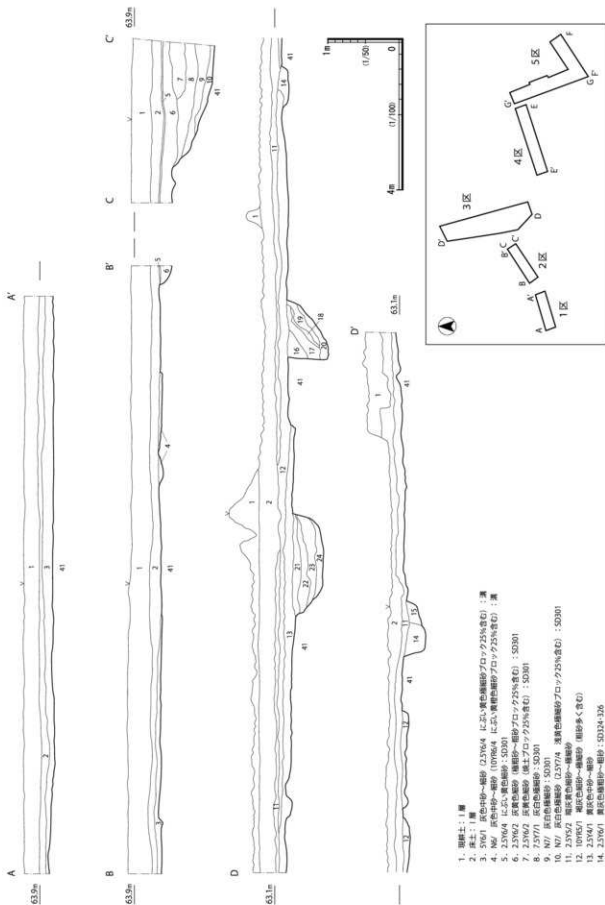
S K329 (第28・31図) 3区エーQ10～11で検出した土坑で、規模は長さ2.35m以上、幅2.1m、深さ0.91mである。埋土は黒褐色極細砂を主体とした層である。出土遺物は確認できなかった。

S K331 (第31図) 3区エーK10～11で検出した土坑で、規模は長さ3.18m、幅1.8m、深さ0.48mである。埋土は黒褐色極細砂を主体とした層である。出土遺物は確認できなかった。

S K332 (第31図) 3区エーP・Q12～13で検出した土坑で、規模は長さ3.75m以上、幅0.9m以上、深さ0.6m以上である。埋土は黒褐色極細砂を主体

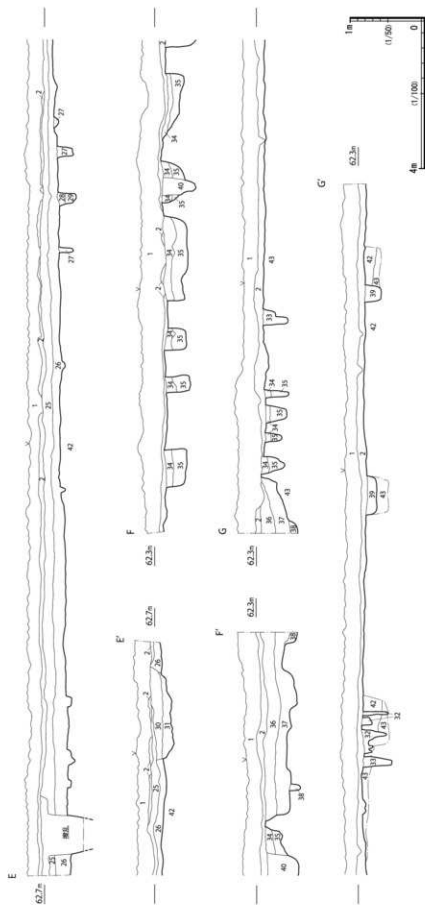


第27図 山見通跡 (第1次) 調査区全体図



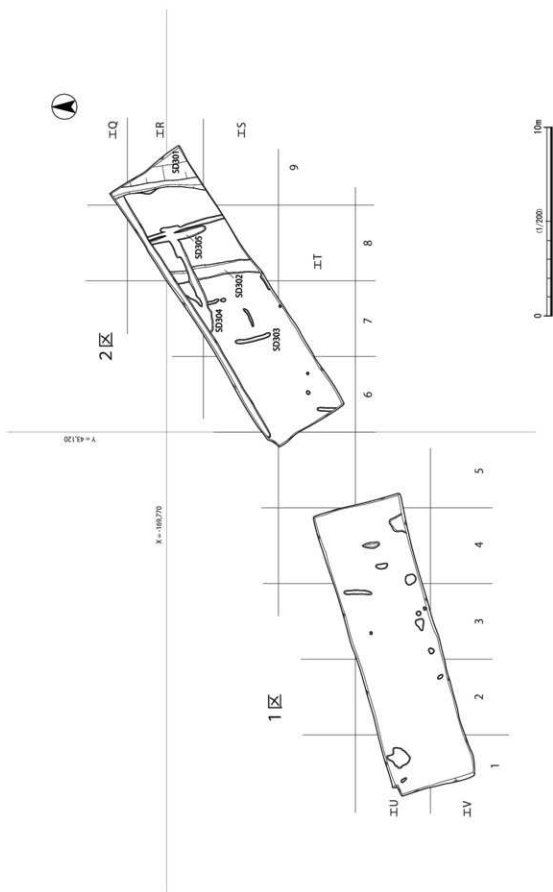
1. 現土上：1層
 2. 床土：1層
 3. 50/1 灰白色中砂～粗砂 (2.576/4 に2に、黄白色粗砂ブロック25%含む)：1層
 4. 100/27 灰白色中砂～粗砂 (2.576/4 に2に、黄白色粗砂ブロック25%含む)：1層
 5. 2.576/4 に2に、黄白色粗砂：SD301
 6. 2.576/2 灰白色粗砂 (粗砂中砂～粗砂ブロック25%含む)：SD301
 7. 2.576/2 灰白色粗砂 (粗砂中砂～粗砂ブロック25%含む)：SD301
 8. 7.577/1 灰白色粗砂：SD301
 9. N/1 灰白色粗砂：SD301
 10. N/2 灰白色粗砂 (2.577/4 に2に、黄白色粗砂ブロック25%含む)：SD301
 11. 100/27 灰白色中砂～粗砂 (粗砂中砂～粗砂)：1層
 12. 100/27 灰白色中砂～粗砂 (粗砂中砂～粗砂)：1層
 13. 2.576/1 黄白色中砂～粗砂 (粗砂多く含む)
 14. 2.576/1 黄白色粗砂～粗砂：SD124-126

第28図 山見遺跡 (第1次) 1～3区壁面土層断面図

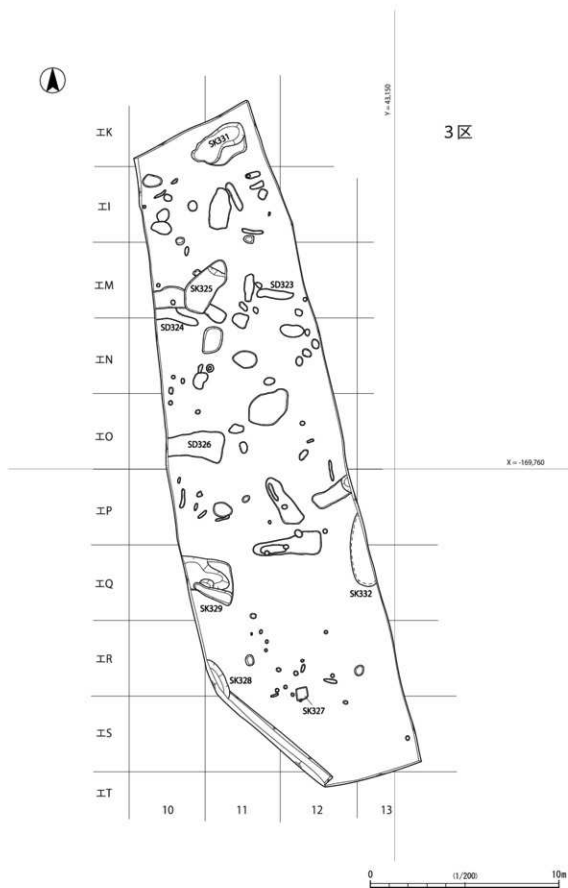


15. 10765/2 灰黄色粘り粉砂
 16. 2576/1 黄灰色粘り粉砂 (10765/3 に近い黄褐色粘り粉砂プロック11%含む) : SK329
 17. 2576/2/1 黄灰色粘り粉砂 (2-50x0x0.5mm) : SK329
 18. 10764/1 黄灰色粘り粉砂 (10766/3 に近い黄褐色粘り粉砂プロック2.25%含む) : SK328
 20. 10766/4 に近い黄褐色粘り粉砂 (10764/7 黄灰色粘り粉砂プロック1%含む) : SK329
 21. 2576/1 黄灰色粘り粉砂 : SK328
 22. 2576/1 黄灰色粘り粉砂 : SK328
 24. 10765/3 に近い黄褐色粘り粉砂 (2.716/1 黄灰色粘り粉砂プロック10%含む) : SK328
 25. 10764/1 黄灰色粘り粉砂 : SK328
 26. 10764/1 黄灰色粘り粉砂 (2.576/3 に近い黄褐色粘り粉砂プロック25%含む)
 27. 10765/1 黄灰色粘り粉砂 (2.576/3 に近い黄褐色粘り粉砂プロック5%含む) : Pt
 28. 10765/1 黄灰色粘り粉砂 : Pt
 29. 10764/1 黄灰色粘り粉砂 (10767/2 に近い黄褐色粘り粉砂プロック5%含む) : Pt
30. 10767/2 に近い黄褐色粘り粉砂 (1mm以下の礫多く含む) : SK321
 31. 10765/3 に近い黄褐色粘り粉砂 (10765/1 黄灰色粘り粉砂プロック5%含む) : SK321
 32. 2576/2 に近い黄褐色粘り粉砂 : Pt
 33. 2576/2 に近い黄褐色粘り粉砂 (2.576/1 黄褐色粘り粉砂プロック5%含む) : Pt
 34. 2576/2 黄褐色粘り粉砂 (2.576/1 黄褐色粘り粉砂プロック31.2-31.5%含む) : Pt
 35. 2576/2 黄褐色粘り粉砂 (2.576/1 黄褐色粘り粉砂プロック10%含む) : SK306-312-315、黄
 36. 2576/2 黄褐色粘り粉砂 (2.576/1 黄褐色粘り粉砂プロック5%含む) : SK311
 37. 2576/2 黄褐色粘り粉砂 (2.576/1 黄褐色粘り粉砂プロック25%含む) : SK311
 38. 2576/2 黄褐色粘り粉砂 : Pt
 39. 2576/4 に近い黄褐色粘り粉砂 (2.576/1 黄褐色粘り粉砂プロック5%含む) : 土坑
 40. 2576/4 に近い黄褐色粘り粉砂 (2.576/1 黄褐色粘り粉砂多く含む) : 土坑
 41. 2576/4 に近い黄褐色粘り粉砂 (2.576/1 黄褐色粘り粉砂多く含む) : 土坑
 42. 2576/4 黄褐色粘り粉砂 (1mm以下の礫多く含む) : 土層
 43. 2576/1 黄褐色粘り粉砂 (1mm以下の礫多く含む) : 土層

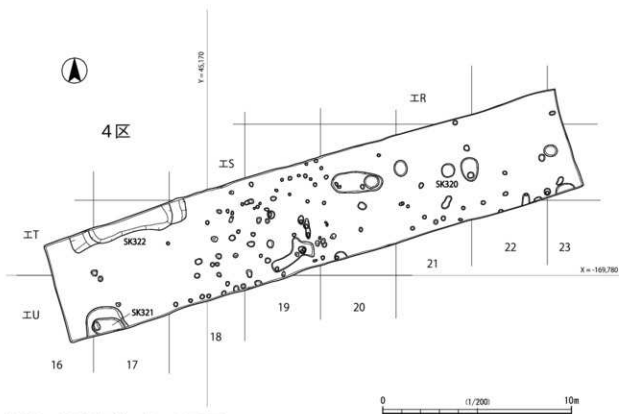
第29図 山泉遺跡 (第1次) 4・5区壁面土層断面図



第30図 山鼻遺跡(第1次)1・2区平面図



第31図 山見遺跡（第1次）3区平面図



第32図 山見遺跡（第1次）4区平面図

とした層である。出土遺物は確認できなかった。

③溝

S D301（第28・30図） 2区エーQ・R9で検出した南北方向に延びる溝である。規模は長さ4.8m以上、幅2.05m以上、深さ0.62mとなる。遺構の時期は中世前期である。

S D306（第29・33図） 5区オーW2～4で検出した東西方向に延びる溝である。規模は長さ3.6m以上、幅0.25m、深さ0.26mとなる。出土遺物はないが、S D314との位置関係から江戸時代の遺構と考えられる。

S D309（第29・33図） 5区エーX25、オーX1で検出した東西方向に延びる溝である。規模は長さ1.2m以上、幅0.35m、深さ0.17mとなる。出土遺物はないが、S D314との位置関係から江戸時代の遺構と考えられる。

S D310（第33図） 5区オーX2で検出した東西方向に延びる溝である。規模は長さ1.45m、幅0.2m、深さ0.11mとなる。出土遺物はないが、S D314との位置関係から江戸時代の遺構と考えられる。

S D311（第29・33図） 5区オーY1～2で検出

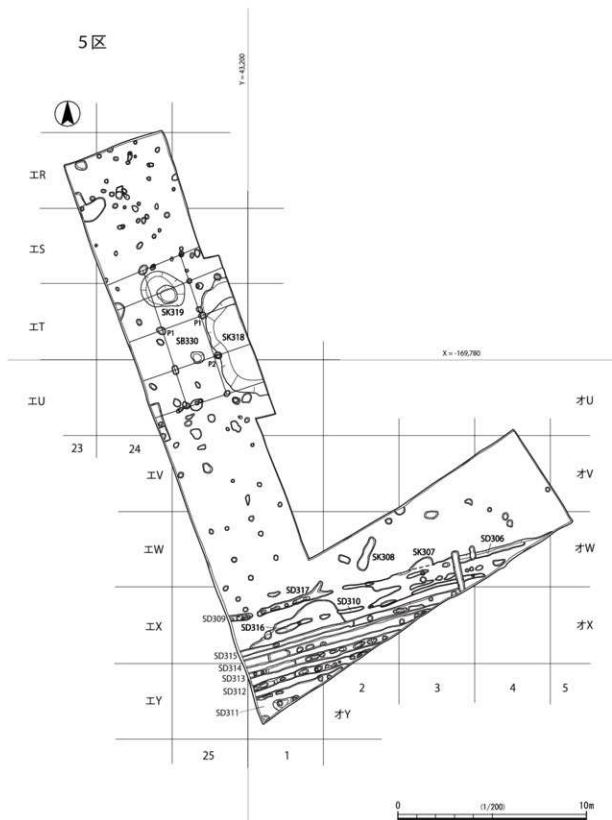
した東西方向に延びる溝である。規模は長さ4.8m以上、幅1.4m以上、深さ0.21mとなる。出土遺物はないが、S D314との位置関係から江戸時代の遺構と考えられる。

S D312（第29・33図） 5区オーX2・Y1～2で検出した東西方向に延びる溝である。規模は長さ6.6m以上、幅0.4m、深さ0.13mとなる。出土遺物はないが、S D314との位置関係から江戸時代の遺構と考えられる。

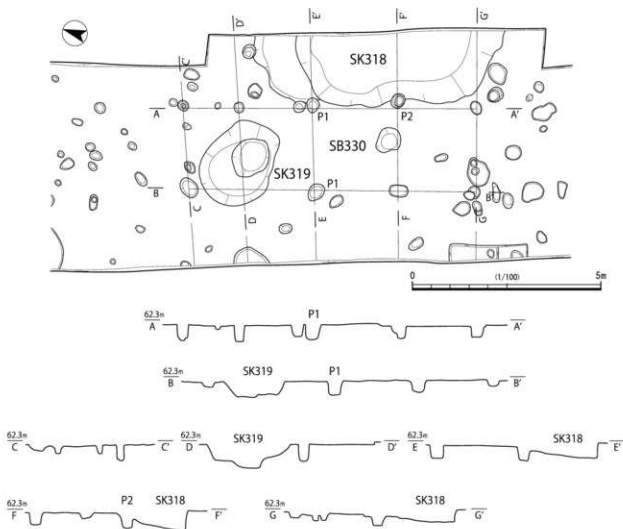
S D313（第29・33図） 5区オーX1～3・Y1で検出した東西方向に延びる溝である。規模は長さ4.8m以上、幅0.45m、深さ0.17mとなる。出土遺物はないが、S D314との位置関係から江戸時代の遺構と考えられる。

S D314（第29・33図） 5区オーX1～3・Y1で検出した東西方向に延びる溝である。規模は長さ10.2m以上、幅0.45m、深さ0.25mとなる。周囲には同規模の東西方向に延びる溝（S D309～313・315～317）があり、これらは耕作溝と考えられる。出土遺物には江戸時代の陶磁器片がある。

S D315（第29・33図） 5区エーX25、オーX1



第33図 山見遺跡（第1次）5区平面図



第34図 SB330平面図・掘形断面図およびSK318・319平面図

～3で検出した東西方向に延びる溝である。規模は長さ11.9m以上、幅0.45m、深さ0.26mとなる。出土遺物はないが、SD314との位置関係から江戸時代の遺構と考えられる。

SD316 (第33図) 5区オーX1で検出した東西方向に延びる溝である。規模は長さ2.05m、幅0.33m、深さ0.26mとなる。出土遺物はないが、SD314との位置関係から江戸時代の遺構と考えられる。

SD317 (第33図) 5区オーW1・X1～2で検出した東西方向に延びる溝である。規模は長さ4.2m以上、幅0.3m、深さ0.15mとなる。出土遺物はないが、SD314との位置関係から江戸時代の遺構と考えられる。

3 出土遺物

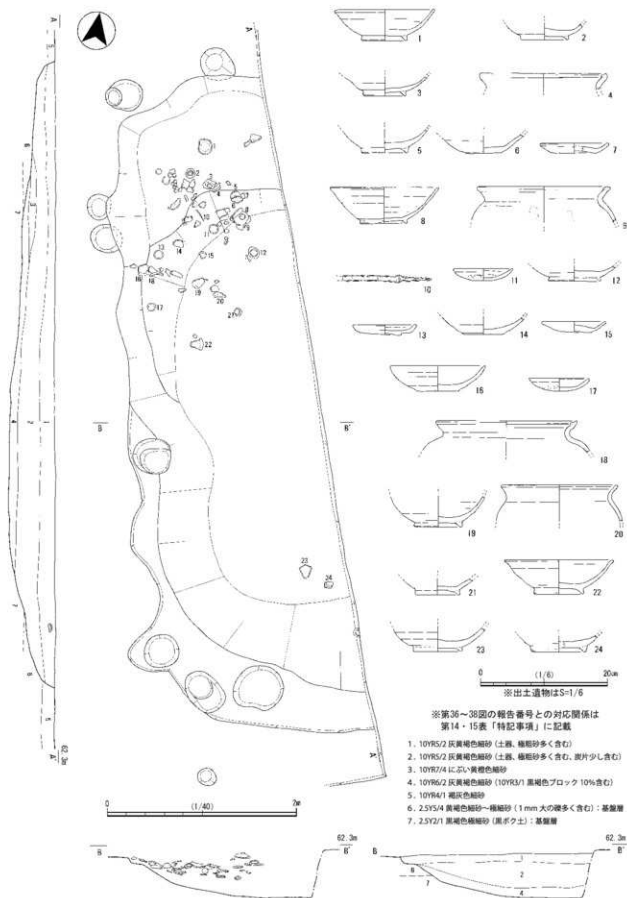
(1) 概要

調査区全体での出土遺物¹⁾は、土器・陶器・土製品・石製品・鉄製品・鉄滓である。総量はコンテナ換算で21箱分、重量が47.4kg（整理前）である。

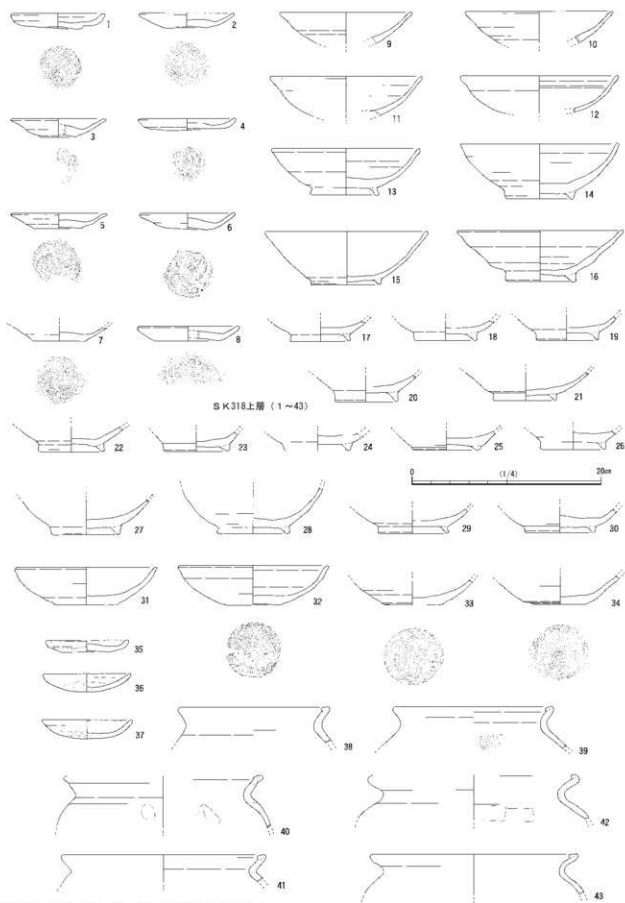
出土遺物の時期は、平安時代末期のものが中心で、縄文時代と江戸時代のものが一部含まれる。縄文土器は図化できなかった小片が20点程ある。各遺物の詳細については、出土遺物観察表（第14・15表）を参照されたい。以下の本文では、遺構種別ごとに分けて記述する（第36～38図）。

(2) 掘立柱建物

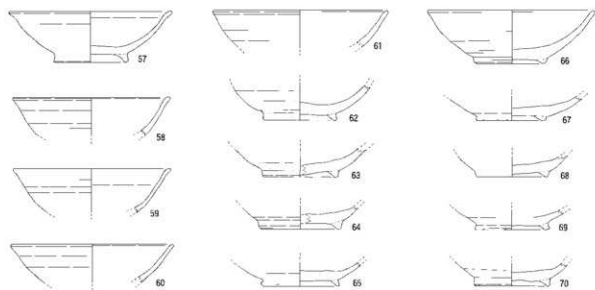
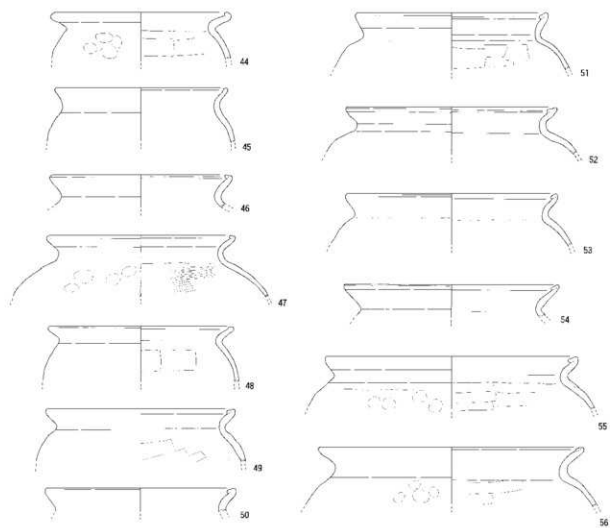
SB330 (第38図) エーT24 Pit1出土のロクロ土師器碗(95)は口縁部片である。エーT25 Pit1



第35図 S K318遺物出土状況図・土層断面図・エレベーション図



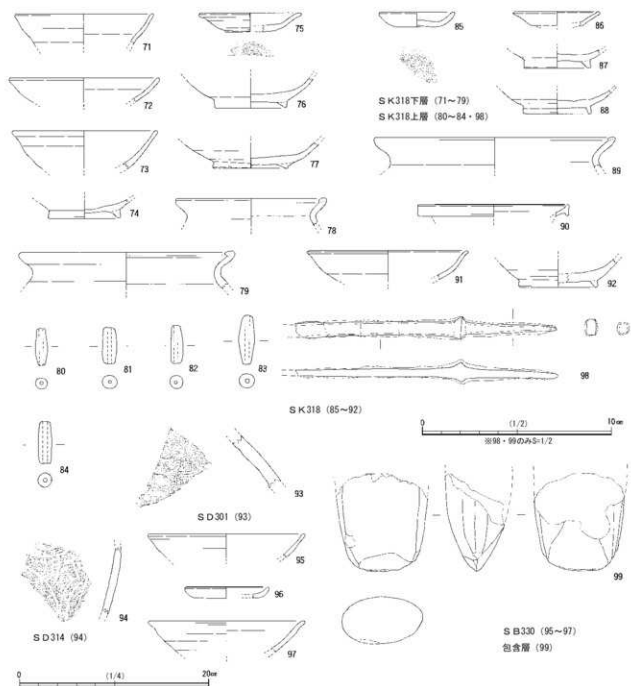
第36圖 山見遺跡(第1次)出土遺物実測圖(1)



S K318上層 (44~70)

0 (1/4) 20cm

第37圖 山見遺跡 (第1次) 出土遺物実測図 (2)



第38図 山見遺跡（第1次）出土遺物実測図（3）

出土の南伊勢系土師器皿（96）は中世1b期～IIa期のもの。エーT25 Pit2出土の山茶碗（97）は靱美型4～5型式のもの。

（3）土坑

S K 318（第36～38図） 出土遺物はロクロ土師器と南伊勢系土師器が多くを占めており、他に山茶碗、土鍾、鉄製品、鉄滓がある。出土遺物は大きく上層、下層に分けて取り上げたが、明確な時期差はみられ

なかった。

上層資料（第36図：1～43、第37図：44～70、第38図：80～84・98）には、ロクロ土師器皿・碗、南伊勢系土師器皿・甕、山茶碗、土鍾、鉄製品がある。ロクロ土師器皿（1～8）は口径9.8～10cmと同規格のもので、底部には回転系切痕が見られる。ロクロ土師器碗は高台が伴う形態（13～30）と無高台の形態（31～34）があるが、共に底部には回転系切痕

第13表 山見遺跡（第1次）遺構一覧表

遺構名	性格	時期	調査区	地区	長さ・ 長軸(m)	幅・ 短軸(m)	深さ(m)	備考
SD 301	溝	平安末 ～鎌倉	2区	エ-Q・R9	4.8 以上	2.05 以上	0.62	
SD 302	溝	江戸	2区	エ-R7～8・S8	4.3 以上	0.7	0.03	
SD 303	溝	江戸	2区	エ-S7	1.95	0.2	0.04	
SD 304	溝	江戸	2区	エ-R・S7～8	5.2 以上	0.45	0.06	
SD 305	溝	江戸	2区	エ-R・S8	2.98 以上	0.42	0.07	
SD 306	溝	江戸	5区	オ-W2～4	3.6 以上	0.25	0.26	
SK 307	土坑	平安末 ～鎌倉	5区	オ-W3	1.35 以上	0.5 以上	0.12	
SK 308	土坑	平安末 ～鎌倉	5区	オ-W2	1.85	0.58	0.19	
SD 309	溝	江戸	5区	エ-X25, オ-X1	1.2 以上	0.35	0.17	SD317と同一遺構
SD 310	溝	江戸	5区	オ-X2	1.45	0.2	0.11	SD316と同一遺構
SD 311	溝	江戸	5区	オ-Y1～2	4.8 以上	1.4 以上	0.21	
SD 312	溝	江戸	5区	オ-X2・Y1～2	6.6 以上	0.4	0.13	
SD 313	溝	江戸	5区	オ-X1～3・Y1	4.8 以上	0.45	0.17	
SD 314	溝	江戸	5区	オ-X1～3・Y1	10.2 以上	0.45	0.25	
SD 315	溝	江戸	5区	エ-X25 オ-X1～3	11.9 以上	0.45	0.26	
SD 316	溝	江戸	5区	オ-X1	2.05	0.33	0.26	SD310と同一遺構
SD 317	溝	江戸	5区	オ-W1・X1～2	4.2	0.3	0.15	SD309と同一遺構
SK 318	土坑	平安末	5区	エ-S・T・U25 オ-T・U1	6.96	2.18 以上	0.45	SB330に伴う
SK 319	土坑	不明	5区	エ-S・T24～25	2.38	1.38	0.71	
SK 320	土坑	平安末 ～鎌倉	4区	エ-S21	0.7	0.7	0.13	
SK 321	土坑	江戸	4区	エ-U16～17	2.25	1.35 以上	0.16	
SK 322	土坑	平安末 ～鎌倉	4区	エ-T16～18	6.4	1.15 以上	0.32	
SD 323	溝	不明	3区	エ-M11～12	1.95	0.45	0.04	
SD 324	溝	不明	3区	エ-M・N10	2.4 以上	0.64 以上	0.08	
SK 325	土坑	不明	3区	エ-M10～11	3.25	1.4	0.38	落とし穴か
SD 326	溝	不明	3区	エ-O10～11	2.95 以上	1.5	0.05	
SK 327	土坑	不明	3区	エ-R12	0.6	0.6	0.18	
SK 328	土坑	江戸	3区	エ-R11	2.3 以上	0.5 以上	0.33	
SK 329	土坑	不明	3区	エ-Q10～11	2.35 以上	2.1	0.91	落とし穴か
SB 330	掘立柱建物	平安末	5区	エ-S・T・U24～25	柱間1.8～2.4m			SK318に伴う
SK 331	土坑	不明	3区	エ-K10～11	3.18	1.8	0.48	落とし穴か
SK 332	土坑	不明	3区	エ-P・Q12～13	3.75 以上	0.9 以上	0.6 以上	落とし穴か

第14表 山見遺跡(第1次)出土遺物観察表(1)

番号	発掘番号	種類(産地・器種等)	調査地区	通称	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	図説・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存数	特記事項	
1	5-2	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	9.8	—	1.7	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	浅黄緑	10188/3	12/12	第358出土L3 1mm大の砂少量含む
2	4-4	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	9.8	4.8	1.5	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	浅黄緑	10188/3	12/12	1mm大の砂少量含む
3	13-6	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	9.8	3.8	1.9	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	緑	5187/6	6/12	底面 1mm大の砂少量含む
4	13-7	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	10.0	—	1.2	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	浅黄緑	10188/3	2/12	1mm大の砂少量含む
5	13-3	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	10.0	3.0	1.6	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	浅黄緑	10188/3	6/12	2mm大の砂少量含む
6	5-4	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	10.0	—	1.8	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	浅黄緑	5188/4	11/12	第358出土L3,15 1mm大の砂少量含む
7	4-5	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	—	3.6	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	灰白	10188/2	6/12	1mm大の砂少量含む
8	13-5	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	10.4	6.9	1.5	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	緑	5187/6	6/12	第358出土L3,7 1mm大の砂少量含む
9	11-6	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	11	—	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	浅黄緑	5188/4	11/12	1mm大の砂少量含む
10	11-6	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	15.6	—	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	緑	5187/6	2/12	1mm大の砂少量含む
11	6-5	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	16	—	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	浅黄緑	10188/4	2/12	1mm大の砂少量含む
12	11-1	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	16.6	—	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	浅黄緑	10188/3	2/12	1mm大の砂少量含む
13	1-4	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	16.6	2.0	3.0	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	浅黄緑	10188/4	9/12	第358出土L3,6, 貼り付け高台 1mm大の砂少量含む
14	6-3	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	16.6	6.8	5.7	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	灰白	10188/2	6/12	貼り付け高台
15	3-4	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	17	6.8	5.7	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	緑	5187/6	6/12	第358出土L3,6, 貼り付け高台 1mm大の砂少量含む
16	3-6	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	17.3	6.9	5.5	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	浅黄緑	10188/4	5/12	貼り付け高台 1mm大の砂少量含む
17	7-4	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	—	6.2	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	浅黄緑	5188/4	6/12	底面 1mm大の砂少量含む
18	8-3	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	—	6.4	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	浅黄緑	10188/4	5/12	1mm大の砂少量含む 貼り付け高台
19	12-6	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	—	6.4	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	浅黄緑	10188/3	4/12	1mm大の砂少量含む 貼り付け高台
20	12-2	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	—	6.4	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	浅黄緑	5188/4	6/12	2mm大の砂少量含む 貼り付け高台
21	1-2	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	—	6.5	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	浅黄緑	5188/4	12/12	第358出土L3,3 貼り付け高台
22	4-8	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	—	6.6	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	黄緑	10188/6	6/12	底面 1mm大の砂少量含む
23	12-8	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	—	6.7	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	灰白	10188/2	3/12	2mm大の砂少量含む 貼り付け高台
24	6-4	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	—	6.8	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	浅黄緑	10188/3	6/12	底面 1mm大の砂少量含む
25	12-7	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	—	6.8	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	灰白	10188/2	1/12	2mm大の砂少量含む 貼り付け高台
26	12-4	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	—	6.8	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	灰白	10188/2	5/12	2mm大の砂少量含む 貼り付け高台
27	3-3	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	—	6.9	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	浅黄緑	5188/4	6/12	第358出土L3,6, 貼り付け高台 1mm大の砂少量含む
28	7-6	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	—	6.9	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	浅黄緑	10188/4	12/12	第358出土L3,9, 貼り付け高台 1mm大の砂少量含む
29	4-1	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	—	7.0	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	灰白	10188/2	2/12	底面 2mm大の砂少量含む
30	1-3	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	—	7.2	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	浅黄緑	10188/4	8/12	2mm大の砂少量含む 貼り付け高台
31	8-2	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	14.8	6.4	4.0	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	浅黄緑	10188/4	2/12	第358出土L3,16 1mm大の砂少量含む
32	5-1	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	15.8	6.0	4.2	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	にぶい黄緑	10187/4	3/12	2mm大の砂少量含む
33	5-3	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	—	6.0	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	緑	5187/6	6/12	第358出土L3,14
34	4-2	ワコロ土師器	5	T25	SK18 上層	—	6.8	—	外: 0777 ⁺ , 糸切痕 内: 0777 ⁺	密	緑	5187/6	6/12	第358出土L3,6 1mm大の砂少量含む
35	13-1	土師器	5	T25	SK18 上層	8.7	—	1.2	外: 21 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺ 内: 114, 114 ⁺	密	にぶい黄緑	10187/3	2/12	2mm大の砂少量含む
36	2-2	土師器	5	T25	SK18 上層	9.4	—	1.9	外: 21 114, 114 ⁺ 内: 114, 114 ⁺	密	浅黄緑	10188/2	12/12	第358出土L3,11 1mm大の砂少量含む
37	7-5	土師器	5	T25	SK18 上層	9.4	—	2.0	外: 21 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺ 内: 114, 114 ⁺	密	にぶい黄緑	10187/3	12/12	第358出土L3,17 1mm大の砂少量含む
38	14-2	土師器	5	T25	SK18 上層	15.6	—	—	外: 11, 2177 ⁺	密	浅黄緑	5188/4	2/12	2mm大の砂少量含む
39	14-4	土師器	5	T25	SK18 上層	16.6	—	—	外: 21 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺ 内: 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺	密	浅黄緑	10188/4	2/12	2mm大の砂少量含む
40	3-1	土師器	5	T25	SK18 上層	20.4	—	—	外: 21 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺ 内: 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺	密	浅黄緑	10188/3	1/12	2mm大の砂少量含む
41	15-3	土師器	5	T25	SK18 上層	21.3	—	—	外: 21 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺ 内: 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺	密	灰白	5188/2	1/12	1mm大の砂少量含む
42	17-2	土師器	5	T25	SK18 上層	21.4	—	—	外: 21 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺ 内: 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺	密	にぶい黄緑	10187/4	1/12	2mm大の砂少量含む
43	17-3	土師器	5	T25	SK18 上層	21.5	—	—	外: 21 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺ 内: 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺	密	浅黄緑	10188/4	1/12	1mm大の砂少量含む
44	14-6	土師器	5	T25	SK18 上層	18.0	—	—	外: 21 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺ 内: 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺	密	浅黄緑	10188/4	2/12	2mm大の砂少量含む
45	8-1	土師器	5	T25	SK18 上層	18.0	—	—	外: 21 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺ 内: 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺	密	浅黄緑	10188/4	2/12	第358出土L3,20 1mm大の砂少量含む
46	6-2	土師器	5	T25	SK18 上層	18.8	—	—	外: 11, 2177 ⁺	密	にぶい黄緑	5188/6	2/12	2mm大の砂少量含む
47	19-1	土師器	5	T25	SK18 上層	18.8	—	—	外: 21 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺ 内: 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺	密	緑	5186/6	2/12	2mm大の砂少量含む
48	16-3	土師器	5	T25	SK18 上層	18.0	—	—	外: 21 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺ 内: 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺	密	浅黄緑	10188/3	1/12	1mm大の砂少量含む
49	14-6	土師器	5	T25	SK18 上層	19.6	—	—	外: 21 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺ 内: 114, 114 ⁺ , 2177 ⁺	密	にぶい黄緑	10186/3	1/12	2mm大の砂少量含む
50	1-1	土師器	5	T25	SK18 上層	18.8	—	—	外: 11, 2177 ⁺ 内: 11, 2177 ⁺	密	緑	5186/4	2/12	第358出土L3,4 1mm大の砂少量含む

第15表 山見遺跡(第1次)出土遺物観察表(2)

番号	発掘 番号	種類(産地) 器種等	調査 区	地区	遺構 層	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調整・技法の特徴	粘土	焼成	色調	検出 層	特記事項	
51	15-1	土師器 土師	5	T25	SK19 上層	19.8	—	—	外:2C'F2a, F1, F2F2' 内:F2, F2F2'	赤	—	淡黄	2.518/3	2/12	3m大の砂少量含む 外面磨付否
52	6-1	土師器 土師	5	T25	SK19 上層	22.0	—	—	外:F2', F2F2' 内:F2, F2F2'	赤	—	淡黄	10187/3	3/12	第35岡田LNo18 3m大の砂少量含む
53	15-2	土師器 土師	5	T25	SK19 上層	22.0	—	—	外:2C'F2a, F1, F2F2' 内:F2, F2F2'	赤	—	淡黄	7.5188/3	1/12	3m大の砂少量含む
54	15-4	土師器 土師	5	T25	SK19 上層	22.6	—	—	外:F2', F2F2' 内:F2, F2F2'	赤	—	淡黄	10188/4	1/12	2m大の砂少量含む
55	15-1	土師器 土師	5	T25	SK19 上層	26.2	—	—	外:2C'F2a, F1, F2F2' 内:F2, F2F2'	赤	—	淡黄	2.518/4	2/12	1m大の砂少量含む
56	15-2	土師器 土師	5	T25	SK19 上層	27.6	—	—	外:2C'F2a, F1, F2F2' 内:F2, F2F2'	赤	—	淡黄	7.5188/3	2/12	2m大の砂少量含む 外面磨付否
57	7-1	陶器 山土器	5	T25	SK19 上層	16.8	7.2	5.4	外:F2F2', 糸切縁 内:F2F2', 自然輪	赤良	良	灰白	2.517/1	2/12	第35岡田LNo22, 貼り付け高台 内面磨削
58	9-6	陶器 山土器	5	T25	SK19 上層	16.4	—	—	外:F2F2', 自然輪 内:F2F2', 自然輪	赤良	良	灰白	2.517/1	2/12	
59	9-2	陶器 山土器	5	T25	SK19 上層	16.5	—	—	外:F2F2' 内:F2F2'	赤良	良	灰白	517/1	2/12	
60	10-2	陶器 山土器	5	T25	SK19 上層	17.0	—	—	外:F2F2' 内:F2F2'	赤良	良	灰白	2.517/1	2/12	
61	10-1	陶器 山土器	5	T25	SK19 上層	18.2	—	—	外:F2F2' 内:F2F2', 自然輪	赤良	良	灰白	10187/1	2/12	
62	7-2	陶器 山土器	5	T25	SK19 上層	16.4	—	7.4	外:F2F2', 糸切縁 内:F2F2', 自然輪	赤良	良	灰白	10187/1	底部 12/12	第35岡田LNo23 貼り付け高台
63	10-5	陶器 山土器	5	T25	SK19 上層	—	7.8	—	外:F2F2', 糸切縁 内:F2F2'	赤良	良	灰白	2.517/1	4/12	貼り付け高台 内面磨削
64	7-3	陶器 山土器	5	T25	SK19 上層	—	8.0	—	外:F2F2', 糸切縁 内:F2F2', 自然輪	赤良	良	灰白	2.517/1	4/12	第35岡田LNo24 貼り付け高台
65	9-1	陶器 山土器	5	T25	SK19 上層	—	8.0	—	外:F2F2', 糸切縁 内:F2F2', 自然輪	赤良	良	灰白	2.517/1	底部 12/12	第35岡田LNo12 貼り付け高台
66	10-3	陶器 山土器	5	T25	SK19 上層	17.5	6.8	5.6	外:F2F2', 糸切縁 内:F2F2'	赤良	良	灰黄	10186/2	1/12	貼り付け高台 内面磨削
67	10-7	陶器 山土器	5	T25	SK19 上層	—	7.2	—	外:F2F2', 糸切縁 内:F2F2'	赤良	良	灰白	2.517/1	6/12	貼り付け高台 内面磨削
68	10-4	陶器 山土器	5	T25	SK19 上層	—	7.4	—	外:F2F2', 糸切縁 内:F2F2'	赤良	良	灰黄	2.517/2	3/12	貼り付け高台
69	9-3	陶器 山土器	5	T25	SK19 上層	—	7.7	—	外:F2F2', 糸切縁 内:F2F2'	赤良	良	灰白	2.517/1	6/12	貼り付け高台
70	10-6	陶器 山土器	5	T25	SK19 上層	—	7.8	—	外:F2F2', 糸切縁 内:F2F2'	赤良	良	灰白	2.517/2	底部 10/12	貼り付け高台
71	11-4	クワロ土師器 土師	5	T25	SK19 下層	14.6	—	—	外:F2F2' 内:F2F2'	赤	—	淡黄	7.5187/4	1/12	1m大の砂少量含む
72	11-2	クワロ土師器 土師	5	T25	SK19 下層	15.9	—	—	外:F2F2' 内:F2F2'	赤	—	橙	10187/6	2/12	1m大の砂少量含む
73	11-3	クワロ土師器 土師	5	T25	SK19 下層	15.2	—	—	外:F2F2' 内:F2F2'	赤	—	淡黄	10188/3	2/12	1m大の砂少量含む
74	12-3	クワロ土師器 土師	5	T25	SK19 下層	—	7.4	—	外:F2F2', 糸切縁 内:F2F2'	赤	—	淡黄	10188/3	2/12	2m大の砂少量含む
75	13-2	クワロ土師器 土師	5	T25	SK19 下層	10.4	4.0	2.0	外:F2F2', 糸切縁 内:F2F2'	赤	—	淡黄	10187/2	2/12	1m大の砂少量含む
76	9-7	陶器 山土器	5	T25	SK19 下層	—	7.5	—	外:F2F2', 糸切縁 内:F2F2'	赤	—	灰白	2.517/1	底部 11/12	貼り付け高台
77	9-8	陶器 山土器	5	T25	SK19 下層	—	7.9	—	外:F2F2', 糸切縁 内:F2F2', 自然輪	赤	—	灰白	10187/1	底部 12/12	貼り付け高台
78	14-3	土師器 土師	5	T25	SK19 下層	13.6	—	—	外:F2', F2F2' 内:F2', F2F2'	赤	—	橙	2.517/6	2/12	2m大の砂少量含む
79	17-1	土師器 土師	5	T25	SK19 下層	22.2	—	—	外:2C'F2a, F1, F2F2' 内:F2, F2F2'	赤	—	淡黄	2.518/3	1/12	
80	1-8	土師器 土師	5	T25	SK19 上層	長 3.9	幅 1.3	厚 1.3	2C'F2a, F1'	赤	—	灰黄	10186/2	—	口径:0.5cm 重量:4.77g
81	1-7	土師器 土師	5	T25	SK19 上層	長 3.9	幅 1.5	厚 1.5	2C'F2a, F1'	赤	—	淡黄	10187/4	—	口径:0.3cm 重量:7.90g
82	1-5	土師器 土師	5	T25	SK19 上層	長 4.1	幅 1.4	厚 1.4	2C'F2a, F1'	赤	—	淡黄	10187/4	—	口径:0.3cm 重量:6.52g
83	1-9	土師器 土師	5	T25	SK19 上層	長 5.2	幅 1.6	厚 1.6	2C'F2a, F1'	赤	—	淡黄	10186/3	—	口径:0.5cm 重量:8.24g
84	1-6	土師器 土師	5	T25	SK19 上層	長 4.4	幅 1.5	厚 1.5	2C'F2a, F1'	赤	—	暗灰	7.5185/1	—	口径:0.6cm 重量:9.30g
85	13-1	クワロ土師器 土師	5	T25	SK19 埋上-1層	7.8	—	1.6	外:F2F2', 糸切縁 内:F2F2'	赤	—	淡黄	7.5188/4	2/12	
86	11-7	クワロ土師器 土師	5	T25	SK19 埋上-1層	8.6	—	1.5	外:F2F2' 内:F2F2'	赤	—	淡黄	10188/4	5/12	
87	12-5	クワロ土師器 土師	5	T25	SK19 埋上-1層	—	6.7	—	外:F2F2', 糸切縁 内:F2F2'	赤	—	淡黄	10188/3	1/12	3m大の砂少量含む 貼り付け高台
88	12-1	クワロ土師器 土師	5	T25	SK19 埋上-1層	—	7.0	—	外:F2F2', 糸切縁 内:F2F2'	赤	—	淡黄	10188/2	底部 12/12	2m大の砂少量含む 貼り付け高台
89	15-5	土師器 土師	5	T25	SK19 埋上-1層	25.2	—	—	外:F2F2' 内:F2F2'	赤	—	灰白	10188/2	1/12	
90	14-1	灰白陶器 土師	5	T25	SK19 埋上-1層	15.8	—	—	外:F2F2' 内:F2F2', 輪縁	赤良	良	暗灰	2.515/2	2/12	
91	9-5	陶器 山土器	5	T25	SK19 埋上-1層	16.8	—	—	外:F2F2' 内:F2F2'	赤良	良	灰白	2.517/1	2/12	
92	9-4	陶器 山土器	5	T25	SK19 埋上-1層	—	8.0	—	外:F2F2', 糸切縁 内:F2F2'	赤良	良	灰白	2.517/1	4/12	貼り付け高台
93	2-5	陶器(美土) 土師	2	89	S101	—	—	—	外:F1', 押印文 内:2C'F2a, F1, F2'	赤良	良	灰	516/1	1/12	体部 小
94	2-4	縄文土器 土師	5	82	S104	—	—	—	外:縄文5式F1', 花縄文 内:F1', F2'	赤	—	淡黄	10187/3	1/12	体部 小
95	2-1	クワロ土師器 土師	5	T24	S103 P11	16.4	—	—	外:F2F2' 内:F2F2'	赤	—	淡黄	7.5186/3	3/12	
96	2-2	土師器 土師	5	T25	S103 P11	8.8	—	1.1	外:2C'F2a, F1' 内:F2'	赤	—	淡黄	7.5188/4	2/12	
97	2-3	陶器 山土器	5	T25	S103 P12	16.2	—	—	外:F2F2' 内:F2F2'	赤良	良	灰白	10187/1	2/12	
98	19-1	鉄製品 鋳	5	T25	SK19 上層	長 13.8	幅 1.3	厚 1.0	刃部先端欠	—	—	—	—	—	第35岡田LNo10
99	2-6	磨製石器 丸石	5	83	白倉	長 5.2	幅 4.9	厚 3.1	加工時の研削痕裏面 に細かな凹凸(凹部)	—	—	—	—	—	重量:91.4g 縦径:5.5(変異性)

が見られる。南伊勢系土師器皿(35~37)、甕(38~56)は中世1b期のもの。山茶碗(57~70)は渥美型4型式(57~65)と尾張型4型式(66~70)がある。土鉢(80~84)は土師質である。鉄製品(98)は、鑿と考えられる¹²⁾。刃部が一部欠損し、身および茎とみられる部分が確認できる。身の断面形状はほぼ方形で、刃部の形状は長方形を呈する。この他に鉄滓が4点出土しており、IX章で述べる鉄成分分析を行った。

下層資料(第38図:71~79)は、ロクロ土師器皿・碗、南伊勢系土師器甕、山茶碗がある。ロクロ土師器皿(75)・碗(71~74)は、底部に回転糸切痕が見られる。南伊勢系土師器甕(78・79)は中世1b期のもの。山茶碗は渥美型4型式(76)と尾張型4型式(77)がある。

層別に区分できない資料(第38図:85~92)は、次のものがある。ロクロ土師器皿(85・86)・碗(87・88)は底部に回転糸切痕が見られる。南伊勢系土師器甕(89)は、中世1b期のもの。灰釉陶器壺(90)は口縁部のみ残存する。山茶碗(91・92)は渥美型4型式である。

(4) 溝

S D301 (第38図) 渥美産の陶器甕(93)は体部に押印文が見られる。

S D314 (第38図) 縄文土器(94)は深鉢の体部片である。外面には、2条ないし3条を単位とする沈線で文様が施される。沈線で表現される文様は、弧状ないし円弧状のモチーフになるものと考えられるが、明確でない。素地には縄文が残るが、一部に磨り消されたとみられる部分がある。内面は、横方向に砂粒の動きが確認できるため、ケズリ調整されている可能性がある。外面文様の特徴から、縄文時代後期で捉えられるものと考えられる¹³⁾。

(5) その他

包含層 (第38図) 磨製の両刃石斧(99)は、刃部の破片であり、基端は失われている。長さ5.2cm、幅4.9cmで、横断面の形状は楕円形である。主面および側面には、一部欠損が認められる。刃縁には、細かな刃こぼれが確認でき、全体には加工時の研磨痕が良く残る。石材は緑色岩である。

4 小結

本発掘調査では、平安時代末期~鎌倉時代の集落跡と江戸時代の耕作地の様相が明らかとなった。5区では、平安時代末期のS B330とこれに伴うS K318が確認され、当該期の建物構造を検討できる資料を得られた。調査状況から、集落は5区よりも東側へ展開することが想定される。

また、S K318からはロクロ土師器が南伊勢系土師器、山茶碗と一括で出土しており、当地域におけるロクロ土師器の生産や編年研究の基準資料と成り得るであろう。さらに、土坑内からは鉄製の鑿と考えられる工具と鉄滓が出土しており、本集落における鍛造鉄製品の生産が推定されたことも、当該期の集落像を考える上で大変有意義な成果と言える。

この他に、縄文時代後期の縄文土器深鉢などの小片や磨製の両刃石斧が出土しており、周辺には縄文時代の遺構の存在が推測される。本発掘調査では縄文時代の遺構は確認できなかったが、3区の北側から中央にかけて大型土坑であるS K325・329・331・332があり、縄文時代の落し穴の可能性も考えられる。

註

- (1) 出土遺物の時期は、下記の文献を参考にした。
中世土師器：伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史』資料編考古2 三重県 2008年
山茶碗：愛知県『愛知県史』別編第2 2007年、愛知県『愛知県史』別編第3 2012年
渥美産陶器：愛知県『愛知県史』別編第3 2012年
- (2) 国立歴史民俗博物館『時代を作った技—中世の産業革命—』2013年、渡邊 晶『日本建築技術史の研究—大工道具の発達史—』中央論美術出版 2004年
- (3) 石田由紀子「中津式・福田KⅡ式土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション 2008年、竹内英昭「松阪市伊勢寺遺跡出土の縄文土器」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994年、千葉 豊「緑帯土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション 2008年、三重県埋蔵文化財センター『新徳寺遺跡』1997年

IX 山見遺跡（第1次）出土鉄滓の分析調査

1 鉄滓分析の目的と試料

(1) 目的

山見遺跡（第1次）では、平安時代末期の土器類と共に鉄滓4点が出土した。また、下田遺跡（第1次）では、江戸時代（18世紀中頃～後半）の陶磁器と共に鉄滓1点が出土した。周辺の遺跡を含めて、鉄滓の出土が明確に確認されたのは、これらが初めてである。しかし、当事業に伴って行われた一連の発掘調査では、鍛冶に関連する遺構、あるいはその可能性が高い遺構は確認されなかったことから、当地域における鉄製品加工の実態は不明であると一言ざるを得ない。

山見遺跡（第1次）から出土した鉄滓は、出土状況や共存する他の遺物から、廃棄された時期が明確であることから、鉄滓に含まれる鉄成分の分析を行うことにより、当地域における鉄製品の生産活動について、その一端を明らかにする手がかりを得ることができると考える。

(2) 分析試料について

分析試料となる鉄滓4点は、山見遺跡（第1次）で検出されたS B330内にあるS K318の埋土から出土した。この土坑は、掘立柱建物に伴う、いわゆる南東隅土坑と呼ばれるものである。鉄滓と共に共存する遺物は、ロクロ土師器や南伊勢系土師器・山茶碗などの土器類と鉄製品などがあり、遺物における大きな時期差もみられないことから、良好な資料と言える。

出土した鉄滓は、整理時に水洗いでの洗浄と乾燥のち、ビニール袋に入れて保存したものである。なお、鉄滓の分析調査にかかる業務委託は、平成28年度に2回に分けて実施した。以下、実施した業務委託の単位で分析調査の結果を報告する。

2 出土鉄滓3点の分析調査

(1) いきさつ

山見遺跡は三重県多気郡多気町下出江に所在する。

平安時代末期（12世紀後半～末）と推定される土坑（S K318）から、複数の鉄滓が出土している。当遺跡での鉄器生産の実態を検討する目的から、調査を実施する運びとなった。

(2) 調査方法

2-1. 供試材

第16表に示す。出土鉄滓3点を調査した。

2-2. 調査項目

i) 肉眼観察

分析調査する遺物の調査前の観察所見を記載した。

ii) マクロ組織

顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

iii) 顕微鏡組織

鉄滓の鉱物組成や金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3 μm と1 μm で鏡面研磨した。また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。

iv) ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行い、文獻硬度値に照らして、鉄滓中の結晶の判定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値とした。試料は顕微鏡を用いし、荷重は50gfで測定した。

v) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

日本電子製JXA-8800RL（波長分散型5チャンネル）にて含有元素の定性・定量分析を実施した。定量分析は試料電流 2.0×10^{-7} アンペア、ビーム径3 μm 、補正法はZAFに従った。

試料面（顕微鏡試料併用）に真空中で電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比か

ら元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像 (COMP) は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく、軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施した。

また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性X線像の撮影も適宜行った。

vi) 化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO) : 容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化珪素 (SiO₂)、酸化アルミニウム (Al₂O₃)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K₂O)、酸化ナトリウム (Na₂O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO₂)、酸化クロム (Cr₂O₃)、五酸化燐 (P₂O₅)、バナジウム (V)、銅 (Cu)、二酸化ジルコニウム (ZrO₂) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

(3) 調査結果

YAM-1 : 椀形鍛冶滓

i) 肉眼観察 : やや大形の椀形鍛冶滓の破片 (169.2g) で、上下面と側面の一部は本来の表面で、側面4面は破面である。上面表層には、羽口先端の溶融物 (ガラス質滓) が点在する。また広い範囲で茶褐色の鉄錆化物が薄く付着するが、まとまった鉄部はみられない。滓の地の色調は黒灰色で、弱い着磁性がある。下面表層は細かい木炭痕による凹凸が目立ち、淡褐色の鍛冶や床土が付着する。

ii) マクロ組織 : 第39図①に示す。細かい気孔の多い鍛冶滓である。観察面ではまとまった金属鉄 (またはその錆化物) はみられない。

iii) 顕微鏡組織 : 第39図②③に示す。②の青灰色部は木繊維中に鉄錆 (水酸化鉄) を含む微細な木炭破片である。内部には導管が観察される。広葉樹材の黒炭と推定される。また滓中には白色樹枝状結晶

ウスタイト (Wustite : FeO)、淡灰色柱状結晶ファヤライト (Fayalite : 2FeO·SiO₂)、暗灰色多角形結晶ヘルシナイト (Hercynite : FeO·Al₂O₃) が晶出する。

iv) ピッカース断面硬度 : 第39図③の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は453HV、461HVであった。ウスタイトの文献硬度値450~500HVの範囲内であり、ウスタイトと推定される。また淡灰色柱状結晶の硬度値は626HVであった。ファヤライトの文献硬度値600~700HVの範囲内で、ファヤライトと推定される。さらに暗灰色多角形結晶の硬度値は1081HVと非常に硬質であった。この硬度値と結晶の色調・形状などの特徴、および後述のEPMAを用いた定性・定量分析の結果から、ヘルシナイトと推定される¹⁾。

v) EPMA調査 : 第39図④に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。白色樹枝状結晶は特性X線像では鉄 (Fe)、酸素 (O) に強い反応がある。定量分析値は93.2% FeO-1.1%TiO₂ (分析点1) であった。ウスタイト (Wustite : FeO) と推定される。暗灰色多角形結晶は特性X線像では鉄 (Fe)、アルミニウム (Al)、酸素 (O) に強い反応がある。定量分析値は47.7% FeO-49.3% Al₂O₃ (分析点2) であった。ヘルシナイト (Hercynite : FeO·Al₂O₃) に同定される。淡灰色柱状結晶は特性X線像では、鉄 (Fe)、珪素 (Si)、酸素 (O) に反応がある。定量分析値は63.6% FeO-2.7% MgO-31.3% SiO₂ (分析点3) であった。ファヤライト (Fayalite : 2FeO·SiO₂) で、少量マグネシア (MgO) を固溶する。素地部分の定量分析値は42.5% SiO₂-19.7% Al₂O₃-7.7% CaO-5.5% K₂O-5.2% Na₂O-16.4% FeO (分析点4) であった。非晶質珪酸塩である。

vi) 化学組成分析 : 第17表に示す。全鉄分 (Total Fe) 43.93%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は20.04%、酸化第一鉄 (FeO) が48.63%、酸化第二鉄 (Fe₂O₃) 8.71%の割合であった。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) は38.27%とやや高めであるが、塩基性成分 (CaO+MgO) の割合は2.95%と低い。主に製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は0.46%、バナジウム (V) が0.01%と低値であった。また酸化マンガン (MnO) は0.09%、銅 (Cu) も<0.01%と低値である。

当鉄滓は主に鉄酸化物と粘土溶融物 (SiO₂主成分)

からなり、製鉄原料起源の脈石成分 (TiO₂、V、MnO) は、低減傾向が顕著であった。以上の特徴から、鍛錬鍛冶滓に分類される。

YAM-2：梘形鍛冶滓

i) 肉眼観察：小形の梘形鍛冶滓破片 (52.4g) である。上下面と側面1面は本来の表面、側面3面は破面。上面表層は被熱した炭を含む黒色ガラス質滓である。これに対して滓の地の色調は黒灰色で、弱い着磁性がある。また下面はきれいな椀状で、全体に淡褐色の鍛冶炉床土が薄く附着する。

ii) マクロ組織：第40図①に示す。上側の暗灰色部は、内部に微細な石英・長石類を含むガラス質滓で、羽口先端などの粘土溶融物と推定される。下側の明灰色部は鍛冶滓である。

iii) 顕微鏡組織：第40図②③に示す。②の灰褐色多角形結晶はマグネタイト (Magnetite: FeO・Fe₂O₃)、③の暗色淡灰色柱状結晶ファヤライトである。鉄チタン酸化物の結晶はなく、鍛錬鍛冶滓の晶癖といえる。

iv) ビッカース断面硬度：第40図②の灰褐色多角形結晶の硬度を測定した。硬度値は513Hvであった。マグネタイトの文献硬度値500～600Hvの範囲内であり、マグネタイトと推定される。また③の淡灰色柱状結晶の硬度値は633Hv、642Hvであった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内、ファヤライトと推定される。

v) EPMA調査：第40図④に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。灰褐色多角形結晶の定量分析値は82.6%FeO-6.7%Al₂O₃-1.2%TiO₂ (分析点5) であった。マグネタイト (Magnetite: FeO・Fe₂O₃) で、少量のアルミナ (Al₂O₃)、チタニア (TiO₂) を固溶する。淡灰色針状結晶の定量分析値は41.0%FeO-42.3%SiO₂ (分析点6) であった。フェロシライト (Ferrosilite: FeSi₂O₇) と推定される。素地の定量分析値は54.6%SiO₂-11.2%Al₂O₃-7.2%CaO-3.9%K₂O-1.2%Na₂O-20.5%FeO (分析点7) であった。非晶質珪酸塩である。

もう1視野、ガラス質滓部分の調査を実施した。第40図⑤に反射電子像 (COMP) を示す。写真上側の砂粒の定量分析値は98.1%FeO (分析点8) であった。石英 (Quartz: SiO₂) に同定される。淡灰色柱状結晶の定量分析値は60.8%FeO-3.4%MgO-31.0%SiO₂

(分析点9) であった。(Fayalite: 2FeO・SiO₂) で、少量マグネシア (MgO) を固溶する。9.5%K₂O-25.4%Al₂O₃-64.3%SiO₂ (分析点10) であった。正長石 (Orthoclase: KAlSi₃O₈) と推定される。素地の定量分析値は59.4%SiO₂-9.8%Al₂O₃-5.4%CaO-3.8%K₂O-2.0%Na₂O-14.0%FeO (分析点11) であった。非晶質珪酸塩である。

vi) 化学組成分析：第17表に示す。全鉄分 (Total Fe) の割合は23.05%とやや低めである。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は0.08%、酸化第1鉄 (FeO) が21.37%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 9.10%の割合であった。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) の割合は62.03%と高い。塩基性成分 (CaO+MgO) は3.91%であった。主に製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は0.43%、バナジウム (V) が0.01%と低値であった。また酸化マンガン (MnO) も0.08%、銅 (Cu) <0.01%と低値であった。

当鉄滓は炉材粘土 (SiO₂主成分) の溶融物の割合の高い滓であった。製鉄原料起源の脈石成分 (TiO₂、V、MnO) の低減傾向が顕著で、鍛錬鍛冶滓に分類される。

YAM-3：鍛冶滓

i) 肉眼観察：ごく小形の鍛冶滓破片 (19.2g) で、側面は全面破面である。弱い着磁性があり、表面は薄く茶褐色の土砂または鉄錆物が附着するが、まとまった鉄部はみられない。

ii) マクロ組織：第41図①に示す。細かい気孔の多い鍛冶滓である。内部にはごく微細な錆鉄部が若干点存在する。

iii) 顕微鏡組織：第41図②③に示す。②は滓部の拡大である。白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライト、微細暗灰色結晶ヘルシナイトが晶出す。③中央は微細な金属鉄で、3%ナイタルで腐食したところ、亜共析組織 (C<0.77%) が確認された。

iv) ビッカース断面硬度：第41図②の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は453Hv、458Hvであった。ウスタイトの文献硬度値の範囲内、ウスタイトと推定される。淡灰色柱状結晶の硬度値は664Hvであり、ファヤライトと推定される。

v) EPMA調査：第41図④に滓部 (第41図③と同一

視野)の反射電子像 (COMP) を示す。中央の微細明白色部は特性X線像では、鉄 (Fe) にのみ強い反応が見られる。定量分析値は100.5%Fe (分析点12) であった。金属鉄 (Metallic Fe) である。白色樹枝状結晶は特性X線像では、鉄 (Fe)、酸素 (O) に反応がある。定量分析値は93.7%FeO (分析点13) であった。ウスタイト (Wustite: FeO) と推定される。微細暗灰色結晶は特性X線像では鉄 (Fe)、アルミニウム (Al)、酸素 (O) に強い反応がある。定量分析値は48.8%FeO-50.6% Al₂O₃ (分析点14) であった。ヘルシナイト (Hercynite: FeO·Al₂O₃) に同定される。淡灰色柱状結晶は特性X線像では、鉄 (Fe)、珪素 (Si)、酸素 (O) に反応がある。定量分析値は64.1%FeO-1.8%MgO-30.5%SiO₂ (分析点15) であった。ファヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) で、少量マグネシア (MgO) を固溶する。素地部分の定量分析値は42.6%SiO₂-19.9%Al₂O₃-8.7%CaO-5.7%K₂O-3.2%Na₂O-18.3%FeO (分析点16) であった。非晶質珪酸塩である。

vi) 化学組成分析: 第17表に示す。全鉄分 (Total Fe) 53.52%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は<0.01%、酸化第1鉄 (FeO) が49.78%、酸化第2鉄 (Fe₂O₃) 21.22%の割合であった。造滓成分 (SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O) 22.85%で、このうち塩基性成分 (CaO+MgO) は1.64%と低値である。主に製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は0.31%、バナジウム (V) が0.02%であった。また酸化マンガン (MnO) は0.06%、銅 (Cu) も<0.01%と低値である。

当鉄滓も製鉄原料起源の珪石成分 (TiO₂、V、MnO) の低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓に分類される。鉄酸化物の割合が高めであり、主に鉄素材の吹き減り (酸化に伴う損失) で生じた滓と推定される。

(4) まとめ

山見遺跡 (第1次調査地区) から出土した鉄滓3点は、いずれも製鉄原料起源の珪石成分 (TiO₂、V、MnO) の低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓に分類される。遺跡内で鉄素材を熱間鍛打加工して、鍛造鉄器が作られたことを示すものといえる。

(日鉄冶金テクノロジー(株)八幡事業所・TACセンター 鈴木瑞穂)

注

(1) 日刊工業新聞社『焼結鉍組織写真および識別法』1968年。

ウスタイトは450~500HV、マグネタイトは500~600HV、ファイヤライトは600~700HVの範囲が提示されている。[またマグネタイトにアルミナ (Al₂O₃) が加わり、ウルボスピネルとヘルシナイトを主な端成分とする固溶体となると硬度値は上昇する。ヘルシナイトでは1000HVを越える値を示す。]

3 出土鉄滓1点の分析調査

(1) いきさつ

山見遺跡は三重県多気郡多気町下出江に所在する。平安時代末期 (12世紀後半~末) と推定される土坑 (SK318) から、鉄滓が出土している。当遺跡での生産の実態を検討する目的から、調査を実施する運びとなった。

(2) 調査方法

2-1. 供試材

第19表に示す。出土鉄滓1点を調査した。

2-2. 調査項目

i) 肉眼観察

分析調査する遺物の調査前の観察所見を記載した。

ii) マクロ組織

顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

iii) 顕微鏡組織

鉄滓の鉱物組成や金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3μmと1μmで鏡面研磨した。また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。

iv) ピッカース断面硬度

ピッカース断面硬度計 (Vickers hardness Tester) を用いて硬さの測定を行い、文獻硬度値に照らして、鉄滓中の結晶の判定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重

を除いた商を硬度値とした。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は50gfで測定した。

v) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査
日本電子製JXA-8800RL (波長分散型5チャンネル)にて含有元素の定性・定量分析を実施した。定量分析は試料電流 2.0×10^{-11} アンペア、ビーム径3 μm 、補正法はZAFに従った。

試料面 (顕微鏡試料併用) に真空中で電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像 (COMP) は、調査面の組成の違いを明瞭に表示するものである。重い元素で構成される箇所ほど明るく、軽い元素で構成される箇所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施した。

また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性X線像の撮影も適宜行った。

vi) 化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO) : 容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃焼容量法、燃焼赤外線吸収法

二酸化珪素 (SiO_2)、酸化アルミニウム (Al_2O_3)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K_2O)、酸化ナトリウム (Na_2O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO_2)、酸化クロム (Cr_2O_3)、五酸化燐 (P_2O_5)、バナジウム (V)、銅 (Cu)、二酸化ジルコニウム (ZrO_2) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

(3) 調査結果

YAM-4 : 鍛冶滓

i) 肉眼観察 : ごく小形の鍛冶滓破片 (7.9g) である。全体に細かい木炭痕による不規則な凹凸がある。滓の地の色調は黒灰色で、弱い着磁性がある。表面には茶褐色の鉄錆物が点々と付着するが、まとまった鉄部はなく、特殊金属探知器での反応もな

い。気孔は少なく緻密である。

ii) マクロ組織 : 第42図①に示す。細かい気孔の多い鍛冶滓である。観察面ではまとまった金属鉄 (またはその錆化物) はみられない。

iii) 顕微鏡組織 : 第42図②③に示す。滓中には発達した白色粒状結晶ウスタイト (Wustite: FeO)、淡灰色柱状結晶ファヤライト (Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)、微細な暗灰色結晶ヘルシナイト (Hercynite: $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$) が晶出する。

iv) ピッカース断面硬度 : 第42図③の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は436Hv、439Hv、457Hvであった。ウスタイトの文献硬度値¹⁾450~500Hvと比較するとやや軟質であるが、結晶の色調と形状および後述するEPMAを用いた定量分析値からウスタイトと推定される。

v) EPMA調査 : 第42図④に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。白色樹枝状結晶は特性X線像では鉄 (Fe)、酸素 (O) に強い反応がある。定量分析値は98.3% FeO (分析点1) であった。ウスタイト (Wustite: FeO) と推定される。微細暗灰色結晶は特性X線像では鉄 (Fe)、アルミニウム (Al)、酸素 (O) に強い反応がある。定量分析値は63.8% FeO-35.8% Al_2O_3 -1.0% MgO (分析点2) であった。マグネタイト (Magnetite: $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$) とヘルシナイト (Hercynite: $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$) を主な端成分とする固溶体で、さらに少量マグネシア (MgO) を固溶する。淡灰色柱状結晶は特性X線像では、鉄 (Fe)、珪素 (Si)、酸素 (O) に反応がある。定量分析値は67.1%FeO-2.6%MgO-30.4% SiO_2 (分析点3) であった。ファヤライト (Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) で、少量マグネシア (MgO) を固溶する。素地部分の定量分析値は43.6% SiO_2 -22.3% Al_2O_3 -7.6%CaO-8.1%K₂O-4.2%Na₂O-2.4%P₂O₅-11.6%FeO (分析点4)、38.1% SiO_2 -18.8% Al_2O_3 -11.9%CaO-6.1%K₂O-4.0%Na₂O-5.3%P₂O₅-14.3%FeO (分析点5) であった。非晶質珪酸塩である。

vi) 化学組成分析 : 第20表に示す。全鉄分 (Total Fe) が65.03%と高い割合を示す。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は0.12%、酸化第一鉄 (FeO) が68.48%、酸化第二鉄 (Fe₂O₃) 16.01%の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) は10.32%と低めで、塩基性成分 (CaO+MgO) の割合も0.94%

と低い。主に製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の酸化チタン（TiO₂）は0.10%、バナジウム（V）が0.03%と低値であった。また酸化マンガン（MnO）も0.03%と低値である。銅（Cu）は0.02%であった。

（４）まとめ

山見遺跡出土鉄滓（YAM-4）は、製鉄原料起源の脈石成分（TiO₂、V、MnO）の低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓に分類される。また鉄酸化物の割合が高く、熱間加工時の鉄素材の吹き減り（酸化に伴う損失）で生じた滓と推定される。遺跡内で鉄素材を熱間鍛打加工して、鍛造鉄器が作られたことを示すものといえる。

（日鉄冶金テクノロジー(株)八幡事業所・TACセンター 鈴木瑞穂）

註

（１）日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968年。

ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。【またマグネタイトにアルミナ（Al₂O₃）が加わり、ウルボスピネルとヘルシナイトを主な端成分とする固溶体となると硬度値は上昇する。ヘルシナイトでは1000Hvを越える値を示す。】

第19表 供試材の履歴と調査項目 (2)

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		調査項目					備考		
					大きさ(mm)	重量(g)	メタル度	マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折		EPMA	化学分析
YAM-4	山見 (第1次)	SK318	銅治湾	12c後半 ~末	32.0 × 19.1 × 13.5	7.9	なし	○	○	○	○	○	○	

第20表 供試材の化学組成 (2)

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	化学組成 (%)																					
					全成分金属量 (Total Fe)	酸化第1鉄量 (Fe ₂ O ₃)	酸化第2鉄量 (FeO)	酸化二酸化チタン (TiO ₂)	酸化シリカ (SiO ₂)	酸化アルミナ (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化ナトリウム (Na ₂ O)	酸化ケイ素 (SiO ₂)	酸化亜鉛 (ZnO)	酸化亜鉛 (ZnO)	酸化銅 (Cu ₂ O)	酸化亜鉛 (ZnO)	酸化銅 (Cu ₂ O)	酸化亜鉛 (ZnO)	酸化銅 (Cu ₂ O)					
YAM-4	山見 (第1次)	SK318	銅治湾	12c後半 ~末	65.03	0.12	68.48	16.01	6.85	2.95	0.55	0.39	0.32	0.16	0.03	0.10	0.06	0.000	0.81	0.29	0.03	0.02	<0.01	10.32	0.159	0.002

第21表 出土遺物の調査結果まとめ (2)

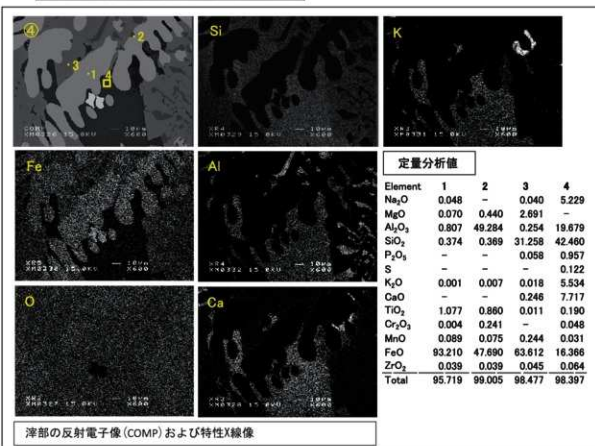
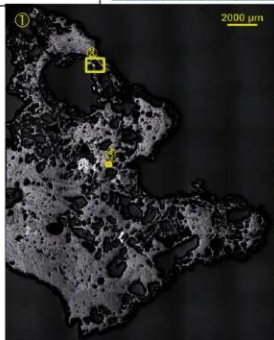
符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成 (%)						所見			
						Total Fe	Fe ₂ O ₃	FeO	TiO ₂	塩基性成分	V		MnO	造湾成分	Cu
YAM-4	山見 (第1次)	SK318	銅治湾	12c後半 ~末	薄部:W+HF、微小金属鉄	65.03	16.01	0.94	0.10	0.03	0.03	0.03	10.32	0.02	銅鑄銅治湾

W:Wustite (FeO), H:Hercynite (FeO·Al₂O₃), F:Feasite (2FeO·SiO₂)

YAM-1

椀形鍛冶滓

①マカ組織
②左側:木炭破片、広葉樹材、③滓部:ウライト・メノウイト・ワケライト、(硬度:50gf)

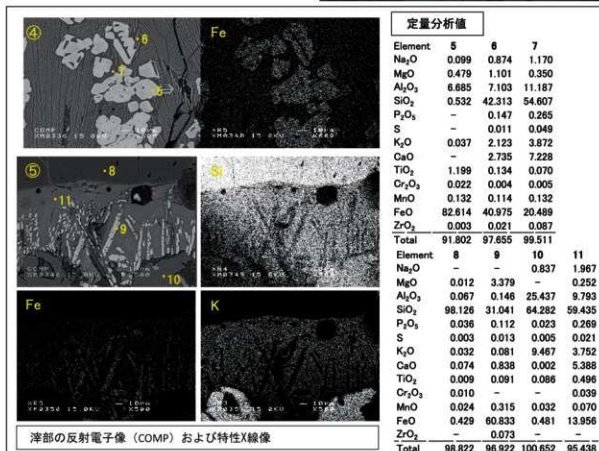
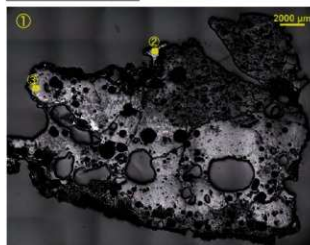
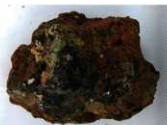


第39図 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織・EPM調査結果(1)

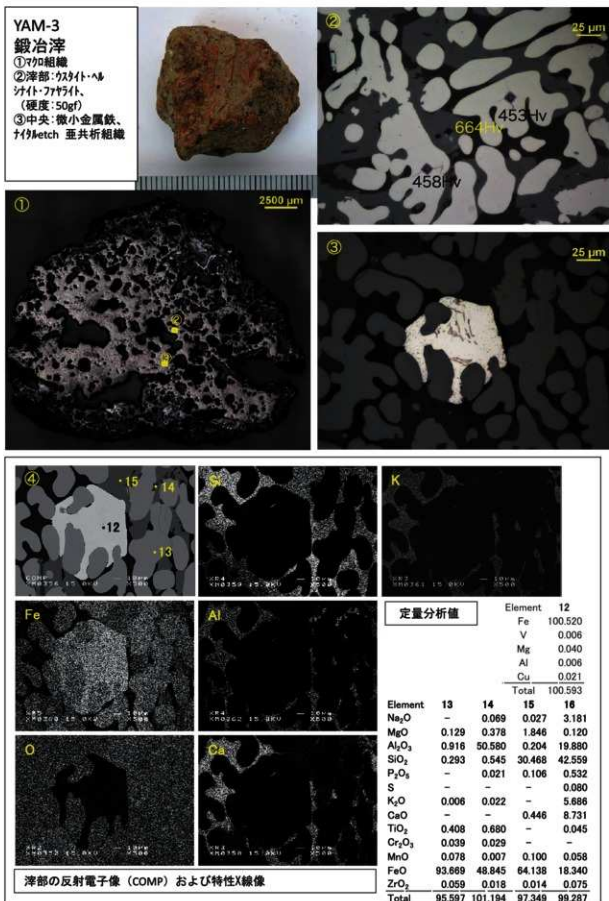
YAM-2

梲形鍛冶滓

- ①加工組織、上側暗色部：加工質滓
- ②滓部：マッセル
- ③滓部：ファライト、微小明白色粒：金属鉄、(硬度:50gf)



第40図 梲形鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果(2)



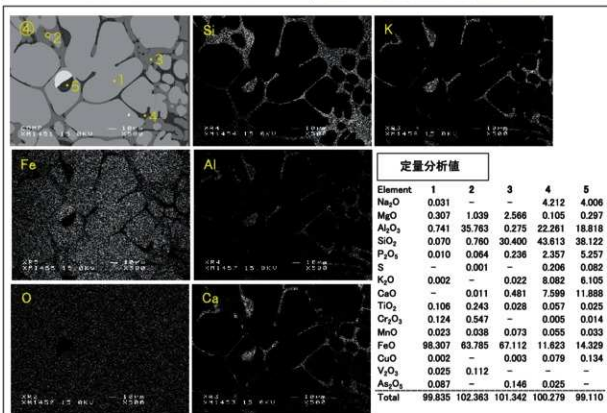
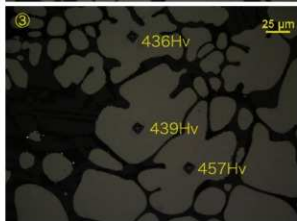
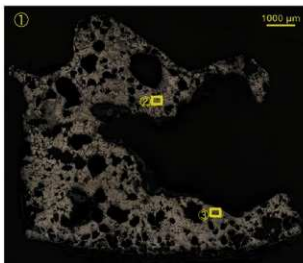
第41図 鍛冶滓の顕微鏡組織・EPM調査結果 (1)

YAM-4

鍛冶滓

①マクロ組織

②③微小明白色粒：金
 属鉄、滓部：ウツト・
 ファライト、硬度：436Hv、
 457Hv (50gf)：ウツト



滓部の反射電子像 (COMP) および特性X線像

第42図 鍛冶滓の顕微鏡組織・EPMA調査結果(2)

X 考 察

1 波板状の凹凸痕跡について

(1) 検出された波板状の凹凸痕跡について

下田遺跡（第1次）では、波板状の凹凸痕跡を持つ道路（S Z 003）を確認した（第14図）。V章2節で記したように、確認した道路は、当初溝という認識で調査を行ったため、調査時における記録方法など不十分さが否めなく、詳細な検討に耐えるだけの情報に乏しい。しかし、検出された状況から、若干の検討をすることは可能である。以下に事実関係を整理・補足も行いながら検討を行いたい。

S Z 003には、2つの路面（路面A・B）があると考えられ、波板状の凹凸痕跡は路面Aで確認された（第14図）。凹部分の平面形状は、楕円形ないし長楕円形を呈し、深さは5cm以内に収まる窪みである。これらは約30～50cmの間隔で、路面を直交するかたちで配されており、検出した道路幅員内に偏りなく分布している。

(2) 波板状の凹凸痕跡の形成要因

波板状の凹凸痕跡の形成要因としては、いくつかの考えが示されており、近江俊秀氏が以下に整理している^[1]。①道路に敷かれた枕木などの痕跡、②道路における牛馬の通行痕跡、③道路の地業に伴う痕跡などである。つまり、①は道路の利用形態に関わる痕跡、②は道路として必然的に生じる自然発生的な痕跡、③は作道に伴う工法に結びつく痕跡として理解される。また、川部浩司氏は、伊勢地域における波板状の凹凸痕跡をもつ道路遺構の集成（第22表）を行う中で^[2]、事例を検討した結果、凹凸痕跡の形状を含む差異は、明確な道路地業を示す痕跡を除き、人や牛馬などの往来や道路の使用頻度の格差が反映されていると指摘している^[3]。

それでは、下田遺跡S Z 003にある波板状の凹凸痕跡は何による痕跡であろうか。まず、凹部分の平面形状が楕円・長楕円形にある点である。道路地業に関わる痕跡であった場合、楕円・長楕円形に限らず、円形のものも含めて凹凸が細かい単位で検出される

第22表 波板状の凹凸痕跡が検出された伊勢地域における事例

遺跡名	所在地	遺構名	文献
四分北遺跡	鈴鹿市田分町	ビット列1・2他 SD16・17・65他	三重県埋蔵文化財センター『四分北遺跡発掘調査報告』2000年 三重県埋蔵文化財センター『四分北遺跡（第3次）発掘調査報告』2005年
郡山野田遺跡	鈴鹿市郡山町	SC2・3	鈴鹿市考古博物館『西川（第3次）・郡山野・郡山野田遺跡発掘調査報告』2009年
大島遺跡	亀山市大岡寺町	SA4・SD20・21	三重県埋蔵文化財センター『大島遺跡』1994年
小野城跡	亀山市小野町	SR4018	三重県埋蔵文化財センター『小野城跡発掘調査報告-第4・5・6次調査-』2010年
川北城跡	津市大里川北町	SR5141	津市教育委員会『川北遺跡・川北城跡発掘調査報告』2005年 栗原康光『川北遺跡・川北城跡調査概報』『三重の古文化』第32号 三重郷土会 1984年
上野遺跡	津市戸本町	—	九州市教育委員会・上野遺跡調査団『上野遺跡だより』No.1～4 2000年・2001年 三重大学教育学部日本史研究室『三重大久居市上野遺跡に関する総合研究』2002年 田中富久雄『上野遺跡』『三重史料』資料編考古2 三重県 2008年
六六日遺跡	津市大里産出町	—	三重県埋蔵文化財センター『六六日遺跡（B-1地区）発掘調査報告』2006年
位田遺跡	津市北内路町	—	三重県埋蔵文化財センター『位田遺跡発掘調査報告』1999年
替田遺跡	津市南河路町	SR1312	三重県埋蔵文化財センター『替田遺跡（第1・2次）発掘調査報告』2009年
木造平坂遺跡	津市木造町	波板A・B・C・D	三重県埋蔵文化財センター『木造平坂遺跡・地出遺跡・井ノ上遺跡発掘調査報告』2012年
舞出之遺跡	松阪市舞出町	SA607・608	三重県埋蔵文化財センター『舞出之遺跡発掘調査報告2』2010年
堀田遺跡	松阪市堀野宮古町	SR104～115	三重県埋蔵文化財センター『堀田遺跡第6次調査』2005年
上野垣内遺跡	松阪市堀野島田町	SA2	三重県教育委員会『上野垣内遺跡』『昭和64年度奈良県編年整理事業地蔵 埋蔵文化財発掘調査報告』1980年
堀町遺跡	松阪市堀町	—	三重県埋蔵文化財センター『堀町遺跡』2000年
琵琶垣内遺跡	松阪市意形町	SR537	三重県埋蔵文化財センター『琵琶垣内遺跡（第1・4次）発掘調査報告』2000年
倉宮跡	多気郡明和町	SR2427	三重県倉宮跡調査事務所『三重県倉宮跡調査事務所年報1981 史跡倉宮跡 発掘調査概報』1982年
古里遺跡	多気郡明和町	SD108	三重県教育委員会『古里遺跡発掘調査概報』1972年 三重県教育委員会『古里遺跡発掘調査報告 乙地区』1973年 三重県教育委員会『古里遺跡発掘調査報告 丁地区』1974年 倉宮史跡博物館『史跡倉宮跡 平成16年度発掘調査概報』2006年
丁長遺跡	多気郡明和町	ビット他	三重県埋蔵文化財センター『丁長遺跡（第2次）発掘調査報告』2000年 三重県埋蔵文化財センター『丁長遺跡（第1・2次）発掘調査報告』2009年
岩出地区遺跡群	度会郡玉城町 ケカノ江・奥田内地区 左郡地区	—	三重県埋蔵文化財センター『牧山遺跡 左郡地区』『奈良自動車道（勢和-伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告』第6号分 1993年 三重県埋蔵文化財センター『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』1996年
下田遺跡	多気郡多気町	SD703	本報告
第五区垣内遺跡	松阪市湍生田町	溝2	三重県埋蔵文化財センター『第五区垣内遺跡（第3次）発掘調査成果説明会資料』2017年

※川部2012年（註2）に掲載されている表をもとに作成。近年新たに検出された事例を追加。

可能性がある。また、意図的に加圧された場合、凹凸面の硬化や凹部分の底・側面に工具などを使った強い力が加わった痕跡が残ると考えられる。しかし、S Z 003の凹凸面では、円形の凹部分はなく、細かな単位の痕跡もみられず、凹面内も含めて硬化した状態ではない。また、凹面埋土はブロックが混じる攪拌状態の単層であり、路面を改良する意図的な堆積もみられなかった。このような状況証拠から、道路構築に伴う痕跡というには説得力に欠ける。

そうすると、枕木などの路面構造物が置かれた痕跡、あるいは通行痕跡（牛馬を含む）が考えられる。近江氏は、枕木の場合、一定の区間にある凹凸の軸ブレが少なく、平面形態は楕円・長楕円形あるいは橢圓形になる傾向を指摘している¹⁴⁾。牛馬の通行痕跡の場合、約60cm間隔で楕円形の窪みとして現れることが、新家遺跡（大阪府東大阪市）の事例から検討されている¹⁵⁾。下田遺跡 S Z 003の場合、凹凸の軸ブレが少なく、楕円・長楕円形で構成されている点は、枕木などの路面構造物が置かれていた条件に合致するが、凹部分の深さが5cm以内であることから、構造物による圧痕としては浅い印象をもつ。一方、凹部分の間隔が30～50cmとばらつきがあることから、牛馬の通行痕跡であるとも断定したい。

現状の検討では、下田遺跡 S Z 003が道路としてどのような傾度・方法で使用された上で、凹凸痕跡が形成されたものなのかを、明確に断定することはできない。しかし、路面構造物あるいは通行痕跡のいずれかの条件に該当する要素をもっていることは指摘することができる。検討不足である感は否めないが、今後他の事例との比較を行うことにより、その性格をさらに解明することができると言えよう。

2 南東隅土坑の検討

（1）建物屋内にある南東隅土坑について

新神馬場遺跡（第4次）ではS B 217に伴うS K 206（以下、新神馬場S B 217・S K 206）、山見遺跡（第1次）ではS B 330に伴うS K 318（以下、山見S B 330・S K 318）を検出した。これらの土坑は、建物内の南東隅に位置し、いわゆる南東隅土坑と呼ばれる。南東隅土坑については、浅尾悟氏¹⁶⁾や各遺

跡の発掘調査報告書で検討がなされており、既または厨所の可能性が高いと考えられている。

新神馬場遺跡・山見遺跡では、建物と土坑全体を把握できた状態ではないため、厳密な建物と土坑の構造や関係性の議論をするのは困難である。しかし、各土坑からは多くの遺物が出土しており、遺物の出土傾向と廃棄の状況から南東隅土坑を検討したい。

（2）遺物の出土状況

まず、山見S K 318の遺物出土状況（第35図）をみると、埋土上層から大半の遺物が出土しており、底面付近からの出土は極めて少なく、土坑がある程度まで埋没した段階に土器類が一括廃棄された状況を示している。新神馬場S K 206についても、埋土上層から遺物が集中的に出土しており、山見S K 318と同様の状況であると考えられる。このような状況は、大久保遺跡（第3次）S K 315¹⁷⁾でもみられ、遺物は埋土中・上層から出している。

一方、土坑の底面直上を含めて埋土全体から遺物が出土する例があり、上惣作遺跡S K 74では、埋土全体から遺物が出土している¹⁸⁾。同様の例は、大藪遺跡（B地区）S K 73¹⁹⁾、岩出遺跡群（蚊山地区）S K 129・153²⁰⁾でもみられる。

ここで、南東隅土坑における出土遺物とその傾向（第23表）をみると²¹⁾、土師器の皿・鍋や山茶碗などが多くを占め、日常雑器と考えられる器種・器形のもが主体であることがわかる。その中で、中ノ垣外遺跡S K 45のように、遺物の出土が極端に少ない例や全く出土していない例も確認できる。

（3）南東隅土坑の埋没過程と遺物の廃棄

このように、南東隅土坑での遺物の出土状況は様々である。この差異は、土坑が役割を終えた後、埋没過程や遺物廃棄のあり方が異なっていることを示していると言え、以下に整理することができる。

- ①埋没当初から遺物の廃棄が積極的に行われたもの。
- ②埋没が一定程度進行した後、または埋没の最終段階に遺物の廃棄が行われたもの。
- ③埋没過程で遺物の廃棄が一切行われなないもの。

すると、上惣作遺跡や大藪遺跡などの例は①、新神馬場遺跡・山見遺跡や大久保遺跡の例は②、中ノ垣外遺跡の例は③となる。①は、土坑が属する掘立柱建物の廃絶と遺物廃棄の間の時間差が少なく、建

第23表 南東隅土坑における出土遺物一覧表

遺跡名	所在地	遺物名		土器類					陶器					磁器		土製品		石製品		鉄製品	鏡	土境	
		土坑	建物	竈	土	壺	鉢	甕	甕	山形	碓	鉢	鉢	鉢	白磁	土器	土器	磁石	磁石				
西神原遺跡	多気郡多気町下出江	S K206	S B217	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
山見遺跡	多気郡多気町下出江	S K318	S B330	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
上惣作遺跡	いなべ市北勢町阿下富	S K74	S B73	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
大久保遺跡	三重郡菟野町調田	S K316	S B314	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
大敷遺跡	亀山市浪野町	S K73	S B70	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
堂ノ後遺跡	松阪市深長町	S K6	S B5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
草山遺跡	松阪市下村町・久保町	上坑	S B205	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
橋ノ木遺跡 (A地区)	度会郡玉城町岩出	S K27	建物1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		S K5	建物4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		S K4	建物6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
橋ノ木遺跡(C地区)	度会郡玉城町岩出	S K7	建物6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		S K3	建物1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
岩出遺跡群 (取山地区)	度会郡玉城町岩出	S K129	S B128	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		S K103	S B158	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
中ノ垣外遺跡	伊勢市佐八町	S K10	S B9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		S K15	S B14	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		S K28	S B30	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		S K37	S B36	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		S K29	S B40	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		S K45	S B44	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		S K42	S B53	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
		S K41	S B52	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

物の廃絶時期やその状況を反映していると考えられる。②は、土坑が廃絶して埋没が進んだ後に土器類が廃棄されていることから、建物廃絶と遺物廃絶に時間差が生じている可能性がある。山見 S K318 の場合、遺物の出土層位を含めた状況から、土坑の最終埋没段階に廃棄された可能性が高いと考えられるが、下層と上層出土の土器には、大きな時期差が認められないことから、最終埋没までが短期間で建物廃絶とそう時間差が生じていないことが指摘できる。

しかし、②に該当する事例の中には、出土した土器類が建物廃絶との同時性や建物内で使用された日常雑器と安易に断定できないものが含まれていると考えられる。南東隅土坑を「厨房」と解釈する状況証拠として、日常雑器（主に供膳形態）が多く出土することを挙げている場合があるが、遺物の出土状況によっては、短絡的に解釈できない可能性をはらんでいるだろう。今回検討したように、南東隅土坑の調査では、詳細な遺物の出土状況の記録と層位の把握を行うことによって、より土坑の性格に迫る情報を得ることができることを指摘しておきたい。

註

- 近江俊秀『古代国家と道路 考古学からの検証』青木書店 2006年、近江俊秀『道路誕生—考古学からみた道づくり』青木書店 2008年
- 川部浩司「波板状凹凸面からみた伊勢地域の道路遺

構」『Mie history』Vol. 21 三重歴史文化研究会 2012年。川部氏が検討を行った以降、近年の発掘調査で波板状の凹凸痕跡を持つ遺構が弥生5期垣内遺跡で確認されている（三重県埋蔵文化財センター『弥生5期垣内遺跡（第3次）発掘調査成果説明会資料』2017年）。

- 前掲註2、川部2012年。
- 前掲註1、近江2006年。
- 江浦 洋「轍と開発—新家遺跡「土俵敷き遺構」の再検討—」『大阪文化財研究』第10号 1996年
- 浅尾 悟「土坑を伴う中世掘立柱建物について」『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要』IV 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1990年
- 三重県埋蔵文化財センター『大久保遺跡（第3次）発掘調査報告』2017年
- 三重県埋蔵文化財センター『上惣作遺跡』2001年
- 三重県埋蔵文化財センター『研究紀要—千木塚遺跡・大敷遺跡・越越遺跡—』第23号 2014年
- 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告』第6分冊 1993年
- 前掲註7～10、三重県教育委員会「X 中ノ垣外遺跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告』1984年、松阪市教育委員会「草山遺跡発掘調査月報」No. 8 1984年、三重県教育委員会「VII 堂ノ後遺跡」『昭和61年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告』【一本文編—1989年、三重県埋蔵文化財センター「岩出地区内遺跡発掘調査報告』1996年

写 真 图 版



調査前風景(北東から)



1区全景(北西から)



1区壁面土層(西から)



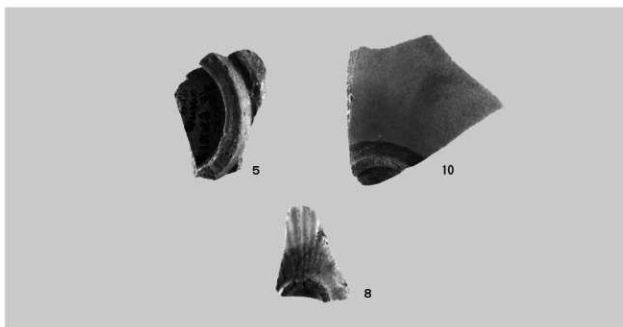
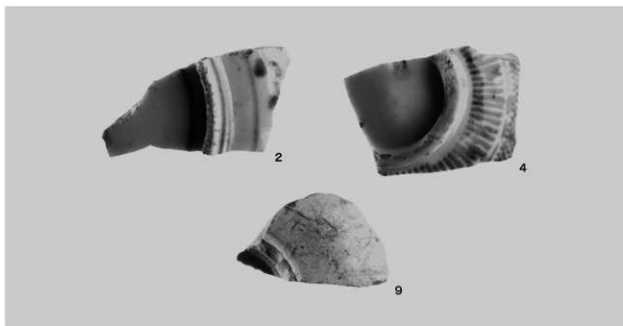
S D01完掘状況(南から)



2区全景(北東から)



2区東壁土層(北西から)





調査前風景（南から）



1区全景（東から）



1区北壁土層(南東から)



S Z003土層(南から)



2区全景(北西から)



3区西半部全景(北西から)



3区西半部全景(南西から)



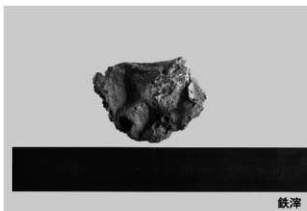
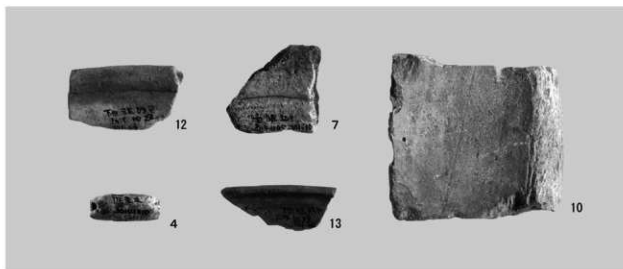
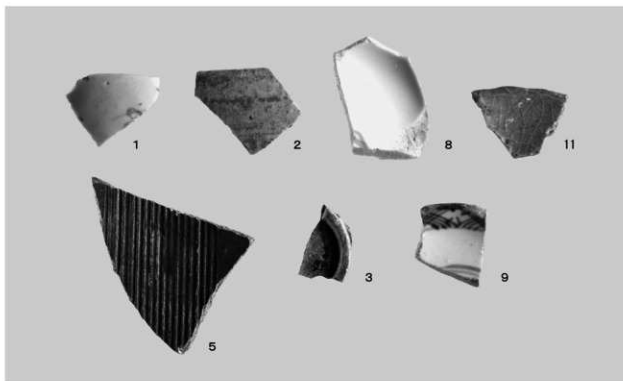
3区中央部全景(西から)



3区東半部全景(北東から)



3区北壁土層(南西から)





調査前風景(南から)



1区調査風景(東から)



1区全景(西から)



1区全景(東から)



2区全景（東から）



S E110土層（南西から）



SK103完掘状況・土層 (北から)



SK108完掘状況・土層 (北から)





調査前風景（南西から）



2区全景（西から）



1区全景（北から）



S D203完掘状況 (西から)



S B217・S K206完掘状況 (南から)







五箇篠山城跡からの遠景（南から）



調査前全体風景（西から）



3区調査前風景(南から)



5区調査前風景(東から)



5区調査風景（南西から）



遺跡見学の様子（南から）



2区全景（西から）



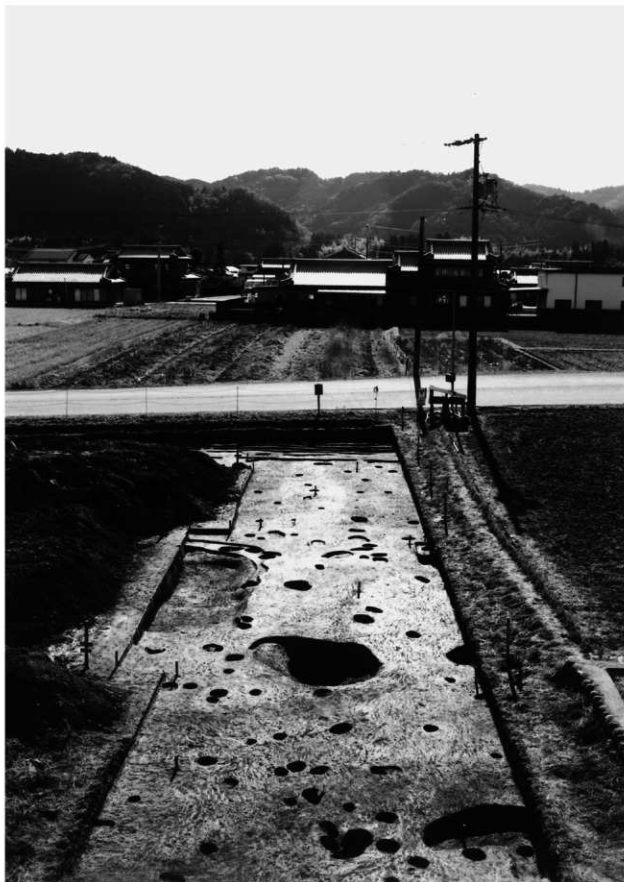
3区全景（北から）



4区全景（東から）



5区全景（西から）



5区全景(北から)



S K318遺物出土状況 (西から)



S K318遺物出土状況 (北から)



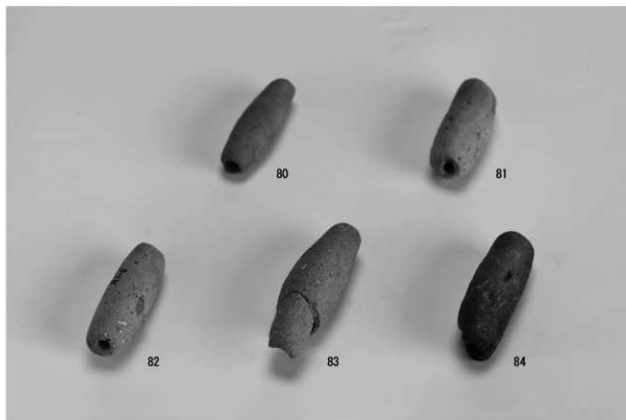
S K318完掘状況 (西から)



S B330・S K318完掘状況 (北から)







報告書抄録

ふりがな	へいせい24～27ねんどこうどすいりきりかくほきばんせいびじぎょう（りやうちく）まいどうふんかびはくつちようきほうこく							
書名	平成24～27年度高度水利機能確保基盤整備事業（出江地区）埋蔵文化財発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	379							
編著者名	渡辺和仁、小原穂也							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL.0596（52）1732							
発行年月日	2018（平成30）年3月9日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うめがしほ遺跡 梅ヶ瀬遺跡	たきぐんたきあひだうしほ 多気郡多気町下出江	441b	101	34度 28分 44秒	136度 28分 34秒	20130306 ～ 20130312	24.0㎡	高度水利機能 確保基盤整備 事業 （出江地区）
うしほA遺跡 屋瀬A遺跡	たきぐんたきあひだうしほ 多気郡多気町下出江	441b	102	34度 28分 40秒	136度 28分 35秒	20130306 ～ 20130312	24.0㎡	高度水利機能 確保基盤整備 事業 （出江地区）
うしほB遺跡 屋瀬B遺跡	たきぐんたきあひだうしほ 多気郡多気町下出江	441b	103	34度 28分 36秒	136度 28分 24秒	20140917 ～ 20141226	584.2㎡	高度水利機能 確保基盤整備 事業 （出江地区）
しもだ遺跡 下田遺跡	たきぐんたきあひだうしほ 多気郡多気町下出江	441b	106	34度 28分 28秒	136度 28分 34秒	20140917 ～ 20141226	647.0㎡	高度水利機能 確保基盤整備 事業 （出江地区）
なかつき遺跡 中切遺跡	たきぐんたきあひだうしほ 多気郡多気町下出江	441b	95	34度 27分 53秒	136度 28分 10秒	20150918 ～ 20160122	211.1㎡	高度水利機能 確保基盤整備 事業 （出江地区）
しんかばやし遺跡 新神馬場遺跡	たきぐんたきあひだうしほ 多気郡多気町下出江	441b	96	34度 27分 55秒	136度 27分 59秒	20150918 ～ 20160122	206.9㎡	高度水利機能 確保基盤整備 事業 （出江地区）
やまけん遺跡 山見遺跡	たきぐんたきあひだうしほ 多気郡多気町下出江	441b	104	34度 28分 7秒	136度 28分 10秒	20150918 ～ 20160122	779.1㎡	高度水利機能 確保基盤整備 事業 （出江地区）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
梅ヶ瀬遺跡	集落跡	—	なし	なし	範囲確認調査
屋瀬A遺跡	集落跡	—	なし	なし	範囲確認調査
屋瀬B遺跡	集落跡	江戸	土坑・溝	土師器・陶磁器	
下田遺跡	集落跡	室町～江戸	溝・道路	土師器・陶磁器・土鍾・鉄滓	波板状の凹凸痕跡を検出
中切遺跡	集落跡	江戸	土坑・井戸・溝	土師器・陶磁器	
新神馬場遺跡	集落跡	鎌倉～室町	掘立柱建物・土坑・溝	土師器・陶器・土鍾・鉄製品	南東隅土坑を検出
山見遺跡	集落跡	平安時代末～鎌倉	掘立柱建物・土坑・溝	縄文土器・石器・土師器・陶器・土鍾・鉄製品・鉄滓	南東隅土坑を検出 磨製石斧が出土
要 約	<p>屋瀬B遺跡（第2次）では、時期不明の溝と土坑を確認した。</p> <p>下田遺跡（第1次）では、複数の溝と道路1条を確認した。道路の路面と考えられる部分では凹凸痕跡（いわゆる波板状の凹凸痕跡）を検出した。これらの遺構は、出土遺物が限定的であるため、不明なものも多いが、室町～江戸時代（15世紀前半以降）と考えられる。</p> <p>中切遺跡（第1次）では、土坑・井戸などを確認した。瀬戸美濃産の陶器、肥前産の磁器をはじめ、江戸時代後半（18世紀中頃～19世紀前半）の遺物が出土した。これらの遺構は「伊勢国飯高郡下出江村全園」にある宅地の状況とおおよそ符合することが明らかとなった。</p> <p>新神馬場遺跡（第4次）では、掘立柱建物や土坑・溝などを確認した。掘立柱建物内部の南東隅では土坑（いわゆる南東隅土坑）を検出した。南伊勢系土師器や山茶碗、土鍾、鉄釘、板状鉄製品をはじめ、鎌倉時代後半～室町時代（13世紀中頃～15世紀前半）の遺物が出土した。</p> <p>山見遺跡（第1次）では、掘立柱建物や溝・土坑などを確認した。掘立柱建物には新神馬場遺跡（第4次）と同様に建物内の南東隅で土坑1基を検出した。南東隅土坑からは、通常の土師器のほか、ロクロ土師器や山茶碗、土鍾、鉄製の盤、鉄滓など平安時代末（12世紀後半）の遺物が多く出土し、土坑内に廃棄された状況が明らかになった。そのほか、縄文時代後期と考えられる縄文土器の深鉢の破片や磨製の両刃石斧が出土し、近隣に縄文時代の遺構が存在する可能性が推測できる成果となった。</p> <p>また、山見遺跡（第1次）から出土した鉄滓については、鉄成分の分析調査を行い、鍛造鉄製品を加工した際のものであることが明らかとなった。</p>				

三重県埋蔵文化財調査報告 379

平成24～27年度高度水利機能確保基盤整備事業（出江地区）

埋蔵文化財発掘調査報告

2018（平成30）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 共立印刷株式会社
